
九月文
KUTSUKI AYA
銀の竜騎士団
王女とウサギの秘密の王宮
The Silvery Knights of Dragon
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

王女とウサギの秘密の王宮

九月　文

BEANS BUNKO
17004
角川ビーンズ文庫

銀の竜騎士団

王女とウサギの秘密の王宮

九月　文

17004

角川ビーンズ文庫

CONTENTS

序章
予兆
7

第1章
真実の姿を明かすとき　－帝国からの申し入れ－
9

第2章
使者到来
50

第3章
国使の接待
88

第4章
亀裂
127

第5章
晩餐会
151

第6章
竜殺し（ドラゴンスレイヤー）の咎人
172

第7章
暁の向こうに
214

終章
それぞれの認識
241

あとがき
248



シエラ=アーシェラータ=ローレンシア

年齢:15

ローレンシアの世継ぎの王女。
ルーの誓約者。

Laurensia Dragon Knights



ルーシェ

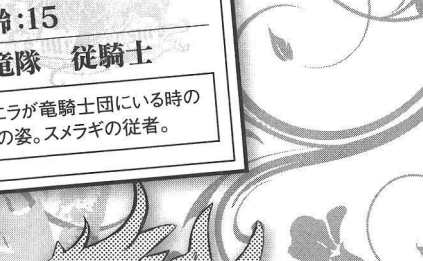
年齢:15

黒竜隊　従騎士

シエラが竜騎士団にいる時の
仮の姿。スメラギの従者。

ルー

シエラと誓約している赤竜。
時間限定で成長できる。



Characters

Laurensia Dragon knight



スメラギ

年齢:18

黒竜隊隊長

ルーシェの上官。あだ名が「死神」の最年少隊長。

Laurensia Dragon knight



シリス

年齢:19

竜騎士団団長

シエラの従兄で、空の聖竜の主。

Laurensia Dragon knight



カイト

年齢:16

黒竜隊　従騎士

スメラギの従者で、ローレンシアの貴族出身。

イラスト／明咲トウル

序章　予兆

朝陽が水面に姿を現す。

そのやわらかな陽光は河を照らし出し、波は合間に宝玉を隠し持つかのようにきらきらと輝いている。そしておなじ光を受けた純銀の髪は肩を伝い、さらりと背中を流れていた。

（え……どうして？）

竜騎士団の隊服を着ているときは王女シエラではなく、竜騎士見習いルーシェだ。

（ルーシェなら髪を結っているはずなのに――）

ほどかれて自由を得た髪は水面を渡る風にゆるやかに躍る。そして鏡はなくともいま自分が紅をさし、軽く白粉をはたいていることがわかった。化粧もまたルーシェには無縁のものだ。

なによりいま着ているのは着なれた隊服ではなかった。

竜騎士団の騎士が着るのは黒隊服、だがいま自分が着ている隊服は白。意匠は黒の隊服とおなじまま、色だけ白と銀を基調としたものに変わっている。

白の隊服を着るのは騎士団長の――いや、王族であるシリスだけだ。

（どうして……）

自分はこんな姿を黒の双眸に晒しているのだろう。

数歩の距離を置いて見つめる瞳はたしかに自分の姿を捉えている。だがその者はこの姿に驚きもせず、低く告げた。

「おまえの本来の居場所は黒竜隊じゃない」

その一言に胸を突かれる。

――どうして。なぜ。

そんな疑問が脳内を埋めつくすのに、衝撃のあまり頭がまともに動かない。

そしてつづく言葉にルーシェの――いや、シエラの息が止まった。

「おまえのいるべき場所は王宮なんじゃないのか」

(隊長は、私のことを知っているの……?)

自分が王女シエラだと、いつ、どこで知ったのだろう。

自分が言った覚えはない。いつか知れるとは思っていたが、それが明かされるのは十六歳の誕生日――王宮の広間でのはずだ。

この秘密はその日までずっと抱えてゆくはずだったのに。

黒の双眸に見つめられ、喉が締めつけられたように言葉が出ない。いや、締めつけられているのは自分の心だ。心を縛られて言い逃れなどできるはずがない。

「わたし、は……」

喉の奥から絞りだした声は、水面を渡る風にさらわれていった。

第1章　真実の姿を明かすとき

―帝国からの申し入れ―

青一色の空に流れゆく白雲。それをかすめるように悠然と黒の翼を広げる一群がある。

連なる雁のように陣形を組む幾十もの翼。

その隊列はまるで空に記した記号のように一頭一頭の間隔は等しく、幾度旋回して陣の形を変えようともその一体性が失われることはない。

ルーシェは垂直上昇したそれらを、空の眩しさに目を細めながら眺めやった。

（どうやって練習したのかな……）

大空に展開しているのは黒竜隊の部隊演習だ。

陸軍の一糸乱れぬ部隊演習にも驚嘆したものだが、陸ならば基準を定めて陣形が乱れれば立ち止まって整列し直すことができる。だが空ではそうはいかない。基準もなければ立ち止まることもできないし、風向や風力も常に変化している。竜に乗るだけでも大変だというのに、自在に操るまでにどれほどの訓練が必要なのだろう。

統制の取れた動きは軍の規律の表れだ。ローレンシアには竜の加護がある――それを見せつければ戦の抑止力にもなる。前線の砦ではアズィール帝国との国境であるレーヌ河でこの演習を行っているはずだ。

（そういえば今朝の夢、どこかの河っぷかったような……？）

目を覚ますなり遠ざかってゆく夢に、かすかに覚えているのは昇りゆく暁、満ちゆく光に照らされた古びた石畳、そして照り返す水面――

ローレンシアには神の山の雪解け水が下る川がいくつもあるが、海と見紛うほどの大河といえば国境のレーヌ河しかない。

（どうしてわたしがそんな所に？　それにわたし、いつもと恰好がちがったような……）

その思惟は吹き荒れる風に遮られた。舞い上がる砂埃からとっさに二の腕で目をかばう。

視界のきかない中、聞こえたのはばさりと風を切る音。

（竜の羽音――！）

砂埃に半ば涙目になりながら目を開けると、真正面にあったのは黒曜石のような竜の眼、そしてぎろりと睨みつけてくる黒竜の手綱を取っていたのはおなじく鋭い黒の瞳の持ち主だった。

「おかえりなさ……っ！」

ルーシェはとっさに敬礼したが、砂埃に噎せてつづきは声にならない。

右肩に乗っていたルーも目に砂が入ったのか「きゅぅ」と声を上げ、なにやってんだと傍らにいた同僚から冷ややかな視線を向けられた。

（だってさっきまであんなに遠くにいたのに！）

竜の翼なら距離を詰めるなど一瞬、しかもその竜は黒竜の頂点に立つ〈闇〉の聖竜だ。国の

紋章に描かれる姿そのままの大きな翼は、どの竜よりも力強く風を切る。
咳が治まってルーシェが見上げると、すでにその人物は竜の背になかった。
記録は取れたな、各班分かれて事後打ち合わせだ、記録係も一緒に来い――
各班長への指示を側近に伝え、次々に露台に降下してくる黒竜の群れを竜舎に向かわせながら〈闇〉の聖竜の主――スメラギはルーシェに向きなおる。
眼鏡のガラス越しに、ローレンシア人にはめずらしい黒の瞳がルーシェを射る。
闇の聖竜の主であるスメラギは〈黒竜公〉と呼ばれる身だ。しかし眼鏡で数段怜悧さを増した視線にさらされているいま、もうひとつの呼び名の方が似つかわしい気がした。
――死神。
スメラギに付いてまわる陰の名だ。しかしスメラギの過去を知らずともそう言いだした者の気持ちがわかる。
死の使いは、きっとこうして零下の空気をまとって襲いかかってくるにちがいない。
「――ルーシェ」
「はいっ！」
「俺はおまえに演習を見ているように言ったはずだが？」
「はい、そのとおりです！」
「なら――いったいだれがぼけっと突っ立っていろと言った!!」

「申し訳ありません……ッ！」

弾かれたようにルーシェは頭を下げる。任務中に意識が逸れていたのは事実で、反論の余地がない。

（今日の罰則はなに？　やっぱり簀巻き……!?）

ルーシェが頭を下げて震えていると、スメラギは「顔を上げろ」と声を落とした。

（今度こそ本気で叩かれる!!）

しかし上官命令は絶対だ。ルーシェがおそるおそる顔を上げると、予想に反してスメラギはかすかに首を傾げてルーシェの顔を覗きこんできた。

（えっ……？）

目線が合って心拍数が急上昇する中、スメラギは静かに訊ねる。

「……寝不足か？」

「あ、いえっ……ちゃんと、寝ています、けど……」

（もしかしてクマができてる……？）

ちゃんと鏡で確認してきたはずだが、眩しい陽光の下だからこそわかることもある。

恐々と様子を窺うと、「健康管理ができているならそれでいい」とスメラギは離れた。

「デュラクは任せた」

「はい！」

スメラギはいつものように腰に佩いていた銀の指揮杖を抜く。
銀の柄に黒竜の紋章があしらわれたその杖は黒竜隊隊長の証だ。それを竜の目の前で手渡すことで、誓約した主にしか従わない竜が託された相手に従うようになる。
ルーシェが近づいて指揮杖を恭しく預かったそのとき。
「――――根を詰めるのもほどほどにしろ」
スメラギは囁くように一言、ルーシェの耳元で落として傍らをすり抜けていった。
おそらく他の隊員が気づかないほどの小さな声音。
現に隊員たちは固まるルーシェに気づかず次々に露台をあとにしてゆく。だがその場に取り残されたルーシェはじわじわと顔に血が上ってゆくのを感じた。
（ずるいずるいずるい～～～～!!）
規則集を読んでいて寝不足なのは事実だ。しかし夜通し起きてでも頭に叩きこまなければならない立場なので、消灯時間を過ぎてからも寝台で灯りを点して目を通していた。
（まさかそれを知られていたなんて……！）
女子棟は男子棟と中庭を挟んだ向かい側、部屋の位置さえ知っていれば灯りを確認できる。隊舎では緊急呼集がかかることもあるので、消灯時間後も完全に灯りを落として眠る者はすくない。ルーシェも窓から灯りが漏れても怪しまれない程度の明るさで読んでいたつもりなのだが、きっと自分が消灯破りをしているのを誰かが気づいてスメラギの耳に入れたのだろう。

でも、気にかけてもらっている——そのことがこんなに嬉しいなんて。

（今朝とは大ちがいよね……）

と先ほどの声音にうっとりひたりかけたところで、ルーシェははっと我に返った。

（——今朝っていつ!?）

朝から叱られることはなかったはずだ。今朝の夢にスメラギがいたということだろうか？

（う〜〜思い出せない……）

取り戻せない記憶のもどかしさにルーシェが頭を抱えると、なになに？　と左肩にいた赤竜のルーが顔を覗きこんできた。

ルーはルーシェとおなじように前脚で頭を抱えようとするが、脚の長さが足りていない。あがいているうちにルーは重心を崩し、「くぁ!?」と落っこちそうになったところをルーシェは抱きとめた。

「あぶないじゃない、ルー」

（最近なんでも真似したがるのよね……成長しているからかしら？）

ルーの大きさは聖殿で竜王に会う前と変わっていない。けれども以前はしなかったしぐさや行動が増えてきた。届かない手で猫のように顔を掻くルーに代わって頭を撫でてやると、ルーは嬉しそうに頭を下げた。こういうあたりはまだまだ子どもだ。

（けど、いつかルーもあんな感じになるのかな……）

デュラクを見やると、主は主、自分は自分と言わんばかりにスメラギが去っても我関せずと涼しい顔をしている。こんなになついているルーがいずれこうなるのかと思うと淋しくもある。

「ねぇ、カイトの竜はいつごろから甘えなくなったの？」

「は？」

別の竜を預かった同僚のカイトに問いかけると、深い水底のような藍の瞳がいつにもまして冷ややかさを帯びた。

「普通、竜はおまえのちびこいのみたくなつかないぞ」

「そうなの!?」

「中には愛玩動物みたいにかわいがる輩もいるが、大抵は竜の方が冷めていて主につきあってやってるだけだな。隊舎の寝台で一緒に寝てるのなんてそいつくらいなものだろ」

「え、でもこの子寒がりだし……」

「そもそも火を吐ける赤竜が寒がりってのはどうなんだ？　それにそんなにふくふく肥えた幼竜体型でどうして翔べるんだ。たしかに授かった当初はそんな形だったが、翔ぶころにはそれなりに痩せるぞ。でなきゃ翼で体重を支えきれない」

（あ、やっぱりそうなの？）

他の竜を見ておおよそ気づいていたがルーはやはり太めらしい。しかしルーの育ち方が特殊であることはカイトに話していないので、ルーシェは話を逸らした。

「そういえばカイトの部屋ってどのあたりなの？」
同学年で真っ先に騎士叙任が決まった有能さが為せるわざか、カイトはやたらこまかいところに気がつく。消灯破りに真っ先に気づくとしたらカイトだ。
「おまえの部屋の向かいのどこかだろ」
「わたしの部屋を知ってるの!?」
「知ってるもなにも隊舎は隊ごとに分かれているだろ。一番奥が黒竜隊で、黒竜隊の王都駐留組に女性はいないから、黒竜隊割り当ての女子隊舎に住んでいるのはおまえしかいない」
（あ、そういうこと……？）
つまり自分の部屋の位置など知らずとも、灯りがついている部屋は自分の部屋ひとつ。たまたまスメラギが夜遅くに帰ったときにでも灯りが漏れている部屋が目に留まったのだろう。
ルーシェはがくりと肩を落とした。浮かれていただけに落差も激しい。
（今日もやっぱり叱られちゃったし、雷も落ちたし……）
今日の目標、雷なし。今日だけでなく昨日も一昨日もその前もずっと目標はおなじなのだが、竜騎士団に入って二ヶ月あまり、いまだ達成された日はない。しかし今日は清掃、お茶淹れ、雑用と一切叱られることなく、今日こそ達成？　と思ったのにこのざまだ。
（うーん、いつになれば叱られない日が来るのかしら……）
「どうした。耳がしょげてるぞ」

耳？　と手を当てると、カイトはあわてて言いなおした。
「あ、いや髪だ。間違えた」
「ああ髪ね。……そう？」
言い間違いをする人じゃないのにめずらしいなと思いながら、ルーシェは左右でゆらゆらと揺れる銀灰色の髪に触れてみる。折に触れてちゃんと確認していたのだが、長い演習時間の間に下がっていたのかもしれない。
ルーシェは控えめな青色のリボンをきゅっと結び直し、
（うん、また頑張らなきゃ！）
そう気合いを入れ直した矢先、「ああ、いたいた」と風に踊るような軽やかな声がした。
ルーシェはは っと振り向くが、カイトは露台に出てきた姿を認めるやいなや敬礼している。
（遅れた……！）
半拍遅れてルーシェも正対して敬礼すると、竜騎士団でただひとり白隊服を着るその人物は軽く答礼しながら近づいてきて、ルーシェの真正面で足を止めた。
（わっ、わたしに用!?）
「ねぇ君、いま急ぎの仕事ある？」
シリスは優しく問うが、問われるまでもなく答えなど決まっている。竜騎士団団長であるシリスの頼みに優先する仕事があるはずがない。

「いっ、いま隊長から聖竜をお預かりしていますが、なにかご用でしょうか!?」

するとシリスは「ああ、そんなのいいからいいから」とルーシェの手からひょいと指揮杖を取り上げ、すぐ隣にいたカイトに手渡した。そんな些細な動きさえ優雅さがにじみ出ているが、しかしいかに優雅に渡されようがそれは咲き誇る薔薇の花ではなくただの指揮杖だ。

デュラクが不審そうにもそりと首をもたげる中、シリスはなんら気にした様子もなくルーシェの肩に腕を回すと、夜会にでも行くかのような気易さで「じゃあ行こうか」と促した。

(じゃあってなに!? どこに行くの!?)

ルーシェの肩に乗っていたルーは近くに伸びてきた手に反射的に威嚇してみせたが、よく知ったシリスの手だと気づくとすぐに警戒を解いた。

団長の奔放な行動に慣れているはずのカイトも唖然として、状況が呑み込めずにいる。

シリスはそんなカイトをふり返り、晴れた日の空色の瞳で微笑みながらなんでもないことのように告げた。

「スメラギに伝えておいてくれるかな。ちょっとウサギを一羽誘拐するからって」

(――――えええええ!?)

誘拐、ですか? と真面目に問い返していたあたり、カイトも頭が回っていなかったらしい。

シリスはさもあたりまえのようにルーシェを連れて廊下に出ると、廊下にいた隊員たちが、



何事だ？　と興味津々な視線を向けてきた。黒竜隊員の大半は演習後の打ち合わせ中とはいえ、全員が演習に出ていたわけではない。

（だれか助けて〜〜〜!!）

しかし騎士見習いにすぎないルーシェが団長の手をふりはらえるはずがなく、涙目で周囲に訴えてもシリスの歩みを止められる者がいるはずもなく、ルーシェはそのまま団長室に連れ込まれた。

人払いねとシリスが告げるまでもなく側近たちは部屋を外す。普段シリスがどういう生活を送っているのか想像できようというものだ。

人目がなくなるなり、ルーシェは肩に回された手をふり払った。

「なにするの！」

従騎士が団長にむかってこのような態度を取ろうものなら懲戒対象だ。だが団長が一従者にすぎないルーシェに用があるはずもなく、シリスはもうひとりの自分——つまり王女シエラを呼びにきたにちがいない。シエラにとってシリスは遠慮のいらないただの従兄だ。

「あれほど目立つことはしないでって言っておいたじゃない！」

「大丈夫だよ。君はなにもしなくても十分目立ってるから」

「それってどういう……ちょっ、どこに行くの!?」

シリスはふり払われた手でルーシェの手首を摑む。

「うん？　王宮。ここの裏から出たら早いから」
「そ、それはわかっているけど……！」
団長室の隣のシリスの私室には中庭があり、その外れには王宮につづく隠し通路がある。
（けれど今それを使ったら……！）
自分に押される烙印は、団長室に連れ込まれたまま出てこなかった女性騎士だ。
（みんなに……特に隊長にそう誤解されるのは嫌！）
「あっ、あの、一応わたしにも仕事と立場というものがあるわけで！」
「仕事と立場なら王宮にもあるでしょ？　こっちの方が大事だから呼びにきたんだよ」
「――――え？」
考えてみれば、王女の身分を隠し通せと言ったのはシリスだ。このような手荒な方法をとるのはシリスらしくない。
（つまり、こうせざるをえない状況ってこと……？）
シリスの部屋を出て庭の蔓薔薇のアーチに足を踏み入れる。赤やオレンジなどの小さな薔薇が、青々と葉が生い茂る中で笑みを見せている。ここを抜けると王宮で、シエラがルーシェ姿になって王宮と騎士団の宿所を行き来しているのもこの道だ。
シリスはアーチの途中でしっと唇に指を当て、足を止めた。
アーチの向こうは王宮の庭園で、数名の貴族が普段の優雅さや鷹揚さとはほど遠い声音で語

りあっていた。御前会議に出席していた者たちだろうか、距離があるので話の内容までは聞こえないが、その声音から穏やからしからぬ状況だということは伝わってくる。

そんな中、ルーシェの耳が拾ったのはある言葉だ。

（帝国……？　帝国がなんなの？）

さあ、とシリスに無言で誘われてルーシェはアーチを抜ける。現れた先は庭園、ここは王宮の中でも王族の私的な場所、奥宮と呼ばれるところだった。

「事情はわかった？」

「あんなの聞こえるはずがないじゃない！」

「わからなかったんだ？　訓練が足りないね」

そう言われても無理なものは無理だ。なんの訓練だか今度あらためて問い質したいところだ。

「でも様子がおかしかったわ。いったいなにがあったの」

服は隊服のまま、髪も結ったままだが、王宮に入ればルーシェの立ち姿が変わる。

意識を切り替えようとルーシェが青色のリボンを解くと、ふぁさりと長い髪が背中に流れ、空色の瞳に王女シエラとしての光が宿った。

「アズィール帝国から使者が来たんだよ」

「帝国から!?」

「ああ。委任を受けた国使ではなく、単に国書を届けに来ただけなんだけどね」

ローレンシアとアズィール帝国の間に国交はない。以前、ローレンシアと国境を接していたのは神聖ガルシア帝国だが、ガルシアを押しやって隣国となったアズィールは一度として良い隣人だったためしはなかった。

ガルシアを攻めた勢いで宣戦布告なしでローレンシアをも併呑しようとし、竜騎士団に反撃されたのが十年あまり前のこと。以来、攻めてもこないが講和もないという状態になっている。

「内容は？」

「正式な国使を送りたいそうだよ。そのお伺いかな」

（国使って……ローレンシアと国交を持ちましょうってこと？）

「遠まわしな脅しかなにか？」

「べつに遠まわしにする必要はないだろうね。いまの国力差を考えると」

北のローレンシア侵攻を諦めた帝国は南に兵を向け、エンテ海という内海を渡った先の砂漠の国フェルトゥナを併呑した。もはや帝国の国土はローレンシアの十倍を超える。

「そうよね。じゃあ皇帝がなにか悪いものでも食べて気がふれたとか？」

「まぁそう思うのも無理ないかな。皇帝もそろそろ四十近く、まだ若いけど遠征は身にこたえるだろうから足場固めに入ったとも考えられるけど」

「……あなたはそうは思ってはいないということね」

そんなおとなしい隣人だったら苦労しないんだけどねぇ、とシリスは苦笑を漏らす。

「あくまで俺の私感だよ。事実としてあったのは今朝、帝国から文が届いたということ、そこに君の誕生日のパーティーに正式な国使を送りたいと記してあったということだ」

「私の誕生日!?」

「そう。先日の黒竜公叙爵に君が姿を現したことを聞きつけたんだろうね。次の誕生日が正式なお披露目になることはもうどんな辺境の貴族でも知っている。今年一番の大行事だ。そして他ならぬ君の誕生日だから、君の意見も聞いておかないというのが陛下のご内意でね」

「母様の……？」

先日、母である女王の代理でスメラギに竜公叙爵したのはたしかだが、シエラはまだ御前会議に出られる立場ではない。出席できない、つまり意見する資格はないということだ。

それをあえて母から訊ねられたということは。

（政治的判断を試されているってこと……？）

シエラはやや睫毛を伏せて、頭の中にある帝国の情報を整理する。

（アズィール帝国……ローレンシアのはるか南東、砂岩の地に生まれた星読みが、王となるべき子を立てて興した国。それから星読みに従って盛衰をくり返して、領地を拡大しはじめたのが現皇帝が皇子時代に軍事を預かるようになってから。帝位に就いてからも親征をくり返して、かれこれ二十年くらいかしら）

その親征のひとつが十年あまり前のローレンシア侵攻だ。

だが帝国は格別ローレンシアを欲していたわけではない。眼前にまつろわぬ国があるから呑みこもうと思っただけ、現に竜騎士団の奇襲を受けるとあっさりとローレンシアを諦めた。帝国にとってローレンシアはその程度の国だ。しかしシエラにとって帝国は。

（――父様の仇）

その痛みはスメラギの胸の中で乗り越えたものの、それでもいまだ思い出せない父の面影とともに胸の奥が疼く。

（私でさえこうなのだもの。母様はどう思っていらっしゃるのかしら……）

「ねぇシリス、御前会議の意見はどうだったの」

帝国が打診しているのはたしかに自分の誕生日だが、その祝いの席は自分のものではない。国事だ。意見を求められたとはいえ、自分の一存で決まるものではない。

それに歴代女王を見ても、みずから陣頭指揮を執って改革を推し進めた者はいない。重臣の意見に耳を傾け、いくつもの選択肢から選び取る、それがローレンシア女王のあり方だ。その方法には長短あるだろうが、まだ政治を理解していない自分が掻きまわすことではない。

するとシリスはシエラの問いに満足したように微笑を浮かべた。

「議事録が見たいならあとで届けさせるよ。全体としてはおおよそどの面下げて今さらという感じだったかな。積極派は皆無、慎重派と消極派の割合は議事録を見て確認すればいい」

「もし私が了承すれば？」

答えはふたつ、了承か拒絶か。自分がどう答えても対処できるよう結論は出ているはずだ。

「他の年ならまだしも次の誕生日は特別だからね。さすがに今まで国交のなかった国の国使を受け入れるわけにはいかないかな」

「けれどせっかく申し入れてきたものを無下にもできないわよね。それで落としどころは？」

「誕生日はさておき、挨拶くらい来たいなら来てもいいよという感じだね」

拒絶もしないが積極的に招くわけでもない。向こうは小国と侮っていようともこちらも一国家だ。下手に出る必要はない。

「わかりました。しかるべき国使を立てるならば拒みません。誕生日前に国交ができればご招待するし、それ以後ならしかるべき時にご招待しましょう」

シリスやスメラギの見立てによれば、帝国の力はすでに竜騎士団で対処できる域を超えている。積極的に招き入れるには危険すぎる相手だ。刺激しないように相手の出方を窺うしかない。

「じゃあ陛下にそうお伝えするよ。そして国使が来たときは君が接待役を務めること」

「わかっているわ。私の誕生日を指定してきたのだもの。たとえ国使が来る日をずらすことになっても私がお相手を務めるのが筋よね」

先日のスメラギの竜公叙爵につづいて二つめの公務だ。前回はしきたりどおり聖杖を授けたにすぎないが、今回は王女として使者に向き合って話し合わなければいけない。

「でもまぁ君も年頃の女の子だし、いろいろ心許ないから側役をつけるよ」

「え？　そのために近衛騎士がいるんじゃないの？」

竜騎士には及ばないものの、士官学校を出て近衛騎士となるのが貴族の子弟の花形コースだ。

「近衛は実質的な護衛役。政治的判断は許されていないから、側役はせめて御前会議に出られる立場じゃないとね。それにちょうど場数を踏ませなきゃいけない奴がいるから」

その一言でぴんと閃くものがあった。

（それってまさか……）

ちょっと予定より早まったけど、とシリスは疾しさなど微塵も感じさせない笑顔で告げた。

「側役にはスメラギをつけるよ」

翌朝、隊長室で拭き掃除をしていたルーシェだが、手にした布巾は花瓶に添えたまま止まっていた。

（だって隊長を側役につけるって……）

叙爵のときスメラギは膝をついて顔を伏せ、王女の顔をろくに見ていなかったから正体に気づかなかったのだろう。だが側役となれば国使に会う間はずっと側にいる。髪型や化粧がちがうといっても舞台役者のように化粧を塗りたくっているわけではないし、真正面から見れば当

然おなじ人だとわかる――さすがにわからないはずがない。

（今度こそ絶対に気づかれるって……！）

帝国から話し合いの席を申し出てくれたのはありがたいが、どうしてこの時期なのだろう。せめてお披露目の後なら覚悟を決めて王女としての対面を果たしていただろうに――

そのときノックなしにノブが回り、ルーシェはびくっと肩を強張らせた。肩に乗っていたルーもそれに反応して硬直する。

この部屋にノックなしで出入りできるのは約二名、そしてどちらも今は会いたくない人物だ。

「――なにをぼやっとしている」

「隊長！　お、おはようございます！」

部屋の主に対し、ルーシェはあわてて正対して敬礼して挨拶する。とはいえスメラギはいま出勤したばかりというわけではなく、ルーシェの出勤前にすでに一仕事を終えていたことは執務机の上に散乱した書類を見ればあきらかだ。

「あのっ、昨日はデュラクをお預かりしておきながら申し訳ありませんでした！」

「それはいい。あとを任されたカイトは苦労したみたいだがな」

「あっ……」

銀の指揮杖はたしかにカイトに渡されたが、それはシリスが勝手に巻き上げたものでスメラギの手から渡されたものではない。聡いデュラクは事情を察していただろうに、へそを曲げて

言うことをきかなかったのだろう――無表情のまま苦労するカイトの様子が目に浮かぶ。
「おまえも奴に振り回されて大変だったな」
「いえ、任務の途中に抜けて申し訳ありません」
「直帰の連絡なら受けている」
側役の話は国使が来ることが正式に決まってから話すと言っていたので、スメラギはルーシェが攫われた理由を知らないはずだが、スメラギ自身も散々シリスの身勝手に巻き込まれているせいか理解があるようだ。
とりあえず雷が落ちなかったとほっと息をつくと、執務机に戻りかけていたスメラギがルーシェに視線を向け、なにを思ったかそのままこちらに近づいてきた。
（え!?）
あと一歩という場所まで距離を詰められ、ルーシェの背筋に緊張が走る。
「なっ、なんですか!?」
「ちゃんと眠っているか？　昨日、俺が帰るころまだ起きていただろう」
スメラギはいつまで仕事をしていたものか、帰宅は消灯時間を過ぎた後だったらしい。それで帰りしなにまだルーシェの部屋から灯りが漏れていることに気づいたのだろう。
「昨日は帰りが遅かったのか」
「い、いえ！　団長にはすぐに解放してもらえました！」

夜遅くまで団長室にこもっていたなどという誤解はされたくない。

「じゃあなぜ起きていた。昨日も言ったが根を詰めすぎなんじゃないのか」

寝台に規則集を持ち込むのはもはや日課になっている。ルーの代わりに分厚い規則集を抱いて寝ていることもめずらしくない。

(けれどそんなのわかるはずないわよね!? やっぱりクマとかできてる!?)

恥ずかしさに思わず顔をそむけようとしたルーシェだったが、その動きは頬に伸ばされた手のひらに遮られた。

触れられた箇所からぴりっとなにかが駆け抜けて、ルーシェの身体がかすかに震える。

ひやりとしたスメラギの指先——やわらかいだけの自分のものとは違うその感触に固まっていると、やがてその手は額に当てられた。

「やっぱり熱があるんじゃないか?」

(それは隊長が触れているから……!)

だがそれを口にできるはずもなくルーシェが言葉を返せないまま震えていると、ノック音が割って入った。スメラギの気の逸れた一瞬に触れた指先から逃れる。

「隊長、お戻りだったんですか」

入ってきたのはカイトだ。触れられていたところは見られていないはずだが、なにかと察しのいいカイトのこと、いつもと状況がちがうことにも気づくにちがいない。

「お、お水替えてきます！」

ルーシェはスメラギに背を向けて花瓶の口をつかむ。しかしルーの体長ほどもあるそれは思いのほか重くて持ち上がらなかった。

重心のぶれた花瓶が傾く。はっと息を呑んだが、すかさず一歩踏み出してスメラギが支えた。

「これは両手で持たないと無理だな」

「すっ、すみません！　ありがとうございます！」

ルーシェはそそくさと礼をすると花瓶を抱きかかえ、扉を開けたままでいてくれたカイトの前をうつむき加減に通りすぎた。

重い花瓶を抱えたまま小走りで廊下を駆ける。ついた先は厨房横の中庭だ。中庭にはいくつかの水場があり、一番上の水場の水は井戸から風力でくみ上げている。上の水場がいっぱいになると次の水場へと順々に下ってゆき、用途に応じて使ってよい水場が決まっている。

ルーシェは一番下にある水場に近づくと、荒れた息を吐きながら花瓶を下ろした。

（気づかれたかな……）

スメラギに触れられることは以前からあったが、今日は妙に恥ずかしかった。

（やっぱり昨日のことが気にかかっているから？）

あの揺らぎのない目で見つめられると、心の奥まで見透かされるような気がする。さっきも、正体を隠している気まずさから思わず目を背けてしまった。

隠し通す覚悟ならできている。しかし国使の来訪が正式決定すればスメラギに正体を明かさないわけにはいかない。そのときのことを考えると心が揺れる。

（こんな状況でちゃんと話せるの？　……ううん。国使のことは置いといて、騎士団にいる間は目の前の仕事に集中しなきゃ）

あわただしく変わりゆく状況に気持ちが追いつかない。そのことが気持ちをかき乱す。

だが環境が変わったのは竜公となったスメラギもおなじだ。

この花瓶ひとつとってみても、今まで隊長室になかった備品だが、黒竜公叙爵のときに山のように届いた花を生けるためにシリスが分けてくれた。さすが元団長室の備品だけあって精緻な色付けで、王宮の一室に据えられていても見劣りしない。

こうして見えるところからも見えないところからも変わりつつあるのに、スメラギはきちんと黒竜隊隊長としての職務を果たしている。

（わたしも隊長を見習わないと。――わたし、そんなに寝不足な顔してた？）

ルーシェは手桶に水を汲んでみるが鏡の代わりにはならなかった。しかたがないので気分だけ洗い流そうと水をすくう。

ルーは洗顔の邪魔にならないようにあたりをぱたぱたと翔んでいたが、すぐに戻ってきた。肩に後ろ向きに止まったルーを不思議に思ってふり返ると、カイトがやってくるところだった。

「カイト、どうしたの？」

「それはこっちが聞きたいことだ。おまえ、なにかあったのか」
「え、なにもない、けど……」
「ごまかすな。なにか困ったことがあるなら言え。俺でよければ話を聞く」
「えっ!?　どういう風の吹きまわし!?」
「……おい、そこは驚くところじゃないだろう」
（失礼かもしれないけど、でも、だって！）
入隊以来、無関心を貫いていたカイトにいきなりそんなことを言われても戸惑うばかりだ。
「おまえ、いろいろ様子がおかしいぞ。昨日は昨日でぼんやりしてるし、今日は今日でそそっかしいし……ってそそっかしいのはいつものことだが今日のはなにか違う。隊長に言えずに困っていることとかあるんじゃないのか」
（隊長？　たしかに隊長に言えないことはある……けど）
それは自分で折り合いをつけるべき問題だ。
「……どちらかといえば、困っているのは隊長じゃなくて団長のほう、かな」
「団長？　昨日の件か？」
だがルーシェが口を閉ざしていると、聞いてはいけないことだと察してくれたらしい。
「隊長となにもないならそれならいいんだ」とやや視線を背けた。
「おまえには仕事を引き継がないといけないからな」

「え？　引き継ぎって、カイト、騎士団を辞めるの？」
「馬鹿か、辞めるわけないだろう。別の仕事に移るだけだ。叙任の日取りが決まったからな」
「あ！」
竜騎士となる際には女王から騎士叙任を受ける。学舎を出て数年は見習いでいるのが普通だが、カイトは竜も育っているし学舎でも成績優秀だったと聞いている。十六で叙任が決まるのはかなり早い。たしかスメラギも十六だったはずだ。
「おめでとう。叙任はいつなの？」
「殿下の誕生パーティーの後だ」
「――！」
その一言に、固いものでがつっと殴られたような衝撃が走った。
「パーティー出席のために貴族がみな王都に集まるしな。王宮の主だった行事はほとんどそのときに行われるらしい。隊長も多忙になるから、おまえもそれまでにしっかり従者の仕事を覚えておかないと――おい？」
ごうごうと耳鳴りがして、あとに続いたカイトの言葉がろくに耳に入らない。
（いま、忘れようとしたばかりなのに）
現実味を帯びて襲いかかってくる未来に心を揺さぶられ、目頭が熱くなる。
「――どうかしたのか？」

うつむいたルーシェに気づいたカイトが問いかける。
ごめんなさい――声になったかどうかという音を残してルーシェは思わず駆け出す。
「おい!?」
カイトが呼びとめるがふり返ることなどできない。どこかで気分を落ちつけなければ。
しかし渡り廊下に足を踏み入れるなり、ルーシェは手首を取られた。
はっと顔をあげると、手首を摑んでいたのはカイトではない。スメラギだ。
(どうしてここに隊長が……?)
偶然か、それともカイトに任せて待っていたのか。いずれにせよ泣き顔を見られてしまった。
スメラギは一瞬驚いたように目を見開いたが、摑んだ手首を逃がすことはなかった。
「放して……!」
「――来い。命令だ」
スメラギは短く言葉を落とし、ふり返ることなく手首を引く。
(こんなところ誰かに見られるようなことがあったら)
思わずうつむいたが幸い誰にも会わず、スメラギは隊長室に連れ込むなり扉を閉ざした。
「どうしたんだ、おまえ。なんかおかしいぞ」
「なんでもないですから……!」
スメラギの腕を振りはらいながら発した声は思いのほか大きかったが、手首はしっかり握ら

れたまま逃れることはできなかった。
それでも頑固に抵抗するルーシェの手首を解放すると、スメラギはルーシェを逃げ道をふさぐように扉横の壁に手をついた。腕が自由になってもこれでは逃げることができない。
「なにがあった。原因はあいつか？」
たしかにきっかけを作ったのはシリスだが、その想いの根っこにいるのはスメラギ、そうして一番どうしようもないのは自分の心だ。――なんてわがままで、厄介な。
（……そう、わかってるけど）
「隊長は……わたしがいなくなったらどう思われますか」
「は？」
突拍子もない問いかけにスメラギが怪訝そうに目を眇める。だがそれがルーシェの中にわだかまっているものだと気づくと、答えをくれた。
「まぁ、困るだろうな。特にカイトが別の任につけば従者はおまえひとりだしな」
いくらでも代わりはいるだろうに、そう言ってもらえただけで救われるものがある。
「でもわたし、いられないかもしれません……」
シリスの言うとおり事がすすめば近いうちに帝国から返事が来る。シリスはいくつか要望を乗せたらしいが帝国が蹴るとは思えない。ならば騎士団にいられるのもあとわずかだ。
後ろ髪を引かれる想いがある。しかしすべて最初からわかっていたはずのことで、ひとりで

ゆっくり考えれば答えが出ることだ。なのに気持ちが付いてこない。
使者さえ来なければ――王女として絶対に思ってはいけないはずの想いが打ち消せずにいる。
だがその弱さの隙を突くように、スメラギが言葉を継いだ。
「やる気がないならさっさと出て行け」
「――！」
きつい一言だった。思わずルーシェは息を呑んだ。
「俺はあいつになにを話されたのかは知らない。だが帝国の動きがきなくさいことは知っているし、黒竜隊は有事のときには真っ先に動く。いつ何時作戦行動に移るかわからない場所に迷いを持ち込まれるのは迷惑だ。半端な気持ちなら今すぐ出て行け」
容赦のないスメラギの言葉が真っ直ぐに射貫く。
たしかに自分はあれもこれも抜けていて、なにもかも半端で、カイトやスメラギのように間違いなく任務を遂行することも、ましてやシリスのように余裕綽々でこなすこともできない。
（でも、気持ちだけは）
黒竜隊でがんばりたいと思ったのは本当だ。そうでなければこんなに心乱れるはずがない。
「わたしは！　そんないい加減な気持ちでいるわけじゃありません……！」
七歳のときから親元を離れて軍属で暮らし、忠誠の誓いを立てて騎士になった人からみれば甘い覚悟かもしれない。だがこちらも生まれたときから王族としての責務を叩きこまれて育て

られたのだ。

この国を守る——その覚悟だけは疑われたくない。

ルーシェは真正面からスメラギの目を受け止め、見つめ返す。見通すなら心の底まで見ればいい、そう思いながら。

だがスメラギの口から漏れたのは予想外の言葉だった。

「——わかっている」

「え……？」

「たしかにいろいろ抜けているが、おまえが真摯に向きあっているのはわかっている。今までもその気持ちだけは揺らがなかったはずだ。だが今日のおまえどうだ？　どこかおかしいぞ」

（あ……）

自分をちゃんと見ていてくれた。それだけで身体の中に満ちてゆくものがある。

「本当にどうしたんだ。規則集を理解できなくて困っているのか？」

「え!?　ちっ、ちがいますよ……!!」

（なんでそういう誤解!?）

難しい問題を解くわけではない。書いていることを覚えるだけだ。逐一丁寧に書いてあるものを読んで理解できないなどということはない。

「じゃあなんなんだ。ろくに眠っていないから平常心を保てなくなっているんだろう」

（いえっ、寝てないのはたしかですけど！）

――いつこの生活がなくなるかと思うと、規則集を目で追っていても頭に入ってこなかった。

王女になっても竜公となったスメラギと会うことはできる。けれどもこんな至近距離で、こうしてまっすぐ見つめながら話をすることはもう適わない。

スメラギが見つめるのは王女自身の顔ではなく、剣を捧げた相手――王族という崇敬の対象なのだから。

（こうして側にいたいのに）

自分に身分があるかぎり、それも甘えだとわかっている。王女としてふさわしいふるまいをすることが自分の務めだとわかっているけれど。

（う～～～～～）

ぎゅっと想いを押し込めようとしたが、胸の奥で想いが跳ねまわる。心の箱を壊さんばかりにがんがんぶつかって心を揺らす。

目を固く閉ざしてその痛みに堪えていると、スメラギが壁についていた手を放し、身を起こしてぽんとルーシェの頭に手を乗せた。

「べつに焦らなくていい」

（……え？）

「足りない部分は補えばいいし、俺もできない仕事はやらせない。焦って身体をこわしたら元

も子もないぞ。ゆっくり進めばいい」

頭を撫でる手は女の手とはあきらかにちがう。優しく撫でる母の手ではなく、あやすようなシリスの手でもない、遠い記憶とそれが重なった。

いつの光景かはわからない。ただたしかにそれは覚えている——それはきっと。

（父様……側にいてくれるの？）

父が帝国の手から救い、父とおなじ〈闇〉の聖竜が認めた人。そしてこの人に竜公の聖杖を授け、父の加護をと願ったのは他ならぬ自分だ。

父の前で恥じない娘でいたい。——けれども、今だけは。

うつむいたルーシェの頭を、スメラギはなにも言わずに引き寄せる。

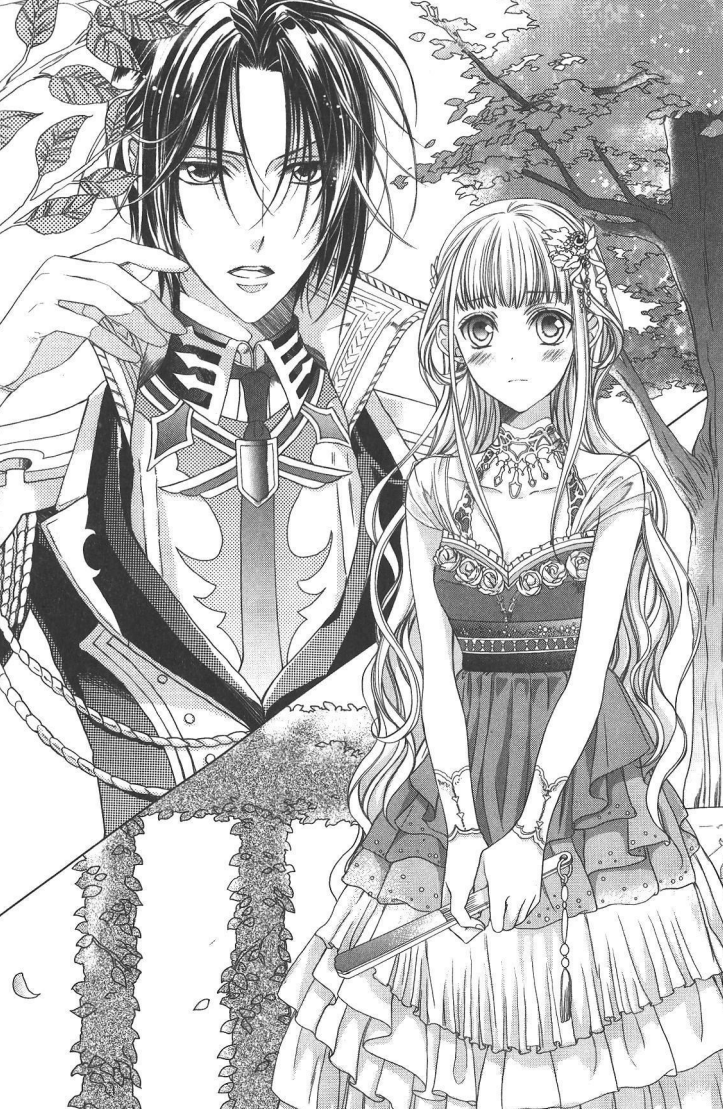
記憶にはない、けれどもたしかに安心できるその場所にルーシェは顔を埋めた。

ローレンシアの王都から国境までは竜の翼で丸二日、しかし飛行に特化した竜なら一日でたどりつく。急使も竜騎士の務めのひとつだ。

シエラがシリスに返答したその日の内に女王の親書を携えた急使が翔んだが、翌晩には帝国の返書を携えて戻ってきた。あらかじめこちらの返答に応じて対応が練られていたのだろう。

帝国は訪問を受け入れられたことの礼、公式の席ではなくまずは非公式の訪問だと了承したうえで、しかるべき国使はすでに国境に詰めておりいつでも訪問可能と返答してきた。
「けっこう厳しい条件出したつもりだったのに、相手も本気だね」
いったいどんな難題をつきつけたのかと思ったが、
「せっかく来たいって言ってるんだから、手土産などをちょっとね？」
あとは届いてからのお楽しみ、とシリスは嘯くばかりで知ることはできなかった。
すでに詰めている使者を待たせるのもどうかと、王族であるシリスが国境まで出迎えに行ったのが昨日のこと、明日にも使者は到着するはずだ。
（シリスに誘拐されたのはたしか――）
シエラは過ぎた日を指折り数え、片手で足りた指を見て息をついた。
（早かったわね……）
返事が遅れてはローレンシアの伝達速度が侮られると竜騎士が尽力したおかげもあるが、さすがにこれほど早くに話が進むとは思わなかった。
シエラは自室の鏡に視線を移す。混じりけのない銀の髪はゆるやかに巻かれ、やわらかな色合いの宝玉の簪で飾りつけられている。女官に磨きあげられいつにもまして艶やかな肌、磨かれた爪は健康的にほんのりピンク色に色づいている。
（――いまからこの姿で、隊長の前に立つ）

王女である自分にスメラギはどんな風に接してくるだろう。
どのように声をかけるかは毎晩のように頭を抱え、いくつもの状況を想定してみた。
スメラギは事情を訊いてくるだろうか。いやその場ですぐさま事情を察して、もはやルーシェとして見てもらえないかもしれない——そんなことも考えた。
朧に思い出すのは数日前に見た夢だ。そこにいたのはスメラギで、そしてルーシェの正体を知っている様子だった。
（あの砦は王都じゃなかったけど……夢は夢にすぎなかったということね）
そのとき女官がスメラギの訪れを告げた。シエラは鏡の中の蒼の双眸を見つめ、語りかける。
（さあ、顔をあげて）
これからスメラギに話すのは国の問題だ。まずは王女として堂々と挨拶をしなければ。
中庭に出ると眩しい太陽が照っていた。しかし王宮には絶えず風が吹いているし、緑豊かなので樹木がいい日除けになる。シエラは庭園で枝葉を茂らせる大樹の下に立ち、女官を下がらせてその時を待つ。
胸のざわめきが表れたかのように、小さなテーブルに落ちる木漏れ日がさわさわと揺れる。
どっどっと力強くめぐる血はいくら深呼吸しても落ち着きそうにない。
ほどなく人の言葉らしき音を風が運んできた。自分はその声音を知っている。
そしてその者は案内してくれた女官に礼を述べて、薔薇のアーチを抜けて姿を現した。



（隊長――）

木陰にたたずむ姿を認めるなり、スメラギは目を見開いて足を止めた。無理もない。自分の従者がこんな恰好で王宮にいるなんて想像しなかっただろう。

しかしスメラギは足を進めた。竜騎士の正装、その肩にあるのは王族謁見用の金モール――

（さぁ、王女としての第一声を）

スメラギは竜騎士団隊長として跪くか侯爵として立礼するか、まずはとにかく挨拶とともに黒竜公の叙爵御礼の言葉があるはずだ。それに答えることが最初の仕事だ。

――しかしその予想は覆された。

スメラギはシエラの前に来るなり、礼もなしに口を開いた。

「……なにやってんだおまえ」

「えっ？」

「今日も勤務の日だろうが。優雅に着飾っている場合か」

「あっあの、今日のわたしは従者じゃなくて、王女として隊長にお会いしようと――」

「王女？　……あぁ、そうか」

（理解早っ!!）

あらかじめすべてを聞いていたのではないかと思うような早さだ。

たったあれだけで察するなんてさすが隊長、頭の出来がちがう――そう思ったのだが、つづ

く言葉の風向きは予想とちがっていた。
「今日は殿下はいらっしゃらないんだな」
「――――へ？」
「体調が思わしくないのか？」
「いえっ、そういうわけじゃなくてわたしが王女として国使の接待をすることになって……」
「おまえが？」
スメラギの双眸がじっと見つめる。見つめているのはドレス姿ではなく自分の眼だ。
シエラは胸の高鳴りを必死に抑えながら、黒曜の瞳と向き合った。
そしてやがてスメラギがはじき出した答えは。
「……大変なことになったな。殿下の替え玉だなんて」
（ちがうってば――――!!）
どうしてそういう結論に至ったのか思考の過程を問い質したいところだが、あまりの誤解にうちひしがれて崩れ落ちそうになった。
（なんで!?　どうして!?　わたしの説明が悪かった!?　ちゃんと王女としてって言ったわよね!?　そんなにわたしって威厳がない!?）
そんなシエラの思いをよそにスメラギは嘆息を漏らした。
「俺は国使接待役を務められる王女に会わせるとあいつが言うからここに来たんだ。あいつの

ことだからなにかあるとは思っていたが、こういうオチとはな……」

（勘ちがいはシリスのせい!?）

――そう、あの従兄がまともに伝えているはずがなかったのだ。嘘にならない範囲で都合よく誤認誘導していったにちがいない。悪びれないシリスの顔が思い浮かぶ。

（シ～～リ～～ス～～～～!!）

おかげで一世一代の覚悟が台無しだ。

シエラは手にしていたレースの扇をへし折りたい衝動に駆られたが、

「だがちょっと驚いた」

その一言に「え？」と現実に引きもどされた。

「その恰好、よく似合うな」

「そっ、そうですか!?」

「ああ」

お世辞を言うような人ではない。先ほどまでとちがう意味で胸がどきどきしはじめたが、

「さすが名家のお嬢様を自称するだけはある」

（だから王女なんですけど!?）

しかし名家のお嬢様というのは自分の口が言ったことだけに反論できない。

撃沈するシエラの前で、スメラギは「だが」と苛立たしげに息をついた。

「どうして前もって俺に話さなかった。俺は王女の側についているように言われたから来たが、もしあいつが言ってこなかったらおまえは一人で果たすつもりだったのか？」
「え、それはその……まぁ、これも仕事ですから……」
国使の接待は王族の大切な仕事のひとつだ。
「ちゃんと認識しているか？　これはとても危険な任務だぞ」
「え!?」
「あたり前だろう。直接戦火は交えていなくとも帝国とは今も戦争中なんだ。その敵国の使者が来るんだからな。殿下のお立場を考えればその場で刺されてもおかしくない」
「刺されるって、さすがに国使がそんなこと……」
「なにを言っている。殿下は陛下の血を継ぐたった一人のお世継ぎだ。ほかにご姉妹はおられない。殿下の身になにかあれば王家断絶だぞ。いや、血の近い娘でなんとか凌ぐかもしれんが、戦の最中に後継ぎ争いの話がまとまると思うか？　国の急所を狙える機会だ。死間を送り込まれてもおかしくない」
「死間……」
死間というのは、死を覚悟して任務に臨む暗殺者だ。敵国の王宮で王女を手にかけて逃げおおせるはずもない。その者は任務を果たした後はすみやかに自身の命を絶つ。
（そう、シリスも言っていたわ）

シエラ以外に特定の娘を次期女王に担ぎ出せるほど貴族の結束は固くないと。帝国からの脅威にさらされている状況下で、選定に不満を持つ者が帝国に擦り寄らないと言えるだろうか？

国が内から割れればいくら優秀な兵がそろっていても戦には勝てない。

「殿下の身になにかあっては遅い。おまえはそのための身代わりだな。だが仮に刺されるのが殿下でなくおまえであってもだ、俺の知らないところで怪我を負っているとか冗談じゃないぞ、まったく……」

（……あ、だから？）

スメラギが一番苛立っているのはシリスが茶化したことに対してではない。自分の部下が知らないところで危険な任務を負わされようとしていたことだ。

「俺を隊長と呼ぶなら部下としての自覚を持て」

「はっ、はい！」

シエラはいつものように敬礼をして、違和感に気づいた。

（あれ？　隊帽がない……？）

そして隊帽どころか制服姿ではないことを今さらながらに思い出す。

（だから今はシエラだったんだってばー!!）

自分の失態に思わずその場から逃げだしたくなったが、恥ずかしさにうつむいたシエラの頭に、ぽんと載せられるものがあった。

「しかたない奴だな」
そう言いながらも苦笑を浮かべる。その表情はやわらかい。
「隊長……？」
「まぁあいつから直々に言われたら断れないよな。悪い、俺も大人げなかった」
「え、いえ、そんなことは」
本当のことが言える言えないという段階の自分とは、大人のレベルが違いすぎる。
「決まったものはしかたがない。国使の滞在中、俺がきっちり守ってやる。おまえは王女としての大役を果たしてみせろ」
「は、はい！」
スメラギが「よし」とうなずき、すべて丸く収まったような気もしたが、どこかおかしい。なにか大切なことを忘れているような……
（あー！　本当のこと言いそびれた……!!）
――国使接待は波乱含みになりそうだった。

第2章

使者到来

翌日、カイトは昨日に引きつづきスメラギの正装の着替えを手伝っていた。
黒竜公となり王宮に上がる回数が増えることは想定していたが、一日の半分以上席を外すとなると隊長の職務分担も考えなければならない。
（大公殿下が黒竜隊隊長だったときの業務日誌を見ればなんとかなるか？）
しかしそれは帝国との戦の前の話、隊員の数もちがうし副長や従者の数もちがう。いまの人員で業務を回すには、部署の定数から見直す必要がありそうだ。
それに自分が騎士叙任されれば副官見習いとしての仕事が入ってくる。従者の仕事を引き継がなければいけないのだが、肝心のもう一人の従者――ルーシェの姿は今日もない。
「隊長、ルーシェはまた休みですか」
カイトは外套の肩の金ボタンを留めながら訊ねる。
先日、隊長に話を聞いてもらって無事浮上したかと思いきやこの有様だ。ルーシェが頑張っているのはわかっているが、彼女は精神的に脆い部分がある。
（そこは隊長が見てくださるんだろうが……）
スメラギは部下のことをよく見ているようで時にすこんと抜けている。一抹の不安を打ち消

せずにいると、スメラギが言った。
「あいつなら家の都合でしばらく来られないと思ってくれ」
「隊長は事情をご存じなんですか？」
「ああ。そのことで俺もしばらく騎士団を空ける。あいつについていることになった」
思わず装具をつけていた手が止まり、スメラギが不審そうに見つめ返した。
「どうした」
「まさか……ご結婚、ですか？」
「はあ!?」
「だってあいつについているんでしょう？」
「それがなぜいきなり結婚につながる!?」
「あ、ああ、そうですね……すみません。混同していました」
するとスメラギも思い至ったらしく、「あの噂か……」とため息をついた。
以前ルーシェは無断で神の山に立ち入って遭難した。それをスメラギが救い出し、翌朝には下山して来たのだが、そのあとルーシェは十日ほど休んだ。おかしな噂が流れたのはそのときだ。
――いわく、一晩を明かしたスメラギがルーシェに手を出したらしい。
男所帯にその手の話はつきものだし、雪山とはいえ男女が共に一夜を過ごせば噂が立つだろ

うことは予想できた。だが敢えてそれを煽った者がいる——他ならぬ団長のシリスだ。

『スメラギはウサギを食べたらしいよ？』

その言葉は完全な誤解——いや誤認誘導で、からかっていただけだと自分は知っている。ウサギの干し肉を非常食に用意したのは他ならぬ自分だからだ。だがその場に居合わせた者たちから話が漏れたらしく、いまだその噂は陰で燻っている。

いまこの状況でスメラギがルーシェの側についていることになったと聞きつければ、ルーシェの実家のリヴェア家に一晩の責任を取らされたという噂につながるのは必至だ。

（いや、団長が煽ったせいだけじゃないか……変わった、よな？）

ウサギ食いの噂はさておき、あの夜以降ふたりの距離がなんとなく近い。

飛行演習の後にスメラギが一声かけて立ち去ったのもそうだし、様子のおかしいルーシェを隊長室に連れもどしたときもそうだ。ふたりの間になにかあったのか？　と勘繰る程度には以前とはなにかがちがう。

人の距離感というものは滲み出るものだ。学舎にいたときも、誰それがつき合っているといった類の話には誰よりも早くに気がついた。敏いとはよく言われるが、自分にしてみれば気づかない方がおかしい。

「言っておくが断じてそれはないからな。十五の小娘相手になにがあるというんだ……ったく」

スメラギは苛立ちまじりに吐き捨てるが、噂はそれなりの信憑性があるから消えないのだ。
「貴族階級では十五で結婚はめずらしい話ではありません」
「そうなのか？」
竜騎士団は二十歳前後で騎士叙任されてやっと一人前と認められる。学舎の生徒もしくは見習いにすぎない時期に結婚は考えられない。だがそれは騎士団内の話だ。そしてスメラギは生粋の学舎あがりで世間一般の感覚を知らない。
「貴族の娘は十五歳前後で社交界にデビューして、二十歳くらいまでに結婚して家に収まります。リヴェア家の者は神職に就くことが多いので社交界にあまり出てきませんが、ルーシェは竜騎士団に見習いに来ていることを考えても神職の道は考えていないのではないかと」
まぁあいつに巫女は向いてないな、とスメラギは首肯する。
「リヴェア家は身分こそ子爵家ですが聖女以来つづく旧家ですから、竜公とも釣り合いが取れなくないと……すみません」
カイトがつづきを言えなかったのは、スメラギの目がだんだんすわってきたからだ。
（隊長にその気はなしか……まぁ身分に壁がなくても部下には変わりないしな）
あの耳垂れウサギ――もといルーシェは、貴族の娘ならもっとしとやかさとしたたかさがある年だろうに、良くも悪くもそういう意味の女らしさを感じない。
仕事に女を持ち込まれても迷惑千万だが、距離が縮まっても妹みたいな感覚なのだろう。

（たしかにあいつが隊長の嫁とか言われても困るしな……）

貴族の娘なら当然かもしれないが、ルーシェは掃除や食器洗い、繕いものや熨斗がけの類を一切せずに育ってきた娘だ。竜公として屋敷住まいになれば侍女や家僕も大勢いるが、隊舎暮らしとなるとある程度は妻が身の回りの世話をしなければいけない。

（あいつが隊長の嫁……）

思わず想像してしまい、カイトは眩暈を覚えた。――絶対に自分の仕事が倍になる。

「噂は好きに言わせておけばいいが、今回の一件はそういう事情ではないと言っておく。それと不在にしても業務に穴を開けるわけにはいかない。おまえには逐一報告を入れてもらう」

「はい。お届け先はリヴェア家の屋敷でよろしいでしょうか」

竜の翼ならたとえ山麓の屋敷でも四半時とかからない。だが答えは予想とちがった。

「いや、届けてほしいのは王宮だ」

「王宮ですか？　それはなぜ……」

「あいつが国使の接待役として王女の身代わりを務めることになった」

「……は？」

いつもなら上官相手に聞き返すなどという失態は犯さない。だがさほど長くない説明がすぐに理解できなかった。理解することを頭が拒んでいたといったほうが正しい。

「あの、いまなんと……」

「帝国から国使が来ることは知っているな」
「はい」
国境までの急使の要請が黒竜隊に来ていたし、先日は竜騎士団長のシリスみずから国境へと翔んだ。緘口令が敷かれているが、帝国からの使者を迎えに行ったことは知れている。
その国使の接待役は王女が務めるという話も聞いている。だが。
「あいつが王女の身代わりをやるらしい」
「本気……もとい、本当ですかそれは」
「本気で本当らしいぞ。俺もあいつに務まるとは思っていないが、団長の選定だ」
カイトは思わず天井を仰いだ。シリスがよくスメラギをからかっているのは知っているが、国の命運がかかるときまで遊ばなくともいいだろうに。スメラギの結婚話より性質が悪い。
「学舎にもっと適任がいるでしょう」
「俺もそう思ったが、おそらく見た目の問題だろうな。あいつは王女とおない年だし、奴の遠縁だ。俺は拝見していないが外見が似ているんじゃないのか」
「でも身代わりなど危険な任務なのでは」
「だから普通の貴族の娘じゃなくあいつなんだろう。一応従騎士だ。一応な。俺を側役につけたのもそのあたりを考慮してだろう。というか先に聞いていたら無理やりねじ込んだけどな。あいつは王宮で放し飼いにするには危なっかしすぎる」

噂の元がウサギ肉だったせいか、すでにスメラギの意識の中でもルーシェはウサギだ。
「そんなわけでおまえも巻き込むからな。覚悟しておけ」
「はぁ……」
カイトには、前途多難という文字が前方に大きく立ちはだかっているのが見えたような気がした。

「なに、そんな楽しいことになってたんだ？」
中庭に立つ彫像の台座に手を当てて、もう一方の手で腹を抱えているのはシリスだ。
帝国との打ち合わせで国境砦に赴いていたシリスは、王宮で起きていた予想外の事態に笑いを堪えきれなかったらしい。その場で見たかったなぁと本音が漏れている。
「誰のせいだと思ってるの！」
「え？　誰のせいだっていうんだい？　すくなくとも俺はその場にいなかったよ？」
「そんなことで責任逃れできると思っているの!?　今まで散々隊長をからかって遊んでいたからでしょ!?」
誤解の種をまき散らしていったくせに悪びれないシリスに、シエラは声を荒げる。

スメラギは学舎に入って十年あまり散々おちょくられつづけた結果、シリスの言葉には必ず裏があると思いこんでいる節がある。これがシリスのせいでなくて誰のせいだというのか。

「たしかにちゃんと伝えられなかった私のせいだけど、でも隊長を前にしたらいつものくせでルーシェになっちゃって……」

「まぁいいんじゃないの。やりたいほうでやれば」

「そういう問題じゃ……！」

言いかけた言葉を遮るようにシリスは告げた。

「いいんだよ。君は君なんだから」

そのときシリスの晴れた空色の瞳がいつもとちがう色みを帯びた気がして、シエラは反論することができなかった。

（そう、かしら？）

シエラとルーシェではあきらかに立場がちがうが、シリスが言うならそれでいい気もする。

（たしかに両方自分で、ルーシェのほうが居やすい感じがするけど……）

王族としてかくあるべきと幼いころから乳母や教育係にしつけられた記憶が心に枷をはめる。

だがおなじように厳しく育てられたはずなのにシリスは自由だ。

（シリスはこんな感じでもちゃんと務めを果たしているし、私ももうちょっと肩の力を抜いてもいいのかしら……？）

シエラの想いを読みとったか、「ほらほらまた頭で考えようとしている」と髪を撫でる。こういうときに見せる顔は本当に裏表のない優しい従兄だ。しかしスメラギに絡むときはなにかがちがう。妹と弟では扱いがちがうようなものだろうか。

「そういうことなら俺もスメラギがいるときはルーシェとして扱うから。――ほら来たよ」

促されて見やると、スメラギが王宮の渡り廊下から逸れて中庭に足を踏み入れるところだった。

国使と会うので、スメラギは金糸の国章の入った黒のマントを羽織った正装だ。シリスの銀糸の入った白のマントとまったくおなじで対になっている。

隊長室にいても滅多にお目にかかれない姿に目を奪われていると、こちらに気づいたスメラギがほんの一瞬足を止めた。そしてひとつ頭を振ると、また足を進めて近寄ってくる。

「どうしたのラギ君。もしかして見とれた？」

「やっぱりなんか違和感があるな」

「素直に綺麗だって言いなよ。女の子なんだから着飾れば変わるよ」

「まぁな。――殿下」

「はっ、はい!?」

穏やかな低い呼び声に、思わず声がひっくり返る。

（だって、で、殿下って……！）

だが先ほどの穏やかな声音とは対照的に、スメラギの眉間がみるみる厳しくなった。
「……おまえな、殿下の身代わりを務めるならもっと堂々としていろ。敬われることに慣れてないのはわかるが恥ずかしくても照れるな。自分は生まれながらの王女だと暗示でもかけて耐え抜け」
（暗示をかけるまでもなく生まれながらの王女なんですけど!?）
スメラギの言に、笑いの沸点の下がっていたシリスは後ろを向いて押し隠しているが、肩がかすかにふるえている。
本物なのに説教されるなんて……とうなだれていると、すかさず怒声が飛んだ。
「背筋を伸ばせ！」
「はいっ！」
「そうじゃない！　顎を上げすぎんな！　頬が強張ってるぞ！　もっと優雅に立てんのかおまえは!?」
「はっ、はい……！」
「そんなことで身代わりが務まると思ってるのか!?」
びしばし飛んでくるダメ出しに、シリスがついにこえらえきれずに笑声をあげた。
（ううう……）
最近ルーシェでいすぎたせいか、切り替えがうまくいかない。それともスメラギが目の前に

いるせいだろうか。叱られるのがもはや日課になっているので、うまい具合に力が抜けない。
「おい、おまえも笑ってる場合か。こいつにちゃんと危険な任務だって伝えたか？」
「言うまでもなく理解しているものだと思ったんだけど？」
ね？　とシリスは目で語りかけてくる。
（そりゃ王女当人だものね……）
理解していなかったならそれこそ物笑いの種だ。
「遠縁だからってこんなことまでさせやがって」
「手頃な相手が近くにいたからちょうどいいと思ってね」
「手頃っておまえな……」
シリスが言う『手頃な相手』は自分ではない。側役を務めるスメラギのことだ。もちろんスメラギ本人は気づいていないが、シリスに訂正する気はない。
「こいつになにかあったらどうするつもりだ」
「どうもこうも責任を取るのは俺だよ。団長としても王族としてもね」
「形式的な話をしているんじゃない。もし狙われれば怪我を負うのはこいつなんだぞ？」
「だから怪我を負わないように君をつけているんじゃないか。ちゃんと守ってあげるんだよ」
無事かどうかはスメラギ次第と言わんばかりに、シリスは飄々と言ってのけた。
「ルーシェ、相手の情報は頭に入ってる？」

「はい」

国使としてやってきたのは第三皇子――アル・アシュア・アゼル・ハシャン・アズィール。どこの部分が名前かと思ったらアルは皇族男子の敬称で、〈アル・アシュア〉でアシュア皇子という意味だそうだ。〈アゼル・ハシャン〉はアゼルの領主という意味で、アズィール帝国勃興の地を領地に持っていることになる。

皇帝は十代で帝位に就いて治世は二十年弱、皇子の年もおそらく十代後半から二十歳前後だ。

「いくら帝国の人間を前にしたからって、密猟のこと問い詰めたりしたらダメだよ」

「わかっています」

非公式のことは一切口にしない。いくらこちらに証人がそろっていてもここは弾劾の場ではない。口に出せば両国の関係を損ねるだけだ。

「そしてまちがっても心奪われたりしないようにね」

「誰がそんな……！」

「一応、念のため」

「――帝国は、父の仇です」

その一言にスメラギの表情が厳しくなった。スメラギはルーシェの本当の身分を知らないが、ルーシェが父を帝国との戦で亡くしたことは知っている。

「辛いだろうが顔に出すな。今のおまえはローレンシアという名の鏡だ」

「わかっています」

帝国は敵、国使が来ようとそれは変わらない。しかし警戒心を失わないながらも辛い過去を面に出さず、にこやかに微笑んで手を差し出す。それが王女としての務めだ。

（シリスはもうアシュア皇子とお目にかかったのよね）

国境のエルヴァ砦まで出迎えにいったのはシリスだ。出迎え役として挨拶を交わしていないはずがないのに、シリスは一切皇子の情報を出そうとしない。

心奪われないようにね——そう忠告をされなければいけないような相手なのか。

（私を試しているから？　どのような御方なの？）

「ほら、行くよ」

シリスが先行して、スメラギが手を差し出した。言葉はなくとも目が伝えてくる。

——守ってやる。

ルーシェはその瞳にうなずき返して、目を閉じてひとつ深く呼吸をする。

（私はシエラ・アーシェラータ・ローレンシア——このローレンシア女王の娘）

次に目を開けたときには、目に映る世界が引き締まって見えた。

楚々ともたげた手を、指先からゆっくりと羽のように軽やかにスメラギの手のひらに載せる。

スメラギは一瞬驚いたように目を見開いたが、なにも言わずに一礼して、王女を伴って歩きだした。

そこはさして広くない庭園だった。

女王が時折茶会を催す中庭で、三十人も呼べば狭く感じるほどの広さだ。春薔薇にはやや遅い時季だが、垣根には赤や橙やピンクに白と、色とりどりの薔薇が咲きそろっている。

大広間ではなく客間でもないこの場所に使者を招いたのは、両国の立場を考慮した結果だ。

正式に帝国の使者を招くとなれば、接待役は女王みずから、場所はそれこそ王宮の大広間でパーティーを催す必要がある。しかし今までの帝国との関係を思えば、そのように迎えることには反対感情が大きい。かといって警戒心を抱いていることをあからさまにもできない。

そこで出された折衷案が、まずは非公式な訪問で内々に招くという形だ。

今回の訪問目的は両国の友好を育むだけ、商業や政治の交渉は一切なし、女王の謁見もない。友好が本物であると確信すれば、公式の使者を受け入れなくもない——そういうことだ。

庭園ではすでに使者たちが控えていた。使者は付き人を含めて総勢五十名ばかりと聞いているが、庭園にいるのは五名だけ、あとはローレンシアの近衛兵だ。

使者たちの服装は浅く染めた貫頭衣に厚手のベスト、貫頭衣は無地だったが、ベストの袖口や合わせには色あざやかに複雑な紋様が縫い取られている。足衣は腰に巻きつけた布で留め、

腰布の裾には飾り房がついていた。

使者たちの髪はアズィール人らしく濃い茶色だったが、中にひとりだけ、月光が生みだしたような銀の髪の青年がいた。

（あの方がアシュア皇子？）

年は自分より上だがスメラギよりは下――十六、十七歳だ。上背があるが鍛えている様子はなく、他の武官風の四人とはまとう空気があきらかにちがう。

服装も他の者とおなじアズィールらしい刺繍が入っているものの、ベストではなく長衣を羽織っていた。長い髪を肩先で結って流している。高貴な生まれの者が世俗を知らぬまま神官の道に入ったといった風情だ。

四人が青年を取り囲む形でいることからしても、彼が特別な存在だとわかった――が。

（ううん、彼じゃない）

視界からはずれていた六人め、あきらかに彼が皇子だとわかった。

（でなければ、いるはずないもの）

そう確信したものの戸惑ったのも事実だ。

（まさか皇子があんなに幼い子どもだったなんて）

五、六歳ばかりか、五人の大人の中にまじっていた少年はシエラの姿を認めるなり、金茶の髪を揺らして駆け寄ってきた。

触れた絹手袋越しにスメラギの重心が動いたのが伝わった。見た目ではわからないが、間合いを読んで有事に備えている。

しかし少年はスメラギの動きを知ってか知らずか、子どもの足で五歩ほど手前で止まり、胸に手のひらを当てた。

「はじめまして、ローレンシア王女シエラ殿下。僕がアズィール帝国第三皇子アシュアです」

――太陽神の子だと思った。

細い金茶の髪が光をはらんでふわふわと風にそよぎ、ローレンシア人より色みがかった肌は存分に光を浴びて育ったことがわかる。

そしてその瞳は陽光そのものの金色で、なめらかなローレンシア語の闊達な声とにこやかな表情からは健やかな生気が伝わってきた。

（この子がアシュア皇子――）

まったく予想していなかった相手に、スメラギも身を強張らせているのがわかる。

なぜ前もって皇子の年齢を言わなかったのか。左についているシリスがいまどんな顔をしているのか気になったが、いまこの少年に答えるべき者は自分しかいない。

シエラはスメラギに預けていた手を放すと、ドレスを軽くつまんで会釈した。

「はじめまして、アシュア殿下。遠路ようこそローレンシアにいらせられました」

そう告げて、シエラは芝生の上に両膝をついた。

周囲で息を呑む気配がしたが、今は形式を重んじているときではない。子どもは嘘や心の壁をいとも簡単に見抜く。そしてこの場は非公式のもの、記録係もいなければ典礼庁の者もいない。

「アシュア皇子、初めての竜の旅はいかがでしたか？」

目線の高さを合わせてにこりと微笑むと、幼い皇子は目を輝かせて答えた。

「楽しかったです！　竜はかっこよかったですし、竜の背から見る空はとても綺麗でした！」

長年敵対関係にある国の国使らしからぬ純粋な答えに、思わず笑みがこぼれた。

「お気に召していただけてよかったですわ」

そう告げて立ち上がり、シエラはふたりの竜公をちらりと見やる。

「殿下にご紹介いたします。こちらが竜騎士を束ねる竜騎士団団長のシリス」

「青竜公閣下には昨日も大変お世話になりました」

「こちらは竜騎士団黒竜隊隊長、〈黒竜公〉スメラギです」

黒竜公閣下にはお初にお目にかかります、とアシュアは礼に則って挨拶をする。

動きに洗練された感じはないが仕込まれたものを無理に出している様子もなく、育った環境が自然とそうさせているのだとわかった。

「こちらも紹介しますね。僕の側役のナシルです」

やはり一番に紹介されたのは、先ほどの神官風の青年だった。

髪は薄く金色の混じった銀、髪質が細いのか、ひとつに結わえて左肩に垂らした姿は絹糸が流れるようだ。瞳は森の奥の湖が宿すような深い碧色。その顔だちは彫りが粗く深いアズィール人とちがい、すべてが寝静まった夜更けにそっと彫り出したかのような繊細さがある。

「ナシルは僕の教育係で先生なんです」

ナシルと呼ばれた青年は「おそれ多いことにございます」とアシュアに目礼して、一歩あゆみ出る。そしてシエラの前で片膝を折ると、彼だけがまとうサーコートにも似た長衣の裾が芝生に広がった。長衣には星空を写し取って線で結んだかのような刺繍がされている。

ナシルは胸の前に右手を当てて、顔を伏せる。ローレンシア式の礼だ。

「お初にお目にかかります、王女殿下。若輩の身ながらこのたびのご訪問に関してアシュア殿下の後見を務めさせていただきますナシルと申します。皇子は御年六歳にて、至らぬ点などございますればそれは私の責め、いかに些細なことでもお申し出くださいませ」

やわらかな微笑を浮かべながらナシルもまた、とても流暢なローレンシア語を口にした。

ローレンシア語は以前国境を接していたガルシア帝国と語源がおなじだが、アズィール語とはかけ離れている。一朝一夕に身につくものではない。国使としてはにわか仕立てでも、以前からローレンシアへの対策をしていたということだ。

かくいうこちら側――学舎を出ているシリスとスメラギはもちろん、シエラもアズィール語に通じている。

（後見ということは、実質上彼が責任者ってことね）

国使はそれなりの身分のある者が務めるが、外交交渉もおなじ者が務めることは稀だ。国の内外に明るい臣下がついて、実務的な話はその者と行う。そして最後に文書をしたため、国使がサインを入れて合意とするのが通常の形だ。

アシュアが国使として幼すぎるのはたしかだが、ナシルが外交責任者だとしても相当若い。

（帝国はなにを企んでいるの……？）

「当方もアズィールの国使をお招きするのは初めてのこと。至らぬ点は気兼ねなく申し出て、ごゆるりとご滞在くださいませ」

「殿下の寛大な御心に感謝申し上げます」

たしかな知性を宿すナシルを、シエラはじっと見つめていた。

⚜

中庭での謁見を終えて王宮の一室に下がるなり、スメラギはシリスに詰め寄った。

「どうして第三皇子があんなに小さいんだ!?」

「どうしてと言われても、あの子が第三皇子本人であることは確認しているよ」

「当人かどうかは問題じゃない！」



シリスはすでに知っていたはず、それを耳に入れておかなかったのはシリスの意図だ。
「それに第一皇子も第二皇子ももう成人しているはずだろう!?」
「ああ、そういう意味か。たしかに兄ふたりは二十歳前だったはずだけど、年の離れた兄弟もめずらしくないだろ。それに皇帝の子がみんな皇子として認められるわけじゃないからね」
「どういうこと？」
シエラが口を挟むと、シリスに意味深な瞳を向けられて「……ですか？」と付け足した。
国使の前ではシエラだが、スメラギの前ではルーシェだということをあやうく忘れるところだった。
「君も知っていると思うけど、アズィール帝国の皇帝は男だ」
「それが？」
ローレンシアでは女王と決まっているが、頂点に立つ者が男か女かというだけで大きな違いがあるものだろうか。
「ローレンシアでは女王の産んだ子が王子、王女と認められる。けれどどれだけ子だくさんの女王でも百人産むのは無理だ。けれど男が王なら百人の子がいてもおかしくない」
（あ、妃がたくさんいるから……？）
たしかアズィールには後宮があるはずだ。
「百人みんな皇子にしてもいいけど、皇位争いの元になるからね。帝国では帝位を継ぐだけの

後ろ盾を持つ男子しか皇子とは認められない。女性にはそもそも継承権自体がないしね」
「けれどどうしてアシュア皇子だけそんなに年が離れてるんですか？」
「兄二人の母の生家がよほど強力だったか、それに匹敵する後ろ盾を持つ妃の子が生まれなかったってことだろうね」
あの国は流行り病が多いから単に育たなかっただけかもしれないし、皇帝が遠征つづきで帰ってこなかったせいかもね、とつづけるシリスにスメラギが問うた。
「しかし送りこんできたのがその第一皇子でも第二皇子でもないってことは、ローレンシアは舐められたってわけか？」
「一概にそうも言えないな。使者に皇族を指定したのはこっちだし、その中でアシュア皇子を選んだのは帝国の気遣いかもしれない」
「どういうことですか？」
「未婚でお年頃の王女のお披露目パーティーに国使を送り込もうとしていたんだ。成人した皇子だったなら王女の結婚相手を押しつけてきたも同然、併合でも合併でも呼び方はさておき要は体のいいローレンシア乗っ取りだ。けれど帝国はそこまで強硬策に出るつもりはないということだ。まぁ機会を窺っているだけかもしれないけどね」
「あのナシルっていう側近は何者なんですか？　有力貴族の息子とか？」
年齢だけ見ればナシルの方が婿候補にふさわしい。皇子でなくとも有力貴族の息子でも十分

候補になりうる。だがシリスはさらりと否定した。
「いや、あれは大学の学生」
（学生……？）
思いがけない答えにシエラは小首を傾げた。
「なに。君はなんだと思ったの」
「たしかに万騎長と言われるよりは納得できるんですけど、てっきり神官かなにかだと……」
「うん、あながち外れではないね。そもそも帝国とローレンシアとは神官の意義からしてちがうから。〈星読み〉って知ってる？」
「はい。アズィールは星読みが天意に従って少年を選び出し、その少年が初代皇帝になって創られた国だと聞きました」
アズィールでは神官の地位は高く、貴族階級ではないが政治に大きく関わっていると聞く。
「そう。あの国では星読みが語る天意が重要な意味を持つ。そして天意は祈りで授かるんじゃない、神官が文字どおり星を読むんだ」
「星って……なにかの喩えじゃなくて、本当に夜空の星なんですか？」
「うん。星読みは天文学や数学が組み合わさったもので学問体系化されているらしいね。そしてそれを学ぶには帝都の大学に入るしかない。帝国は身分制度が厳しいけれど、星読みは身分も出身国も関係ない特権階級だ。かなり難関らしいけどね」

「俺より年下に見えたが、あの年でもう学生か」
「童顔ってわけじゃなくて本当にまだ十七だってさ。それで数年前には才を買われて皇子の教育役に抜擢されたんだから、十歳そこらですでに大学にいたことになる。いわゆる神童だね」
（神童……）
帝国の神童の実力を拝ませてもらおうか。シリスはそう言って面白がっているが、シエラ自身は縁がない――いや普段から傍にいる天才肌に振りまわされているせいか身構えてしまう。
ナシルと交わしたのは挨拶のみ、しかし妙に場慣れしていて落ちつきがあった。本心を覆い隠した微笑も、なにを言われてもその頭脳で対処できる余裕があったからだろう。
「顔立ちからしてナシルは東国の出だな。アシュア皇子は母がフェルトゥナ人か」
「ご明察。あそこの王族は太陽神の恩寵とかで金の瞳が出るからね」
アシュアは顔立ちこそアズィール人だが、瞳の色は母から継いだらしい。フェルトゥナというのはエンテ海を渡った向こうにある砂漠の国だ。ローレンシア同様に古い歴史を持つ国だが、帝国の攻勢の前に屈した。
ナシルやアシュアの外見からも、帝国がさまざまな国と関係を持っていることがよくわかる。
（そういえば隊長だって帝国の生まれなのよね……）
黒髪黒目のスメラギの外見はいかにも東国人だ。密猟者の手から救いだしたのは自分の父とはいえ、もし帝国で育っていれば外見から揶揄されるようなことはなかったかもしれない。

（……でも隊長が父様の後を継ぐ人でよかったな）

〈闇〉の聖竜の魂は代々おなじと言われている。デュラクに父の竜であった頃の記憶はないだろうが、デュラクの主であるスメラギが側にいてくれると父の魂も側にいてくれるような気がして安心する。

「まぁ君に近づくのが年端のいかない子どもでよかったよ。いろんな意味で」

「どういう意味ですか？」

「うん？　君も年頃の女の子だってこと。恋はどこに落ちているかわからないからね」

「そんなこと……！」

あるわけないじゃない、と噛みつこうとしたが「まぁまぁ」と遮られた。

「数日間、子守りの仕事だと思えばいいよ。きっと気があうから」

それってどういう意味!?　と睨みつけても、シリスの微笑は揺らがない。

「けれど、相手が子どもだからって口を滑らせないようにね」

「……どういうことですか？」

「我々が相手にしているのは皇子ひとりではないってことだよ」

さらりと漏れた本音に、その場の空気が張り詰めた。

皇子の背後にあるアズィール帝国、その強大な国の使者への対応は薄氷を踏むようなものだったことを思い出す。

床を這う冷気のような沈黙を破ったのはスメラギだ。
「おい、こいつの不安を煽ってどうする」
「一応、現状を正しく把握していてもらおうと思って」
ああ、ラギ君は他に見てもらいたいものがあるから後からおいで。
そう言ってシリスは部屋を後にする。問題だけ積み残して去った相手に、スメラギは苛立ちの息を吐いた。
（あのシリスの言葉はどういう意味……？）
シリスはなにかとひっかき回すがいらないことは言わない。それどころか言っておくべきことすらその笑顔の奥に隠してしまうが、言わないこと自体にも意味がある。
（そのシリスが言い残したんだもの。ちゃんと考えなさいって意味よね。わたし、皇子相手にちゃんとできたのかな……）
アシュアが幼い子どもであったこと、そして幼い子どもらしからぬきちんとした受け答えができることに驚いたのは事実だ。きっとアシュアもまたシリスとおなじく神童と呼ばれる類の人なのだろう。
兄妹のように側にいた頃は気づかなかったが、自分も辺境の学校に通って同年代の子どもたちと接するようになって、シリスが普通でなかったことに気がついた。
スメラギの落ちつきようを見てもそうだ。普通の十八歳ではない。持って生まれたものがち

がう——そういう人は、いる。

自分はその類でないことは知っている。生まれこそ王族だが、中身は普通の人間だということは辺境の学校に通ってよくわかった。

ルーシェもやるべきことはひととおりできる。しかしできるのは人並みにだ。どのような分野でもずば抜けてできる人はいて、そういう人には敵わない。シリスのように飄々と、スメラギのように自信を持って、ナシルのようになにが起きても動じないなんて自分には無理だ。

(私はそんな人を相手にしてゆくの……?)

賢い人がなにを考えているのかわからない。自分にはなにもないというのに——

「ルーシェ……? ……ルーシェ!」

「はっ、はい! すみません!!」

スメラギの声に呼ばれるだけで背筋が伸びる。そして叱られる前に反射的に謝ってしまった。

「おまえはよくやっている。皇子への挨拶もちゃんとできていたぞ。あいつもそれを指摘しなかったってことは礼式的にまずいことでもなかったはずだ。王女じゃないからって負い目に感じる必要はない。ナッシュのときも思ったがおまえは本番に強い」

「そう、ですか?」

「ああ。一夜漬けで頭に叩きこんだだけの知識なんて使いものにならない。とっさのときになにをすべきか、その判断力をおまえは持っている。ちゃんと教育を受けてきたみたいだな。自

信を持ってこのまま乗り切れ」

王女としてではないものの、認められたということだ。ほっとして頬の強張りが解ける。

「ただ、距離が近かったのはたしかだな。皇子が暗器を持っていたら危なかったぞ。おまえは自分の身を守ることだけ考えろ」

そう告げてスメラギの手がほころんだシエラの頬に触れ、白手袋越しにたしかな指の感触と熱が伝わってきた。

「心配しなくていい。俺が側にいる」

その穏やかな目と声は、すっとルーシェの心に届いた。

（そう、隊長がいてくださるんだもの）

なにも心配することはないと、ルーシェは「はい」と頷き返した。

スメラギが部屋を出ると、先に出たはずのシリスが廊下の壁にもたれかかっていた。

「そういやラギ君は、王宮の内部って知らなかったなと思ってね」

竜公が迷子になってたら恥ずかしいからね、と微笑むシリスにスメラギはため息をついた。

「どうしたんだい？　疲れた顔をして」

深刻さを微塵も感じさせない声音に、誰のせいだと言いたい言葉を呑みこんで、スメラギは

睨みつけるに止めておく。

「……正直、やられたと思った」

国使は皇族に限る――そう枠をはめたのはシリスだ。

たしかに帝国はこちらの要望どおり皇子を送りこんできた。しかしよりにもよって六歳の末皇子を送ってきたのは要望に対するあてつけか、それとも別になんらかの意図があるのか。

いや、意図がなければこの人選はありえない。しかし真意を察するには帝国に関する情報が少なすぎる――そう考えをめぐらせることで精一杯という状況に追い込んだのは、間違いなく目の前のこの人物だ。

「なぜ一言言っておかなかった？　こんなときまで俺で遊ぶな」

「いや、別にラギ君の驚く顔を見たかったわけじゃないよ」

そう言ってシリスは廊下を歩き出し、スメラギは傍らに並ぶ。

「あの子がどう対処するかなと思って」

「……ルーシェが？」

「君の執務室でよく見かけているとはいえ、ああいう役どころは初めてだからね。本番にならないと見えないことってあるし」

「おまえな……」

結論を出すべき外交問題は持ち込んでいないとはいえ、相手は帝国の使者だ。ぶっつけ本番

で対応を見るなど綱渡りにもほどがある。
「で、あいつはどうだったんだ」
ルーシェは皇子と目線を合わせるためとはいえ、芝生に膝をついた。あれが公式の謁見の場なら許されることではない。自分は悪くないと言ったが、王宮の儀礼に照らせばどうか。
「まぁいいんじゃないかな。あのことが皇子の心をほぐしたのもたしかみたいだし。役目の重さにかちんこちんに固まって言われたことしかできない人形よりよほどいい」
「あれは手に余るぞ」
やれと言われたことを素直にやっているだけの部下なら苦労しない。そう言外に告げるが、シリスのにこやかな表情が崩れることはなかった。
「だからちょっと重石を付けたつもりだったんだけど」
「重石はいいが、変に不安を煽るのはやめろ。あいつなりに重責を感じて、気持ちが不安定になっているんだ。あいつがへこんで困るのはおまえもおなじだろう」
「ちゃんと檻の外は危険だよって伝えておかないとまた勝手に突っ走りかねないからね。それにしてもよくすぐに立て直したものだ」
その言で、自分もまた試されていたことを知る。王宮の壁は声が漏れるほど薄くないはずだが、部屋を出るまでの時間と空気で察したのだろう。——だからこいつは油断がならないのだ。
「ずいぶんなついているじゃないか」

「人の部下を愛玩動物みたいに言うな」
「預けた身として気になっていたからね。父親の話も聞いてたんだ？」
「ああ、以前遭難したときにな。かなり心の傷になっているようだな。だからなおさらこの任はさせたくなかった」
王女のためとはいえ帝国は父の仇――この任はルーシェには酷だ。
「まぁね。でも彼女が将来何になるにしろ帝国との関係は避けられない問題だから、それを乗り越えてほしいという思いもあってね。けど帝国には正直いいとこ突かれたなとは思ったね」
どういう意味だ、とスメラギは眉をひそめる。
「婿候補が外れて良かったんだろう？」
「それもそうなんだけど別の問題がね。女性はとかく子どもに甘い」
「――――は？」
「人の子に限らず犬猫の子とか小動物とか、女性は可愛いものを無条件に愛でる傾向がある。いずれ母になるためにそういう資質があらかじめ具わってるんだろうね」
そういえば、ルーシェが幼竜をずいぶん可愛がっていたことを思い出す。あれでは騎獣というよりもはや家族だ。
「しかし母って、あいつはまだ子どもだぞ？」
「騎士団内はさておき、世間一般的には子を産める年になれば結婚してもおかしくないよ」

「カイトもたしかそんなことを言っていたが、しかしそれがどういう関係がある？」
「あちら側が皇族を出してきた以上、こちらの応対役ももちろん王族になる。王女の誕生日を指定してきたくらいだから王女が対応することは見越しているだろう。王女は十代半ばの娘、幼い皇子に対して無条件で甘くなる。警戒されている中、年頃の皇子でたらしこむよりよほど効果的だ。ローレンシア王家が女系であることを見越しての人選だろうね」
　初めて帝国から国使を迎えるというので警戒しているのはこちらもおなじだ。幼い皇子を送り込んでくることで、こちらの警戒心を解くことに成功したということだ。
「それとあの側近は要注意かな」
「〈星読み〉だと言っていたな？」
「星読みがおとなしく天体観測してるだけならいいんだけどね。天文学、算術、地理、気候はもちろん、政治にだって通じている。いわば軍師みたいなものだ。国の様子を探られないよう街や大通りの見えないところを翔んできたけど、王都の位置は星の位置から算出して筒抜けになったも同然だ。ほかにも些細なことで国力を測られるかもしれない」
　ルーシェに伝えたことより重い内容に、スメラギの身が引き締まった。
「相手も用意周到にしていたのかもしれないけど、こちらもなにもせずに遊んでいたわけじゃない。情報はあとで届けさせる。――あの子を守るのは君だ」
　まかせたよ、とシリスはスメラギの肩に手を置いた。

「山中の夜は冷え込みます。どうか室内にお入りくださいませ」
夕食後、ナシルが露台で空を見上げていたアシュアに声をかけると、うん、とアシュアは素直に夜空に背を向けた。
「星がなにか告げましたか」
「ううん、僕に読めることなんて知れてるよ。一日翔んだだけだっていうのにずいぶん遠くまで来たなって。馬だと十日はかかるよね」
アシュアはアズィールの帝都育ちだが、生母の国のフェルトゥナ人が養育役についていたせいか星を読むようになった。目印のない砂漠では星が読めなければ命に関わる。
しかし普通の六歳の子どもができることではない。アシュアは年の割に聡い。
「竜ってすごいね。一頭いるだけでぐんと変わるだろうね」
それは軍事か、政治か、それとも国境線の変わった世界地図だったかもしれない。
「王都の位置も竜の飛翔速度もいま算出させております」
「うん、それはまかせるよ」
そう告げてアシュアは長椅子にもたれかかると、傍らにあったクッションを抱きしめた。

アズィールでは椅子もあるが、床に厚手の絨毯を敷いて直に座ることが多い。対してローレンシアでは用途に応じてさまざまな椅子が用意してあり、床に座る文化はないようだ。

しかしずっと靴履きでは窮屈だろうとナシルは長椅子の傍らにひざまずくと、失礼致します、と小さな足を手に取った。ナシルの手のひらの半分ほどしかない足はやはり年相応だ。

「初めてお会いになられた王女はいかがでしたか」

「とても綺麗なお人だね。清楚で、可憐で、まるでナシルの母上のようだと思った」

ナシルは、恐縮にございますと頭を下げる。

「先日は青竜公にお会いになられましたが、黒竜公はいかがでしたか」

「青竜公閣下とは対照的に、黒竜公閣下は寡黙な御方だね。おふたりの雰囲気はずいぶんちがうけど……おふたりともなんか怖いな」

「怖い、とは？」

「敵意や害意はないと思うけど、それはあくまで王女にとって害がない範囲でだよね」

「お二方とも騎士でいらっしゃいますから、身を挺して王女をお守りなされることでしょう」

「うん、軍属されているせいかもしれないけど……特に黒竜公は上の兄上に似ている気がしたんだ。僕は兄上にあまりお目にかかれないけれど、ナシルはどう思った？」

「私は母が第一皇子の御生母様にお仕えしていただけで、私自身お近づきになれる方ではありませんでしたから……黒竜公は東国のお顔立ちですから似てお見えになったのでしょう」

ナシルが靴を脱がせ終えて見上げると、アシュアは不安そうな眼を向けていた。
「いかがなされました？」
「……ねぇ、僕がローレンシア語で話したこと怒ってる？」
（先ほどの会話で悟られたか……）
アシュアがこのようなことを言い出したのは不自然さを感じ取ったからだ。
第一皇子の件を追及されてはと話を適当に切り上げ、当たりさわりのない結論に落としたつもりだったが、自分らしくないと悟られてしまった。
だがそう誤解されたのは都合がいい。交渉役の自分がローレンシア語がわからないでは通らないが、皇子はわからないことにしておいてかまわないという話になっていたのはたしかだ。
「驚いたのはたしかですね。先日青竜公とはアズィール語でご挨拶されましたので」
「青竜公は騎士団長って聞いていたから絶対アズィール語で通じると思ったんだ。でも王女は僕たちの言葉にどれくらいご堪能かわからなかったし……どうしても王女とお話ししたくて」
「王女をお気に召されましたか」
「うん。ちゃんとお話しすればちゃんと聞いてくださる方だと思った」
話を聞いてくれるというのは、会話が成り立つ相手だと認めたということだ。
年相応よりわきまえた物言いをするアシュアは、後宮では奇妙な存在として扱われた。後宮の女たちには子どもらしくない、奇異な存在に見えたのだろう。

そんな中で育ったアシュアは、話せる相手とそうでない相手を嗅ぎ分ける。ナシルは王女に特異性を感じなかったが、子どもの勘は時に人智を超える。

「左様にございますか。ご心配なさらずとも殿下はしっかりご挨拶なさいました。王女とたくさん言葉を交わして誼を通じれば、きっと陛下もお喜びになりましょう」

「うん！」

裏表のないアシュアの笑顔に、ナシルは微笑を返した。

ナシルは夜の祈りを捧げたのち、アシュアの眠る天蓋つきの寝台を辞した。

あとは警護の者に任せ、向かいに与えられた部屋に入る。そして導かれるように露台に出ると夜空を見上げた。

昔から神事で行われていた星読み。それを学問にまで高めたのが現皇帝で、夜でも正確に位置を把握して進軍できたのが今のアズィール軍の強さでもある。だが神事とはちがい、学問は理解さえすれば誰でも使える力だ。知識が流出しないよう手は打たれているが、ひび割れた甕から水が浸み出すようにいつかその知識はアズィールだけのものではなくなる。

アズィール軍が他国に先んじられるのもあと数年だ。

（それまでになんとかしなければ――）

思惟に沈みかけていたナシルに声がかかったのはそのときだ。

「よく取り入ったものだ。神童と聞こえが高くとも所詮子どもか」

月の落とす光、その影から生じるくぐもった声に、「不敬にあたりますよ」とナシルは感情を削ぎ落とした声音で返した。

その声の主は使節団の警護役のひとり、陽の下では自分に声をかけることはおろか前に立つことすら許されない者だった。

しかし彼に身分は必要ない。主からの下命――それを果たすためだけにある存在なのだから。よく言う、と漏れた苦笑にも熱はない。

「対象は把握した」

「くれぐれも欲はかかぬように。意に反します」

「そんなお節介でもないんでね」

それだけ言い残し、男の気配は消える。ナシルは息をつくとあらためて星空を見上げた。

星は自分ひとりに語りかけるわけではなく、誰の頭上にも輝くもの。知識という強みがあるうちにローレンシアは対処しておくべき――その認識は共通している。

ただその対処方法がそれぞれ違うだけだ。この使者団にはさまざまな思惑が混じりこみ、利権の糸は複雑に絡みあっている。

先ほどの男が告げた対象というのはアシュアの私室だ。

部屋の仕掛けや抜け道を半日で見抜いた男に、自分は王宮全体像を探るような真似をするな

と釘を刺したのだ。アシュアの部屋を探るだけならローレンシアに知れても警固の一環と言えるが、王宮を探れば密偵行為だ。ローレンシアを刺激することはアシュアの望むところではない。

だが、男はアシュアの意に反しても自身の主の意に適うと判断すれば動くだろうし、ナシルにそれを止める力はない。

（――天は誰を選びたもうか）

それぞれがそれぞれの思惑に従って動いた結果、最後に生き残るのは誰なのか。

勝てるだけの力は今はない。自身の敵同士をぶつけて力を削ぎ、最終的に己が立っていられるようにするにはどうすればいいか。

見上げれば万人が見ることができるものから、いかに重要な情報を探し出して選び取るか。

そういう些細な積み重ねが、一歩一歩自身の立場を伸し上げる。

――自分が選ぶべき道はどこにある？

ナシルは遠いはるか故郷に想いを馳せながら、星空を見つめつづけた。

第3章

国使の接待

カイトは報告書を手に女官に案内された一室の前に立ち、眼前に聳え立つ扉を見上げた。手を伸ばせば扉の上辺に指先が届くかどうか、天井はその遥か上にある。助走をつけて跳べば天井に届くような隊舎とは大違いだ。

（王宮住まいか……さぞかし中も豪勢なんだろうな）

扉に彫り込まれた精緻な竜の紋章からもそれはあきらかだ。貴族出身だけにその彫りひとつにどれほどの高名な彫物師が携わっているかわかってしまう。

（まぁ隊舎に比べればどこの屋敷でも立派か）

竜騎士団は軍の花形、さぞかし優雅な暮らしだろうと思われがちだが、所詮軍属なので隊舎は質素で殺風景、華やかな夜会に行くための衣装など無機質なクローゼットの肥やしだ。

そして七歳からその空気にどっぷりつかって生活している上司は、放っておくと寝食を忘れて仕事をする人だった。

至れり尽くせりの王宮なら問題ないと思うんだが――などと思いながら扉を開けると、目の前に壁が聳え立っていた。

（――は？）

見上げて気づく。壁に見えたのは宮廷画家の手による繊細な天井画を覆い隠さんばかりに積み上げられた紙の山だった。

（たしか、王宮に住みはじめたのってたしか昨日からだよな……？）

報告書やら書籍やらを何十冊ではなく何十往復単位で運ばされたことはあるが、ここまで見事に壁になっていたことはない。

積み上がった報告書の迷路の途中に寝台を見つけたが、使われた形跡はなかった。これでは部屋に報告書を運ばせたというより書庫に寝台を放りこんだといった方が正しい気がする。

迷路を抜けてなんとか奥までたどりつくと、部屋の主――スメラギは片付けるのを諦めたものか、椅子の場所だけ確保して目を通した書類を片っぱしから傍らに積み上げていた。

「隊長、あの……書類に囲まれて出られなくなってませんか」

「読み終わるまで出られないんだから別にかまわん」

そう言いながらも、報告書をめくる手が止まることはない。

「どうしたんですか、この書類の山は」

「奴が持ってこさせやがった。これでも三分の一らしい。こんなにだらだら事細かに報告書を書きやがって諜報部はヒマなのか？　ヒマなんだな？」

今度頭数ふんだくってやると言っているように聞こえたのは空耳ではないようだ。

諜報部ということは帝国に関する報告書だろうか。めくる手に苛立ちが表れているが、それ

でも逐一見ているということは見るべき点が一枚に一箇所くらいはあるのだろう。

「あの、隊の報告書をお持ちしましたがどこに置けばよろしいですか」

その辺でいいとスメラギは言うが、もはや手の届く範囲に空き場所がない。

カイトが戸惑っていると、視線ひとつ向けずに報告書をかっさらわれた。

スメラギはすべて副隊長決裁済みとの表書きを見ると、あとは案件名にざっと目を通しただけで「奴に持っていけ」と突き返す。

「悪いが俺は今しばらく終わりそうにない。カイト、それを奴に押しつけたら悪いがあいつに付いてやっていてくれないか。そろそろうろつきはじめるころだ」

「はぁ……」

王宮ならさすがのあいつもおとなしくしているだろう——そう思いながら部屋を辞したカイトだったが、スメラギの読みは正しかった。

渡り廊下を歩いていると中庭から声がかかった。

「カイト!? どうして!?」

はっと見やると、その少女はやわらかいピンク色のドレスに揃いのレースのリボンを髪に編みこんで垂らしていた。髪の色は混じり気のない銀で、声をかけてこなければ本人だと気づかなかっただろう。女官が腕をふるったらしい控えめな化粧は、整った肌によくあっている。

「隊長に頼まれて来た。隊長はそのうち戻られる、が……」

「どうかしたの？」
「……けっこう似合うな」
「そ、そう!?」
「ああ、板についてる」
ドレスは一朝一夕に着こなせるものではなく、案山子に着せてもさまにならない。「そうかな!?」と照れるさまは王女らしくないが、さすが貴族の生まれだけはある。おおむねシリスの見立ては正しかったということだ。
（さすが女性を見る目は確かだな……）
「それにしてもどうしてカイトが王宮に？」
「隊長に書類を届けにな。だがそれどころじゃないようでおまえの護衛を頼まれた」
「お忙しいの？」
「まぁな。おまえも隊長を手伝え――と言いたいところだがその恰好じゃ無理か。大変な務めを引き受けたな」
「うん、でもこれもお仕事の一環だし……」
「たしかにな。王女はいらっしゃらないがこれも大事な要人警護だ。自分で自分の身を守れ」
「学舎ではそんなことまで習うの？　なにかコツがあったら教えてくれない？」
今さらか!?　と驚いたが、今から教本を読めと言うわけにもいかない。仕方なく護身術の手

ほどきをはじめる。

ルーシェの手首を取って基本型を教えていると、香水のやわらかな香りがカイトの鼻孔をくすぐった。見下ろすと目に留まったのは露わになった首筋だ。

(細い首だな……)

隊服姿のときは気にならなかったが、これでは狙われればひとたまりもない。

(学舎にはこんなに華奢な女生徒はいなかったしな)

普段からスメラギが心配して気にかけていたのも無理もない。たとえ部下でなくても、守ってやらないとと思ってしまう。

「……カイト?」

教えていた手がいつしか止まり、ルーシェに不思議そうに見上げられてカイトははっと我に返った。

(なにを考えてるんだ俺は……!!)

どうかしたの? と首を傾げるルーシェに返答に窮していると、スメラギがやって来た。湯を浴びて身支度をしてきたらしく、一晩寝ていない疲れの色もきっちり洗い流している。

「カイト、悪かったな」

「隊長!」

ふり返るルーシェの頬は上気していた。以前からスメラギによくなついていたが、今までは

叱られてばかりで近寄りがたいといった雰囲気だった。スメラギの態度はあいかわらず淡々としているが、ルーシェの中では確実になにかが変わっている。

（これはなにかあったと噂されるのも無理ないよな。隊長も気づいていると思うんだが……）

しかし注意深く様子を探るが、

「綺麗に着つけてもらえてよかったな。今日も猫をかぶり通せよ。ウサギでもいいけどな」

「今はうさじゃないですし!!」

「それだけ元気があれば大丈夫だな。気負わずやれ」

スメラギは気づいていないのか、それとも気づいた上で部下として遇するつもりか。

ルーシェの立ち位置は、従者としても副官としても今後の自分に関わってくる。

二人の関係がどのようなものかいましばらく観察したかったが、

（あの部屋の片づけが先か……）

芸術的に積み上がった紙の山をうんざり思い出しながら、カイトは一礼して中庭を後にした。

（うー、やっぱりウサギ……）

今日はルーシェとはちがって髪はやわらかく編んで肩から垂らし、おしとやかなイメージで作ってもらった。それでもやはりスメラギの中ではウサギ扱いだ。

騎士団はおしゃれする場所ではないとわかっている。だがここは王宮だ。せっかくの正装な

のだからすこしはちがう自分を見てほしい。

（カイトはちゃんと驚いてくれたし、竜公叙爵のときとおなじ王女なのに、どうして気づいてもらえないのかな……）

王女の看板を背負っていないと気づいてもらえないのはつらいものがある。先日王女として挨拶しようと試みたときはシリスの陰謀のせいで勘ちがいされたが、それでもすこしずつでも見直してもらえたら……などと思ったのは甘かったらしい。

（わたしに王族として威厳がないから？　どうすれば母様みたいになれるの？）

顔立ちは母と似ているはずなのに絶対的になにかが足りていない。それはスメラギに気づいてもらえない以前の問題として、王族として問題がある気がする。

「……おい、人の話を聞いているか」

「え、はい？　あっ、すみません！」

「おまえな。人が話している最中に意識を飛ばすな。猫をかぶるのはおまえの身を守るためでもあるんだぞ。その服じゃ隊服とちがって身動きが取りづらい。布も薄手で防刃性など皆無だ。なにより喉元を晒しているんだから無防備な恰好だということを忘れるな。急所はちゃんと覚えているな？」

どれだけ周りに人がいようが常に取り囲んでいるわけではない。急所を仕留められれば対処できないとスメラギは口すっぱく忠告する。

（それはやっぱり暗殺術を仕込まれて育ったから……？）

しかしいま自分の周りにあるのは、夏の陽射しをふんだんに浴びて青々と育った木々や園丁がひとつひとつ丁寧に鋏を入れた薔薇で、暗殺という血なまぐさい世界とはほど遠い。なにより自分は王宮の空気に慣れ親しんでいる。殺気をいくら押し隠そうとも、不穏な空気にはまず気づく。

（でも隊長が心配するのは、わたしが頼りないからよね）

王女として認めてもらえない――その根っこもおそらくそこにある。

（認められるようにちゃんとしなきゃ）

そこに女官がアシュアの到来を告げた。

今日のアシュアは朱色に金糸の刺繍入りのベストを羽織り、揃いの帽子をかぶっていた。かぶるというより載せるだけのつばのない帽子だ。共はナシルひとり連れているだけだった。

「おはようございます、シエラ殿下、黒竜公閣下。山の朝は気持ちがいいですね」

「アシュア皇子、おはようございます。やはり帝国とはちがいますか？」

「この季節のこの時間だと地面も風も熱くて、女人が屋外に出るときは風除けや日除けの布を手放せません。こうして花を愛でながら陽の下で散歩できるのはいいですね」

「ローレンシアとはずいぶん気候がちがうようですね。ゆっくりお休みになれましたか？」

「はい。夜の冷え込みは祖国ほどではありませんでしたから」

そんな他愛のない話をしながらアシュアを庭園に誘う。垣根の向こうには近衛騎士がいるが、庭園には一歩も立ち入らず声が漏れ聞こえるような距離にもいない。アシュアは帝国ではこんなに生い茂って咲くことはないと目を輝かせていた。

シエラはアシュアが花に興味を持っていることを悟ると、いくつかある東屋の中でも赤薔薇の垣根のほど近くの東屋に案内した。

「こちらに朝食をご用意させますね」

どうぞと席に案内すると、そのときアシュアが金の瞳でシエラを見上げた。

「王女とお話ししたいのですが」

やわらかな笑みを浮かべて告げられた言葉に、シエラの息が一瞬止まった。

それは人払いの申し出だ。

(アシュア殿下とふたりきり……?)

ここはローレンシアの王宮で食事を供するのもローレンシア側、なによりアシュアはまだ幼い。守られるべきはアシュアで、ナシルが毒見も置かないのは不用心だと反対するかと思ったが、予想に反してナシルはすぐさま深々と一礼した。そしてアシュアが腰に佩いていた金装飾の剣を恭しく受け取り、一歩下がる。

アズィール側が先に引いた。ローレンシアとしてもこの申し出を受けざるを得ない。

シエラがスメラギに目配せすると、言いたいこともあるだろうがそのような思いは微塵も出

さず、スメラギは一礼して下がった。

女官が大理石の天板のテーブルに白磁の器と銀食器を並べはじめ、準備を終えると東屋から下がる。とはいえ給仕役である彼女たちはほんの数歩後ろに控えているが、給仕役を気にしないのは皇族であるアシュアもおなじようだった。

ふわりと熱を上げるのは焼きたての丸パンにボイルされた卵、なめらかに漉したポテトのスープ。このあたりの食文化に違いはないがアシュアが驚いていたのはベビーリーフのサラダだ。ローレンシアは高地があるので火を通さずに食べられる野菜が取れるが、帝都近辺では生で食べられるものはあまりないと聞く。アシュアは不思議そうに目を瞬かせながら口に運んでいた。

「しゃきしゃきしていて美味しいですね！」

口に合うものだったらしいと落ちついたところで、シエラは切り出した。

「あの、当方になにか……？」

人払いをして下がったのはナシルとスメラギ、ということはスメラギをこの場から外したかったということになる。しかしアシュアは思いもよらなかったようにあわてて否定した。

「ちがうんです。黒竜公閣下になんら思うところはありません。ただ殿下とゆっくりお話がしたいとナシルには昨日のうちから言ってあったものですから。たまたま今日お側にいらっしゃったのが黒竜公閣下だったというだけなんです。閣下にもそうお伝えください」

「そうでしたか。しかしなぜ私と？」

すると、アシュアはすこし言いづらそうに瞳を伏せた。

「壁があるのが、嫌なんです」

「壁、ですか？」

「伝わりにくかったらごめんなさい。たとえば、目の前に人がいても人を介して言葉を伝えるとそこでどうしても振り落とされるものがあるんです。そこに相手がいるのに見えない壁越しに話しているような……祖国では謁見しても、たとえ言葉自体が通じても直接言葉を交わせるわけではなくて、そう思うことが多かったんです。直答を許しても誰かの目があるとそこでまた見えない壁ができて、今度は出てくる言葉そのものが壁に阻まれてちがうものになっていて……ごめんなさい、うまく説明できなくて」

「いえ、よくわかります」

アシュアが先に話したのは通訳や側近を介したときの話、そして後から話したのは、まさにシエラ自身が感じていたことだった。

ルーシェとしての自分。シエラとしての自分。シリスは同じだと言うけれど、シエラのときには言えないことがたくさんある。それを封じているのは、王女シエラとして見ている周囲の目だ。喉から出かかっている言葉でも、視線の壁に阻まれて紡ぎだせない。

「言葉の壁があると自分の想いが壁越しにしか伝わらない——だから僕はいろんな国の言葉を

学びました。そしてせっかく殿下にお会いできたのですから、壁をなくしてお話ししたかったんです。僕の国と、殿下の国のことを」

シエラははっとアシュアを見つめた。六歳の子どもでもアシュアはちゃんと皇子だった。

「外交の交渉権はナシルに一任されていて、そしてここにナシルはいません」

自分は公人ではあるけれども、国使としての対話ではないとアシュアは言っているのだ。相手にしているのは皇子ひとりではないってことだよ――シリスの言葉が脳裏をよぎる。

（でも、それでも）

にこやかに他愛ないおしゃべりをするのではなく、踏み込まなければ聞けないこともある。

「どうか、シエラ殿下が我が国に思っておられることをお聞かせください」

その言葉にシエラは手の甲を軽く振って女官たちを下がらせた。人払いの合図だ。さすがに完全にいなくなることはないが彼女たちはしばらくなにも聞かず、石に徹する。

人の気配が消えて風がさやかに流れる中、シエラはアシュアを見つめて口を開いた。

「――ローレンシアとアズィール帝国は長い間、話し合いの場を持たずにいました。ですから帝国が我が国をどのように認識しているのか我々は知りません。なのでお訊ねします。アシュア殿下はローレンシアが帝国を攻める意思があるとお思いですか」

「いいえ。ローレンシアは周辺諸国より大きな力を持ちながらも、過去何百年もその国境線を広げることはありませんでした。聖女が治められし地を代々守りつづけておられるように思い

ます」

「では、帝国はローレンシアをどのように見ていらっしゃるのですか」

「ローレンシアが攻めてくるようなことはないと思っています。十年あまり前の戦のとき、僕はまだ生まれていませんでしたが、レーヌ河沿岸の街人はそのときのことをよく覚えていました。河に並んだ軍船が一晩にして沈められたとか、空を覆い尽くした竜の大軍はそのまま帝都に攻め込んでもおかしくなかったと聞きます。ですがローレンシアは砦を奪うことも帝都に攻め入ることもありませんでした」

「ならば私たちのあり方をご理解いただけたと思うのですが？」

十年あまり前の戦は、宣戦布告もなかったので停戦協定もなかった。

話し合って納得してくれるものなら軍備はいらない。領土を侵すようなことがあれば反撃する、その姿勢がなによりのメッセージだ。

「はい。ですが背後に強大な軍事力を持つ国がある、それだけで恐怖を抱いているのはたしかなんです」

それはローレンシアにとっても条件はおなじ、いや背後どころか真正面の強敵だ。全面戦争になればローレンシアは勝てない——それが竜騎士団団長シリスと黒竜隊隊長スメラギ共通の認識だ。自分はまだそこまでの判断はできないが、おそらくそれは事実なのだろう。

けれどもたとえローレンシアに勝ったとして、周囲の諸外国にその隙に付け入られることが

ないだけの余裕を残しておかなければ真に勝ったことにはならない。その危うい均衡の上に、戦に発展していない現状がある。

「そこで陛下は僕たち兄弟に言いました。ローレンシアを収めてみろ、と」

「収める、とは？」

感情を出さないよう意識したつもりだが、声の固さは隠しきれなかった。

攻め取って併合しろという意味なら穏やかではない話だ。

「どのようにかは示唆されていません。ただ父はローレンシアの対処に関しては僕たち皇子に一任して、直接関与しないことを伝えました。ローレンシアを攻めるという意見がないわけではありません。でも僕は話し合いの場を持つべきだと主張して、国境付近の城にいたんです」

こんなに早く機会が訪れるとは思いませんでしたが、とアシュアは礼を述べ、

「僕はローレンシアと戦になってほしくないんです」

そう告げるアシュアの金の瞳には、ただ戦が嫌だからという理由だけではない強い意思があった。

「殿下はなにか、ローレンシアに特別な思い入れでも？」

「直接関係ないかもしれません……ですが十年ばかり前、アズィールがローレンシア侵攻を諦めたあと、兵を向けた先をシエラ殿下はご存知でしょうか」

（たしか、南のフェルトゥナを併合したと――）

フェルトゥナは帝国の南、エンテ海の向こう側の砂漠の国だ。
そしてその名を最近聞いたことがある。
（金の瞳はフェルトゥナの王族の証って……）
「アズィールに攻められたフェルトゥナは攻勢を防ぎきれず、やがて降伏しました。――そして生まれたのが僕です」
アシュア自身の口から語られた出生に、シエラは息を呑んだ。
「僕の母はフェルトゥナの女王でした。でも王位継承争いの末に即位したばかりで、国内を束ね切れないところをアズィールに攻められて降伏するしかなかったと聞きます。……父の後宮に収められた母ですが、取りたてて不幸だとは思いません。母は一の妃に遇されて敬われていますし、生まれた僕も皇子として認められました。早くに降伏を決めたこともあってフェルトゥナ人は帝国民として扱われていますから賦役もさほど重くありませんし。でも母はもう二度と祖国の地を踏むことはできません……大切な、人質ですから」
（人質……）
その一言が胸に重くのしかかった。
「もしローレンシアが帝国に下ることがあれば、他の国がそうであったようにローレンシアにもフェルトゥナとおなじ処遇がなされるでしょう。僕は母のような女性がこれ以上増えてほしくない――そう思ったんです」

「では帝国は……いえ殿下は今後、他国の侵略は考えていないと？」
「我が国は隣接するどの国よりも大きくなりました。今後は領土の拡大よりも優先すべきことがあると思います」
壁をなくしたい。そう言っていたとおりアシュアは自分の言葉で伝えてきた。ナシルや側近に覚えこまされたものをくり返しているだけでないことは、目を見ればわかる。
「――わかりました。戦争を望まないのは私もおなじ、殿下のお気持ちはありがたく受け取ります」
その一言に、息を詰めていたアシュアの表情がぱっと華やいだ。伝わった、ただそのことを純粋に喜んでいた。
「アシュア殿下はその想いを実現するためにはなにをすればいいとお考えですか？」
「……残念ながらその交渉をするのは僕ではありませんし、そもそも今回の訪問は外交交渉はしないという前提に認められたものです。ですが今後も話し合いの場を作っていただけるなら和平の道も開けてゆくものと思います。我が国が交渉で無理難題を申し上げないよう、僕も頑張りますから」
その一言にふっと微笑がこぼれる。言うべきことを言ったことに満足したのか、アシュアも頬をほころばせてティーカップに手を伸ばした。
冷めてしまいましたわね、とシェラは女官に合図しようとしたが、「いえ、このままで」と

アシュアが止め、まだ会話をつづけたいのだろうとシエラはその手を下ろした。
「アシュア殿下はまだ幼くていらっしゃるのに、よく考えていらっしゃるのですね」
（わたしが六歳のときってなにを考えていたかしら……？）
すくなくともアシュアの半分も物事が見えていなかった気がする。
するとアシュアはすこし困惑した表情を浮かべた。
「やっぱり、変ですか？」
「いえ、おかしくはないですが……なにか困ったことでも？」
「申し訳ありません。後宮では他の子とちがうって気味悪がられていたものですから……」
おかしいと気づいたときに他の子を真似ればよかったんですけど、気づくのが遅くて。
アシュアは悲しげな笑みを浮かべ、そしてすこし諦めたようにテーブルの上に視線を落とす。
そのとき瞳に宿った暗い光が、シエラの記憶を呼びもどした。
朝日が昇りかけた頃、露台でスメラギが見せた——自分の生い立ちを知られて、怖がるのは無理もないと手を引こうとしたときの。
周囲に拒絶されることがあたり前になっている者が持つ目。
「そんなこと気にしなくていいと思います！　皇子は皇子なんですから……！」
そうとっさに口をついていた。そして言ってから気づく。おなじようなことを最近シリスから言われたことを。——君は君なんだから、と。

（そういうこと、なの？）

アシュアは目を見開いて見入っていたが、ややあってはにかんだような笑みを浮かべた。

「シエラ殿下がそう言ってくださる方でよかったです」

それは雲に翳っていた空が晴れ渡り、太陽の光があまねく広がるかのような笑みだった。

「実は初めてお会いしたときから、殿下はお話を聞いてくださる方なんじゃないかなって思っていたんです」

それがこうして話してくれるきっかけになったなら嬉しいことだ。逆に、皇子をただの六歳と侮っていたならと思うと怖いものがある。

「ナシルも僕と初めて会ったときにそんなことを言ってくれました。年齢という壁に阻まれて、言葉が思うように伝わらないのがもどかしかったって」

「あの方が？」

「はい。でも大学には普通じゃない人が大勢いて、普通じゃなくてもそういうものかと思ってもらえるって。僕もそこに行きたいなと思いましたけれど、皇子として立てられた以上は責務を果たして、ローレンシアと良い関係を築ければと思います」

「私も両国がよき隣人でありつづけられることを願っています。今回のご訪問が実り多きものでありますように」

シエラは心から湧き上がる温かなものに押されるままに微笑んだ。

一方、主の側を離れたスメラギとナシルは、すこし距離を置いた庭園の片隅からふたりの様子を眺めていた。

話している内容が聞こえる距離ではない。諜報員ならば唇を読めば会話がわかるが、スメラギはその専門訓練を受けていない。ただ遠目に見るルーシェの表情から和やかに会話が進んでいるらしいと判断するだけだ。

すぐ傍らにいたナシルも安堵の息をついてスメラギに向きなおり、膝をつくようにすこし腰を落として一礼した。アズィール流の礼だ。

「黒竜公閣下にお付き合いいただき申し訳ございません」

「いや、それはかまわないが、アズィールではあんなに気安く人を近づけるのか？」

皇族は周囲に側近が取り巻いて、接見相手が声の届く距離にいても直接言葉を交わすことはないと聞いている。そんなアズィール育ちだというのにアシュアは距離がなさすぎる。

「皇子はもともと好奇心旺盛というのもございますが、なにぶんまだ六歳、ほんのすこし前まで後宮でお育ちでしたから表の習いに慣れておいでではないのです」

ではなぜそんな表に不慣れな六歳児を連れて来た。そうつっこみたいのを呑みこんでいると、拳ひとつ背の低いナシルが小首を傾げて顔を覗きこんできた。

「赤きオーラが小さな火花をあげておられますよ」

「……は？」

完璧なローレンシア語だ。しかしすぐに理解できなかったスメラギに、ナシルは言を継いだ。

「〈気〉の循環というものをご存知でしょうか。気は体内を一巡してはじめて人の力となりますが、その流れが途中で阻害されると滞り、病を得やすくなります。人の気はオーラとして発せられ、健康状態と精神状態が入り混じり、表情より如実に表に現れます。閣下は体内の気は循環しておいでですが肩から上で滞っておられる。なにか悩みごとでも？」

「……占い師であられたとは初耳だが」

すると、「いえ」と微笑を浮かべた。

「占いではなく東洋医術の考えのひとつです。黒竜公閣下は東国に縁の方とお見受けしましたので。ご両親は東国の方ですか？」

「自分を育てたのはこの国だ」

暗に親のことは知らないと告げると、ナシルはすぐさま察したらしい。

「ですが良き名をいただいておいでですね」

「この名になにか謂れでもあるのか？」

スメラギというのはローレンシアではまず聞くことのない響きだ。帝国の共用語にもなかったはずだが、ナシルはこともなげに答えた。

「ええ。東の最果てにある古き国の言葉です。閣下が東に縁がないようでしたら、きっとご両

親が博識な方だったのでしょう」

（この名は……）

親から授かったものかといえばちがう。両親の記憶など欠片もないが、どこからこの名を付けられたかを自分は知っている。

「閣下はその名に縁の地と民が、いまどのような暮らしをしているか考えたことはございませんか」

「あいにく目に見える範囲のことで精一杯でな」

「人は種子のように突然異国に芽吹くものではなく、必ず人から生まれ落ちるものです。己は知らぬとその血を育みつないできた地の縁を否定することはできないでしょう」

「まるで他に祖国があるような口ぶりだな、使者殿？」

アズィール帝国を代表しながら異国を祖国と語るのか。そう言外に匂わせるとナシルは口端にかすかに苦笑を浮かべ、再び東屋のふたりに視線を向けた。

「やはり王女殿下が気がかりですか。ご心配いただかずとも皇子は真にローレンシアを信じておいでです」

「――裏がある物言いに聞こえるが」

「申し訳ございません。私も信じておりますが、立場上、過信はできませんから。ですがあなた方のご要望どおり皇子をお連れしたことで、我々の願いが真摯なものであることは汲みとっ

ていただけたかと。あとご要望の品はあのようでよろしかったでしょうか？」

帝国がローレンシアに来るにあたってローレンシア側が出した要求はふたつ。

使者は王族のみ、そして手土産に家畜を千頭――その意図はすでにシリスから聞いている。

「拝見したところ、糧食に不自由しておられる様子はございませんが……」

ナシルはなぜに手土産にそのようなものを欲したのかわからずにいるようで、スメラギはあらかじめ用意していた理由で「竜がよく食べるのでな」と流した。

「竜といえば、遅くなりましたが竜公叙爵おめでとうございます。長らく姿をお見せにならなかった王女殿下が、閣下の叙爵の際にお姿をお見せになられたとか……やはり竜公がご婚約者というのは真なのでしょうか」

「それはただの噂で殿下がお出ましになったのは偶然だ。帝国は殿下の夫君にご興味が？」

「竜公は帝国では縁のない風習ですし興味があるのはたしかです。それに未来の大公殿下はやはり帝国にとって関心事ですから、できれば人となりを伺っておければと」

「大公についてはまだなにも決まっていないし、ご存知のとおり俺はまだ叙爵を受けたばかりの若輩の身だ。竜公のことなら青竜公に聞くといい」

するとナシルは「あの方ですか」と微笑を浮かべた。賢明なことに、それは婉曲な拒絶と受け取ったらしい。

砦から王都までたったの一日、だがすでにそういう印象を抱かれるということはそれなりの

やり取りがあったのだろう。さぞかし見事な化かし合いが繰り広げられたにちがいない。

（だがナシルの笑みはどこか奴に似ている……）

シリスがなにかいたずらを秘めているのに対しナシルは微塵も思惑をにじませない。だがふたりともいくら微笑もうと奥に潜む芯は揺らがない。

そこにあるのはおそらく自負。どのような荒波も自分の才覚で乗り切れるという自信。こちらに迷いがあればすぐさま呑まれてしまうような強い意志を持つ者を前に、凡人にすぎないこちらは揺らぐ足場で踏ん張って己を見失わないようにしなければ抗えない。

（……きっと王宮はそういう者ばかりなんだろうな）

血統や天恵の竜によって格が決められた貴族たちは、揺るがないたしかな土台を持っている。己がその地位にいることを確信できるもの――それは出自だ。

先ほど期せずしてナシルが語っていたもの。この地で生きる祖先から、脈々と自分につながる血。この国の者がみな認めるたしかなもの。

しかし自分には、聖竜に選ばれた、ただそれしか拠って立つものがない。

――王宮は、騎士団みたいにおとなしく聖竜に従ってくれる輩ばかりじゃないからね。

脳裏に蘇るのはシリスの声だ。

（だから場数を踏んで慣れておけということか）

基本ふざけた奴だが、悔しいことにそのあたりの采配については疑う余地がない。多少悪ふ

ざけがすぎるのを差し引くとしても、信用できる上司を持つというのは幸せなことなのだろう。

帝国の手土産の指定にしてもそうだ。

――力のある馬、乳のよく出る山羊、美味い牛。それらは交配の上に成り立つ芸術品だよ。千頭もいれば雌雄が偏ることもないだろうし、繁殖させればそのまま我が国の財産になる。その場かぎり目を楽しませる金銀宝石よりよっぽど価値がある。

君も美味しいものを食べたいでしょ？　という冗談はさておき、どう考えても毎日最高級品しか口にしていないはずの王族の着眼点ではない。

「ああ、ちょうど終わったようですね」

東屋を見やると、女官に椅子を引かれて皇子とルーシェが立ちあがるところだった。

「皇子のお話にお付き合いくださいましてありがとうございました」

ナシルはそう一礼し、皇子に近づくとルーシェに挨拶をして皇子とともに中庭を後にした。

ルーシェはどこで身につけたものか、王族然とした微笑で両者を見送っている。その眼には、つい半時ほど前とはちがう穏やかな光があった。

そのときよみがえったのもまたシリスの声だ。

――女性はとかく子どもに甘い。

東屋からこちらに向かってくるルーシェは妙に晴れやかな笑顔をしていた。……悔しいが、この一件についてもまたシリスの見立てが正しかったことを認めざるを得ないようだ。

忠告されていたにもかかわらず見落とした、その失態に舌打ちしたくなるのをこらえながらルーシェを王宮に導いて、スメラギは重く口を開いた。

「――皇子となにを話した」

「え？」

先導するスメラギの背を追っていたルーシェに、スメラギは廊下でふり向いて告げる。その声はいつになく厳しいものだった。

（なにか機嫌悪い……？　わたし、なにかした？）

「帝国がローレンシアをどう思っているかとか、今後どうしたいとか、そういうことを話しました、けど……」

「それは人を遠ざけてまで話す必要のあることか」

そう言われて、ルーシェはなにがスメラギの機嫌を損ねているかを悟った。

（皇子とふたりきりになったから？）

「たしかに人を遠ざけましたけど、このとおりなにもなかったわけですし……」

アシュアは剣をナシルに預けていたし、たとえ短剣を潜ませていても六歳の子どもが豹変して襲いかかってくるとは思えない。上っ面の微笑かどうかを見極める目は持っているつもりだ。

「危ない真似はするなと言っておいたはずだ。わざわざ危険な状況を作りだしたのはなぜだ」

「なぜって……皇子が気兼ねなく話せたらいいなって思って……」
「気兼ねなく？　そんなことで命を危険に晒したのか？　――馬鹿かおまえ」
切り捨てるような冷たい声音に、ルーシェは身を強張らせた。
「結果的になにもなかったにしてもだ。なにかあってからでは遅いんだぞ？　正直、他人にご自身の身代わりをさせる殿下もどうかと思う。しかし殿下はご自身の御身第一であることをちゃんとわかっておられるから認められたのだろう。仕事をこなすのも大事だが、おかれた立場をわきまえるのもまた大事なことだ」
王女を引き合いに出しての指摘は、おそらくスメラギが想定している以上に痛いものだった。
（もし隊長がわたしの正体を知ったら……）
呆れ果ててもう叱る気にもならなかったかもしれない。
「だからおまえもにわか仕立ての替え玉の身で役割以上のことをしようと思うな。帝国との距離を縮めることもたしかに重要だが、それはおまえがすることじゃ――」
「！　それでも!!」
そのとき思わずルーシェは声をあげていた。言ってから上官の言葉を遮ってしまったと気づいたが、止めることができなかった。
「どうしても話したかったんです！　皇子といま話してこの国を知ってもらうことは絶対にローレンシアのためになると思ったから！」

軽率だったとは思う。だが皇子とふたりで話したことが誤りだったとは思わない。

（だって、私だって壁があるのは嫌だもの）

シエラとルーシェ、その想いを分け隔てていたものは周囲の目だ。

王女としての自分、国使としての皇子、それぞれ背負うものや両国の思惑によって言葉が遮られて大切な想いが届かないのは嫌だ。

それに先ほどの皇子の微笑は安全なところにいては手に入れられないものだった。

いくら危険だと言われようとも、あの笑顔を得たことは後悔していない。

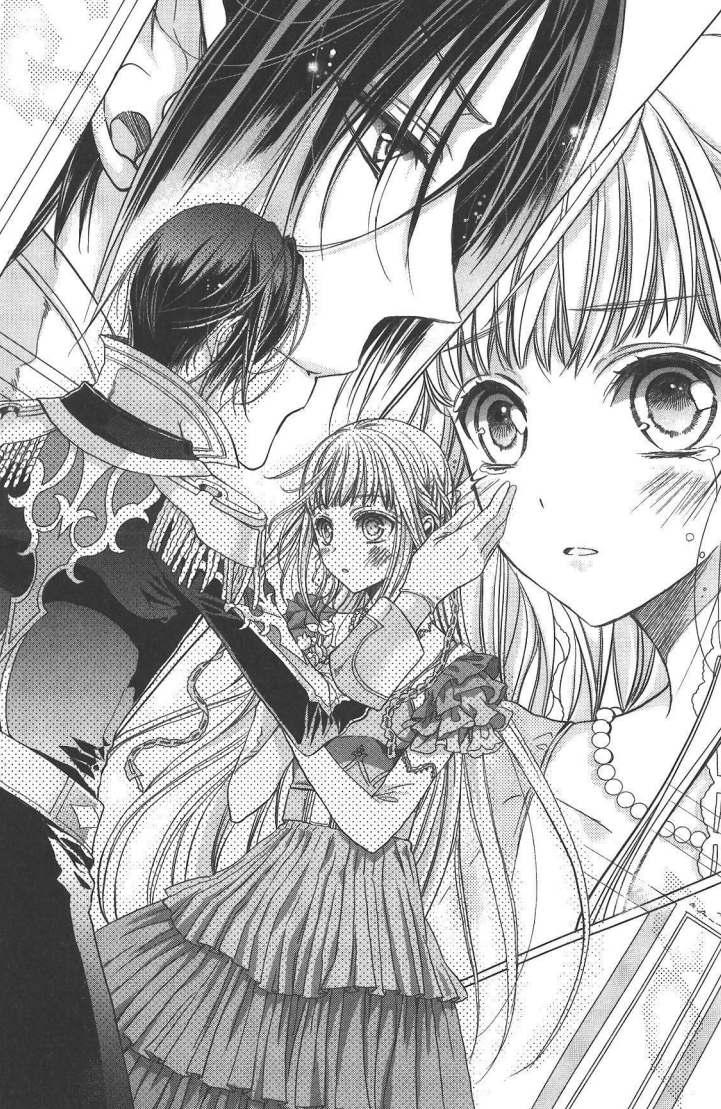
「わたしは自分ひとり安全なところにいて果たせる任務だとは思っていません！」

「自分の立場がわかっているか？　国を想うのはかまわない。だがおまえはただの騎士見習いで、おまえの任務は国の関係を考えることじゃない。無事に任務を果たすことだ。それにおまえが怪我でも負うようなことがあれば本末転倒、和平の道は未来永劫断たれるんだぞ。それをわかっているのか？」

「なんで二人きりで食事しただけで危険だっていうんですか!?　たしかに帝国は敵かもしれません！　けど皇子は人を傷つけようとかそんなこと考えてないし、そんな人じゃな――」

その言葉は、不意に感じた衝撃で断ち切られた。

（え？）



音はない。痛みもない。けれどもスメラギの右手が自分の頬に触れていた——いや。

（……叩かれ、た？）

以前叩かれたときと強さはさほど変わらない。痛くはない。けれども叩こうとして加減してくれた前回とはちがう。今回は叩くべくして叩かれた、そうわかった。

「おまえは昨日今日会ったばかりの皇子のなにを知っているというんだ。——頭を冷やせ」

（どう、して）

わからないのは叩かれた理由ではない。わかってもらえない理由だ。

（どうしてわかってくれないの？　アシュア皇子はそんな人じゃないって）

敵国の皇子だということは重々承知している。けれども自分が実際にこの目で見て信じられると思ったのだ。なのにどうしてスメラギは信じてくれないのだろう。

騎士団ではこれくらい叱られるのはいつものことだし、もっと大きな雷が落ちることもある。

（……でも、もしわたしがもっとしっかりしていたら）

六歳の子ども相手にまったく心配がないくらいしっかりした騎士なら、スメラギもきっとこんなことは言わないはずだ。

全然痛くなかった、頬が熱を帯びる。

自分が頼りないことはわかっている。けれど自分を信じてもらえていない、言葉が通じない

ことがこんなに苦しいなんて。
「ルーシェ？　――おい!?」
ルーシェは涙を抑えることができず、すみませんと一言落としてドレスを翻し、その場から逃げ出した。

追うこともできず、かといって立ち去ることもできないままどれほど立ち尽くしていたか。
「どうしたのラギ君、こんなところでぼやっとして」
そんな能天気な声とともに首に腕が回された。
ほのかに香る薔薇の匂いは、品はいいが自然の花の移り香ではない。香りを凝縮させた薔薇水だ。この忙しいときに朝っぱらからなにをしてたんだというべきか、朝だからこその残り香なのか、しかし今は上司の素行を追及する気になれなかった。
「ずいぶんへこんでるみたいだけどどうしたの」
「……あいつに手を上げたら逃げられた」
「おやまぁ、私刑は服務規程違反だねぇ」
先に上官命令を無視したのはあいつだ――そう言ったところで現実は変わらない。

自分は間違ったことをしたとは思っていないし、懲戒処分ならいくらでも受ける。だが。

「なんであいつはああ本気で突っ走るんだ……」

ルーシェに求められているのは王女の身代わりのみ、ただにこやかに笑っていればいい。だがルーシェは損得や自分の保身のことなど微塵も考えず、素直な心の赴くままに突っ走る。彼女の言い分は国を想ってのことだとわかっている。それでも王宮の奥に隠れて姿を見せない王女のために身を張ってまで帝国との関係修復に努める必要はない。

「もうすこしうまく立ちまわる方法があるだろうに、あの馬鹿が……」

「まぁしかたないね。教育係が君じゃあね」

「……どういう意味だ」

「だってただの部下だろう？　結果的に怪我がなかったならそれでいいって放っておけばいいじゃない。でも君は本気で心配して手を上げたわけでしょ。突っ走る彼女と一体なにがちがうっていうんだい？」

「！　それは……」

「上官がこんな感じなのに部下にはうまく立ちまわれと諭しても無理な話だよ。適当に手を抜いて目の前の仕事だけこなせっていうなら君がちがう育て方をするべきだった。ちがう？」

シリスは涼しい顔で正論を突きつける。べつに俺は正論なんて好きでもなんでもないけどこう言ったほうが君にはわかりやすいと思ってね、なんて嘯きながら。

「だがあいつは女だぞ？　万が一、傷でも負うようなことがあったらどうするんだ」
「べつに責任取って嫁にもらえなんて言うつもりはないよ。それにそれとおなじこと、学舎の娘たちに言える？」
その指摘にスメラギは言葉を失った。
たしかに学舎には少ないながらも女生徒がいて、訓練で打ち身や擦り傷の絶えることのない毎日を送っている。だが彼女たちは筋力でこそ男に敵わなくとも男よりよほど心身共に逞しく、ルーシェが彼女らとおなじ存在だとは思ってもみなかった。
「……おまえがあいつに傷をつけるなと言ったんだろうが」
「たしかに言ったよ。けど君がそこまで大切にしてくれるとは正直思ってなかったかな」
「大切もなにも……」
首回りの大きく開いたドレス姿を見て確信したが、身体の線が学舎の女とあきらかにちがう。あのやわ肌では、肘を曲げても力こぶができようはずもない。学舎にいる彼女らはみずから戦うしなやかな鹿、ルーシェは雷鳴に身を縮こめるだけのただのウサギだ。生き物として根っこからちがう。
そしてこのとき、シリスが半人前以下の彼女を身代わりに選んだ理由もわかった気がした。
帝国の人間の観察眼がしっかりしていればいるほど、まさかあれが騎士だとは思わないだろう。露わになった細い首は暗器を潜ませるまでもなく食事用の丸みを帯びたナイフで掻き切る

ことができる。

ルーシェは自分がどれだけ無防備な姿をさらしているか気づいてもいない。ドレスは身体の線も出ず厚地で首元もきっちり防がれている隊服とはちがうのだ。

それに身体の線が細いだけでなく、どこか精神的に脆い部分もある。こちらの意見を突っぱねるような強さを見せることもあるくせに、放っておいたらどこで泣いているかわからない。

「ほっとけないだろう、あれは……危なっかしくて目が離せない」

「へぇ？」

シリスのその相槌に、いつもとちがうものを感じてスメラギが視線を向けると、なんの前触れもなく腹に一発、拳が入れられた。

「て、め……ッ」

普段から本性を見せないシリスは、感情を悟らせないことに関しては本職の暗殺者並みだ。とっさに身構えていなければ、容赦なくみぞおちに入った拳に意識を奪われるところだった。

「なにしやがる……！」

「なにって、可愛い妹を泣かせた罰かな」

「ざけんな……ッ！」

「手をあげたことは愛の鞭ということで許してあげるとして、これでも手加減したんだよ。

――君さ、どれだけの覚悟があってそれ言ってるわけ？」

「な、に……？」

「そんな大事なこと、半端な気持ちで言われても困るんだよねぇ。これでも今すぐため池に叩き落としてやりたいのを我慢してるんだから感謝しなよ。……ああ、ため池はちょうどいいかもね。昨日寝ていないんだろう。午後のことは俺に任せて、君はため池に頭でも突っこんで目を覚ましてくるがいいよ」

また寝ぼけたことぬかしてると今度こそ本気で沈めるよ？

そう告げるとシリスは、言っている中身にそぐわない貴公子然とした微笑を浮かべた。

「今日の視察はいかがでした」

ナシルは、夕食を終えて長椅子で書を読んでいたアシュアに問いかけた。

アシュアが見ていたのは宝物殿の図録だ。今日は朝からシエラと食事を取り、昼からは王宮の宝物殿の視察だった。図録を見ながら今日見たものを思い出しているのだろう。

「うん。ローレンシアの職人はとても緻密な仕事をするね。手先が器用なのかな。それにあんなに腕のいい細工師が国のお抱えじゃないっていうんだから、やっぱり豊かなんだろうね」

銀細工にしろ陶磁器にしろ芸術性の高い品を作っていられるのは、それだけの手をかけても

見合うだけの買い手がいるということ――経済的余裕があるということだ。それに多種多様な宝玉が出るらしく、伝説の五頭の聖竜にちなんだ宝玉で飾られた細工も散見された。

「今朝方は王女殿下とどのようなお話を？」

「うん？　いつも言っていることだよ。周囲に人がいたらどう言葉が歪められるかわからないから、シエラ殿下から直接お言葉が聞きたくて。殿下は話を合わせるためだけじゃなくて、ちゃんと聞いてくださったよ。お優しい方だね」

「それはよろしゅうございました」

「……ナシルは甘いって思う？」

アシュアは身を起こし、すがるような目で見上げる。自分が理想論を語る者に対して冷徹な眼で見ていたためだろう。

アシュアが言うのは王女の認識の甘さ、そして優しい王女を好む自身の甘さだ。たしかに今も、あの王女は甘いと思っている。

「わかっているんだ。それは自分の弱みだって」

アシュアは人と少しばかりちがったせいで、奇異なものを見るような目に晒されてきた。それをただ純粋に受け入れてくれた王女に好意を持つのも無理はない。

「でもシエラ殿下なら言葉が伝わる気がしたんだ。これから社交界に出られて、たとえなにか変わられることがあっても、今日伝えた言葉をお忘れになることはないだろうなって」

王女の純粋な人となりは、ずっと人前に出ず、人の目にさらされることのなかった賜物だ。多くの人と接し、言葉の裏を読むようになれば、その純粋さを保ちつづけることは難しい。その現実をその年で悟ってしまったアシュアの才と立場を、憐れに思ったのはたしかだ。

ナシルは長椅子の傍らに跪き、アシュアを見上げた。

「純粋であるということはひとつの特権です。王女の人となりと殿下の志はとても得難いものかと存じます」

ナシルは微笑んでみせると、沈みかけていたアシュアの表情が輝いた。

「たくさんお話しなさって陛下への土産話になされませ」

「うん！　ねぇ、ナシルは黒竜公となにを話していたの？」

「実に他愛のない話ですよ。黒竜公はずいぶん王女殿下をご心配なされていたようですので」

「そうなんだ。そういえば青竜公閣下が青の目で、黒竜公閣下が黒の目ってことは、竜は竜公の色に関係あるのかな？」

「いえ、それは偶然でしょう。女王陛下は白竜、王女殿下は赤竜とお聞きしておりますから」

「シエラ殿下の竜は赤竜なんだ？　もっと竜が見たいなぁ」

それは大きなもの、強いものへの憧れで、とても子どもらしい純粋な想いだった。

「明日は神殿です。竜に縁がある場所ですから王女にお頼みになってみてはいかがでしょう」

「そうだね。明日も殿下に会えるね。楽しみだな」

「もう遅い時間にございます。眠りにつかれれば瞬く間に明日が参りましょう」
ナシルは寝台に入ったアシュアに就寝の祈りを捧げ、アシュアの部屋を後にした。
自室に戻ったナシルはそのまま露台に出る。空に広がる満天の星、昨日のうちに把握した星の位置を再確認していると、時折星が瞬いていることに気がついた。
星が明滅しているのではない。星を遮るものがあるのだ。
しかと姿を捉えることはできないが、夜警の竜が闇に紛れて翔んでいる。
〈空の目〉か……)
夜の行軍はどうしても灯りが必要だ。どれだけ覆い隠しても空からいとも簡単に見つかってしまう。空の斥候が可能というだけで、ローレンシアがどれだけ軍事的優位に立っているか。周辺諸国が勃興衰退をくりかえす中、何百年にもわたって領土を侵されることなくひとつの王朝がつづいているのはローレンシアのみ、ひとえに竜のおかげだ。
(その力を放置するわけにはいかない、か)
そのとき背後にたたずむ男に気がついた。昨夜の男だ。ナシルはふり向きもせずに告げた。
「明日は神殿に参られます」
「中にいるのは神官だけか?」
「近衛も入りません。ですが聖地に踏み入ろうとは不遜なこと」
「不遜、ねぇ」

その言葉は返してやるよと言わんばかりに忍び笑いを漏らしながら、「了解した」と男は闇の中に消えた。

たしかに天空神の使いと崇められる竜を、軍事目的にしか考えていない自分が口にする言葉ではなかったかもしれない。

だがあの神秘の存在をくわしく知りたいと思うのは当然のことだ。竜に守られしローレンシアの民も、その正体を知りたくないはずがない。だがそれを抑えているのが聖女の末裔たる王家の存在だ。竜の神秘性がそのまま王家への畏敬の念につながり、何百年にも渡って聖女の子孫がその玉座にありつづけている。

だがそのローレンシアに、つい先日まで大きな火種があった。

――いっこうに表に姿を現さない王女シエラ。王女には竜の加護がないのではないか？

もしそれが本当ならローレンシア数百年の歴史を揺るがす大問題になっていたはずだ。

ローレンシアは内部崩壊するかもしれない――竜の国を労せずして得られるか、と帝国は静観していたのだが、その火種は先日の黒竜公叙爵のときに王女が姿を現したことにより消えてしまった。

そして皇帝は次の手として、三人の皇子にローレンシアとの関係を託した。皇子三人の政治的手腕を見るためだ。それは皇位争いがはじまったことをも意味し、このローレンシア訪問が皇位争いの初戦となることはまちがいない。ローレンシアだけではなく帝国もまた、時代が変

わろうとしている。

その至高の椅子に座る者は誰なのか、そしてそのときこの手に残るものはなんなのか。

胸に去来するものはただひとつ――この血を育んだ祖国への想いだ。

（あの方はご自身の出自をご存じではない……）

その名からもしやとは思っていたが、まさかその予想が本当だとは。

ローレンシアにて予期せずして得た宝玉。これもまた運命なのだろうか？

スメラギは目に見えるものだけで精一杯だと言っていた。ナシルとて祖国を見たことなどない。しかしその血の故郷が――己の民が帝国に蹂躙され、いまも搾取されつづけていると知ればどう思うだろう？

今の帝国から独立することは容易ではない。だがせめてフェルトゥナのように正規の帝国領になれば、祖国の民は奴隷から人間になる。生活もぐんと変わる。

この皇位争いは、祖国回復のための大きな転機になるはずだ。

（――うまく立ち回らなければ）

ナシルは左手の拳を握りしめると、その想いを再確認するように胸に拳を当てた。

第4章　亀裂

朝、シエラは寝台に両手をついて重い身体を起こした。
（目……腫れてないかな……）
昨日スメラギに叱られて自室に逃げこんで泣いて、とても人前に顔を出せる状態ではなかった。
そして夜が明けて朝。今日ももちろん王女としての務めがあるし、スメラギも側にいる。
（もちろん会いたくないわけはないんだけど、顔、合わせづらいな……）
鏡を覗きこむと、ちゃんと冷やしておいたおかげで見てわかるような腫れはない。
今日は昼からアシュアを神殿に案内する。王宮と隣接する神殿はシエラには幼いころからよく知る場所だし、案内役には司祭がつく。なにも気負う任務ではない。
（お仕事だもの。ちゃんとしなきゃ。……皇子だけじゃなくて、隊長のことも）
スメラギを側役につけたのはシリスだ。それは自分に足りない部分を補うためで、二人でひとつの任務をこなすもおなじ、ぎくしゃくしている場合ではない。
シエラは鏡台に腰掛け、いつもの癖で鏡台のブラシを手に取って我に返った。今日は自分でしなくとも、王女として侍女が飾りつけてくれる。

鏡の中には混じり気のない銀の髪を下ろしたままのシエラ――ルーシェがいる。

（――隊長にお会いするのに髪を結わないなんて不思議）

いま王宮にスメラギがいることもそうだ。シエラが生活している場所にルーシェの上官のスメラギがいて、そして自分はシエラではなくルーシェとしてスメラギと接し、その一方でアシュア皇子にはシエラとして会う――

（これじゃ混乱しても無理ないかも）

スメラギから逃げ出してしまったのも、この状況に気持ちが追い付いていないからだ。

（でも、こんなんじゃダメ）

シエラが鏡に指を伸ばすと鏡の向こうの自分も指を伸ばしてくる。本当の自分と鏡の奥の、シエラでもルーシェでもないもうひとりの自分と鏡を介して触れあいながら、シエラは語りかける。

（私はシエラ・アーシェラータ・ローレンシア。ローレンシア女王の娘。――ルーシェとして愛された頃の記憶に流されないで）

スメラギの前で名乗っているルーシェというのは、シエラの幼い頃の愛称だ。

物心つく前、ただ愛されただけの頃の名。――父にも呼ばれていたはずの。

だからこそ、黒竜公であるスメラギにこの名で叱られるのはつらい。けれど。

「ちゃんとしないと、ね」

鏡の向こうでは、シーツにくるまったままのルーが「くぅ？」と小首を傾げていた。そしてなにか面白いことでもあるのかなと近づいてくる。

そんなルーを抱き上げると、温かさが心地よいのかルーは首をすり寄せてきた。遊んで遊んで？　と尻尾をぱたぱたさせるルーをきゅっと抱きしめる。

「ごめんねルー、今日も遊んであげられないの」

王女として表に出ている間、ルーは部屋に閉じ込めたままだ。騎士団ではずっと肩に乗せていたし、叙爵前は成体になる訓練で付きっきりだったので甘え癖がついてしまったようだ。

「そうだ、ルー、おリボン替えよっか」

シエラは鏡台の引き出しからケースを取りだし、ルーがまるごと入ってしまいそうなケースをぱかっと開けると、そこには色とりどりのリボンがずらりと並んでいた。白からはじまり黄、赤、紫、青と濃淡さまざまなグラデーションになっている。

「ねぇ、今日はどれがいい？」

ルーはケースの内に入りこむと、黄色のリボンをくいくいと引っ張った。

「これがいいの？」

シエラは慣れたように尻尾を向けるルーに短いリボンを結わえ、そしておなじ色柄のリボンをケースから引きぬく。ルーシェが普段結わっているリボンはルーのリボンとおそろいだ。

「今日もいい子でお留守番していてね？」と頭を撫でると、ルーはわかっているのかいないの

か、ご機嫌で尻尾を振りつづけていた。

「お……はようございます……」

ドレスに着替えて身なりを整えたルーシェだったが、廊下で出くわしたスメラギにいつにもまして鋭い目線を向けられ、第一声から怯んでしまった。もちろんスメラギが動じる様子はない。

「あの、昨日はお話の途中で……」

「いや、そのことはもういい」

「そ、そういうわけには」

「あとであいつに殴られた。それでこの件はちゃらにしろ」

そう言うがシリスが手加減したとは思えない。どう考えてもスメラギの方が割を食っている。

「すみません……」

「もういいと言っている。今日も堂々としていろよ」

「はい！」

ふたりが向かった先は王宮に併設する神殿だ。王宮とは目と鼻の先、門を抜けると神殿の入り口までさほど距離はないので、めいっぱい見上げなければ正面の二つの尖塔は見えない。尖塔は全部で五本、五芒星のように配置されたそれぞれの尖塔の上には竜の彫像がある。

昨晩も神託が行われていたはずだが、神殿はすでにいつもの静けさに包まれていた。

先に来ていたアシュアは神殿に入ってすぐの天井のモザイクに見入っていたが、ルーシェを見つけるなり駆け寄ってきた。スメラギの瞳が鋭さを帯びるが今日のアシュアは剣を帯びておらず、間合いに踏み入る前に足を止めた。

「シエラ殿下、おはようございます！」

なんの恥じらいも後ろめたさもない素直な笑顔だ。ルーシェもつられて顔がほころぶ。

「おはようございます、アシュア殿下。昨日もよくお休みになれましたか」

「はい。でもすごくわくわくして、いつもより早く目覚めてしまいました。今日もシエラ殿下とお話しできてうれしいです」

姉のように慕ってくれるアシュアにほっとする。ナシルは扉の側で控えていたが近づくつもりはないらしい。

神殿に立ち入りが許される者は限られる。聖竜の主である竜公は入れるが、アシュアがナシルを置いてゆく以上はこちらも護衛に付けるわけにはいかない。ルーシェはスメラギに「ご苦労でした」と告げて下がらせようとしたところ、アシュアが言葉を挟んだ。

「あの、また離れられては黒竜公閣下が心配なさるのでは？」

「え？」

「閣下はシエラ殿下のことを大変気にかけておいでのようですので」

連れていってもかまわないと言っている。ですが、とルーシェが戸惑っていると、スメラギが一歩あゆみ出た。

なにを言うかと身構える前でスメラギは腕を胸元に当てると、わずかに目を伏せた。

「王女殿下は奥宮暮らしが長く、蒲柳の質であらせられますので私も心配が過ぎるのやもしれません」

(!?)

「そのことで殿下が御不快になられたならばお許しください」

目を剝くルーシェの前で、スメラギは片膝をついて謝罪の礼を取った。自分の気遣いが引き起こした事態に、アシュアはあわてて「黒竜公閣下、お立ちください」とスメラギの腕を取る。

「ご寛大な御心に感謝します」

アシュアに向かってかすかに浮かべた微笑に、ルーシェの息が止まった。

(な……っ、なにやってるんですか隊長……!?)

スメラギはシリスのように腹芸が達者ではないと思っていたのでこの所業には驚いた。無駄に長年シリスのふるまいを見てきたわけではないということだ。

アシュアとの話し合いで居残るほうに落ちついた模様で、ルーシェは騎士団にいるときよりも数段洗練された動きのスメラギに見送られて神殿の奥へと足を進めた。

「殿下、お気をつけてまいられませ」

聞いたこともないような紳士的な声音、そしてそれが自分に向けられたものだと思うとこそばゆさに頬がふるえ、動揺を押し隠すのに必死だった。

（蒲柳ってなに!?　たしかおなじ口で図太いとか言ってなかった!?）

先ほどの言葉は場を収めるためのただの口実、わかっているがその衝撃はあまりに大きい。

（けれど、隊長はそういう王女がいいの……？）

きっとスメラギが語ったのは理想の王女だ。王女として敬う相手はそういう儚げな人であってほしいのだろう。

スメラギの瞳が捉えているのは自分ではない——そう思い知ると気分が沈んだ。

ルーシェは重い気持ちのまま司祭についてゆく。やや暗い祈りの小部屋を抜けて広間に入るなり、アシュアが「あっ……」と言ったきり声をなくした。

神殿入り口の薄暗く重々しい雰囲気とは対照的に、広間の天井は高く、両脇の色ガラスから光がふんだんに注ぎこむ。石壁は乳白色だが、色ガラス越しに射しこむ光が不思議な色合いを醸し出していた。

ガラスに描かれているのは聖女が五頭の聖竜と出会い、誓約を享けるまでの物語だ。

神殿の概要について司祭が話し、ルーシェが創国の物語を説明する。そしてゆっくりと歩みを進めた先には、五つの白亜の台座に五色の竜の彫刻が並んでいた。

「聖女は五頭の竜の誓約を享け、四頭を信頼できる四人の部下に預けました。その四家は今も

侯爵家として存続しています」

「あ、だから竜公は侯爵なんですね」

貴族の頂点に立つ公爵は聖女の末裔、次位の侯爵は聖女から聖竜を預かった者の末裔だ。そして現在の聖竜の主である竜公はその慣習に従い、一代限りの侯爵待遇となる。

「ここに竜はいないんですか？」

「いる日もありますが、今日はいないようですね」

ルーシェのその返答に司祭はうなずいた。昨晩竜を授かった子はいなかったようだ。

一年に授かる竜は百頭足らず、つまり月に十頭ばかりなので神殿に竜がいる日のほうがすくない。しかし年に竜を何頭授かるかが知れれば、逆算して現在の竜騎士団の規模が推測できる。軍事力は重要な機密情報、おいそれと口にできるものではない。

奥の扉から外に出ると山の上手には聖職者が詰める建物、下手には神託を受ける祈りの部屋がある。ひととおり回ったあと、ふたりは中庭で休息を取ることにした。

中庭は庭木の手入れが行き届き、竜をモチーフにした彫像が点在している。

「ここは薔薇が咲いていないんですね」

「心静かに祈りを捧げる場所ですから。季節の移り変わりを告げるようなものはないのだと聞いていますわ」

見渡せば、白亜の彫像のほかは光をふんだんに浴びたあざやかな緑一色——

（……え？）

緑一色のはずの視界の中で、一瞬別の色が映った気がしてルーシェは目を見開いた。だが凝視してもなにもない。

（見まちがいかしら？）

瞬きをくり返しているうちに、王族にしか供されない金の紋章入りのティーカップが並べられた。神殿は王族や貴族の結婚式に用いられるので、茶器もひととおり揃っている。

しばし歓談していたふたりだったが、アシュアが声を上げた。

「あっ、竜だ！」

え？　と見やるルーシェに「あの像の陰に！」とアシュアが指し示す。

中庭の向こう、芝生の上にゆったり寝そべる竜の像の陰から、たしかに赤い色がちらちらと覗いていた。

そうしてこちらを窺うようにおずおずと顔を出したのは。

（ルー!?）

椅子からひょいと飛び降りたアシュアに、「あぶないですよ！」とルーシェは立ち上がる。

「え、でもあんなにちっちゃい子ですし」

アシュアは好奇心に導かれるままにルーに歩み寄ってゆく。ルーも見つけてもらってほっとしたのか、像の陰から姿を現した。

（出てきちゃダメだってば！　逃げて!!）

しかしルーはなんのことかわからず首を傾げるばかりだ。

あっちに行って！　と手で示すと、ルーも真似をして右前脚を動かしたが、短い前脚で手招きしているようにしか見えない。

（あああああ！　だからそうじゃないんだってば……！）

ルーシェに気を取られて前脚を動かしていたルーは、いとも簡単にアシュアに捕まった。ほかの竜なら触ろうとした瞬間に引っ掻くか噛みつくかしているだろうに、ルーは普段抱かれ慣れているせいかおとなしくしている。

アシュアはルーを連れもどってくると、テーブルの上に置いた。ルーシェがいるせいでルーは安心しきって左右に揺れて愛嬌をふりまいている。

「かわいいなぁ。まだ子どもですよね。お母さん竜とはぐれたんでしょうか」

こう見えても皇子より年上ですとは言えず、かといって竜が顕現するからくりを話すわけにもいかず、ルーシェは曖昧に笑って流した。

そんなルーシェの気も知らず、ルーは嬉しそうに首を向けて撫でられている。

「おとなの鱗はかちこちに堅かったですけど、子どものときはやわらかいんですね。あ、この竜、王女とおそろいのリボンしてますよ」

「そっ、そうですね!?」

偶然というには合いすぎた符号だが、アシュアはルーをかまうのが楽しくて仕方ないらしく、それ以上の追及はなかった。ルーは相手をしてもらったのがよっぽど嬉しいのか、テーブルの上で転げ回りそうな勢いだ。

ルーシェは「アシュア殿下、そろそろ行かなくては……」と切り出すと、

「そうですね。この子は連れて行ってあげなくてもいいんですか？」

「ええ、勝手に山に戻るので大丈夫だと思いますわ」

なら、とアシュアも立ち上がり、ルーシェと共に神殿に戻りかけたが、しばらくして足を止めてふり返った。

「あの、ついてきてるみたいですよ？」

「え!?」

ふり返るとたしかにルーがいる。ルーシェの様子から近づいてはいけないことは察したようだが、距離を置けばいいと思っているのか、ためしに二、三歩足を進めてふり向くと、きっちり進んだ分だけルーもこちらに近づいてきていた。

「……もしかしたら迷子になったのかもしれませんわね」

「あんなにちっちゃい子なのに大変ですね」

「仕方ありません、私が返しておきますね」

そう言って近づいて抱き上げると、ルーは嬉しそうに左肩に乗ってきた。

ルーを連れて神殿の入り口まで戻ると、ナシルと一緒にいたスメラギはルーシェの肩にいる存在に目を見張った。

「ではシエラ殿下、また後ほど」

アシュアはそう告げてナシルと共に神殿を後にする。

ナシルに異状を悟らせないように堪えていたスメラギだったが、姿が見えなくなるなり怒声を落とした。

「なぜこいつがここにいる!?」

それはこっちが訊きたい。だがかまってもらってまだご機嫌なのか、当のルーは涼しい顔だ。

「部屋に閉じ込めておいたんですけど、抜け出しちゃったみたいで……」

「抜け出しちゃったじゃない！　どうして鎖でつないでおかなかった!?」

(鎖!?)

「そんな鎖だなんて、かわいそうじゃないですか！」

「は!?」

「ルーは猛獣じゃないんですから！」

「小さくても赤竜だぞ!?　火を吐くんだぞ!?　山に棲む猛獣よりよっぽど危険だろうが!!」

たしかに赤竜は火を吐くが、いまのルーはなにかの拍子に炎がぼっと出る程度、蠟燭を灯すほどの力しかない。

「ルーはそんなことしません！　それに隊長が言ったんじゃないですか！　竜を翔ばしているかって。つなぐなんてかわいそうです！」
「場所をわきまえろ！　また迷子になったらどうする!?　王宮を前みたく探し回るわけにはいかないんだからな!?」
前回の聖殿立ち入りの一件を引き合いに出されてルーシェは怯んだ。
ルーシェ自身も始末書を書いたし、捜索に来たスメラギにも書かせてしまった。スメラギは書き慣れているとシリスも言っていたが、だからといってそう頻繁に出していいものではない。
ルーシェが反論できなくなって、ルーも状況が思わしくないこととその原因が自分にあることを察したらしい。きゅぅ、と首を縮こめる。
へこんだルーを「ルーは悪くないからね」と撫でていると、スメラギは苛立たしげに吐き出した。
「おまえがそう甘やかすから――――いや、いい」
（……え？）
「次の仕事は今晩の晩餐会だな。俺はいったん隊に戻るがおまえはそれの相手をしていろ」
そう言い残してスメラギが立ち去るのを、ルーシェはただ見送ることしかできなかった。
（隊長……どこか引いた？）
いつものスメラギなら言うべきことは言い切って、あのような形で引くことはない。けれど

もさっきのスメラギは言い切る前に話を切り上げた。
（昨日、わたしが逃げ出したから？）
言ったところでわからない、聞き入れないと思われたのだろうか。
（もしかして隊長に見切られた……？）
呆然とたたずむルーシェをルーが「くぅ？」と覗きこんでくる。
「でもルーだって嫌だよね、鎖だなんて……」
竜は天空神の遣い、その竜を地上につなぎ止めておくことには罪悪感がある。
（それでも隊長の言うとおりにしないといけないの？）
話して伝わらないのは辛い。けれどもこんな形で話すことすら放棄されるのはもっと辛い。
騎士団にいるときは、自分でも気づかなかった変調にまで気づいてくれたのに。
おなじようにすぐ側にいるはずなのに、心が――遠い。
「ずいぶん賑やかだったみたいだけれど、どうしたの？」
「母様！」
はっと顔を上げると、女官を引き連れた女王が王宮からやってくるところだった。
政務の合間を抜けてきたらしい母は今日も白のドレスをまとい、控えめな化粧をした面と首筋はきめ細やかで、まったく年を感じさせない。
時間があるならお茶でもどう？　そう誘われて、ルーシェはルーを抱いたまま王宮の中庭へ

と向かい、うなだれながら席に着いた。
「なにかあったの？」
「あのね、ルーが勝手に部屋を出てきちゃって、隊長はルーを鎖でつないでおけって……」
母の竜もシリスの竜もつながれている姿など見たことがない。
しかし母は「学舎では翔びはじめの子はそうしているみたいね」と頷いた。
「……そうなの？」
「ええ。この子はちゃんと最初から翔べたけれど、すべての竜が翔ぶのが上手とは限らないでしょう。落ちたりぶつかったりしたら事故にもなりかねないから」
（あ、だからカイトもそう言っていたの……？）
「でも今までつないだことなんてなかったのに、いきなりつないだら嫌いにならない？」
ルーが人に対して無防備なのは、自分も侍女も今まで嫌がるようなことをしなかったからだ。
しかしその信頼を壊すようなことをすれば、言葉が通じないだけに修復は難しい。
「時によってはそういうこともあるみたいね。でも竜はその気になればいくらでも鎖から抜けられるのだし、堪えてくれるかは信頼次第じゃないかしら？」
（信頼……）
その言葉は、ルーシェの心に深々と突き刺さった。
ルーは自分を信頼してくれていると思う。最初は嫌がるかもしれないが、そのうちわかって

くれるような気がする。しかし。

（隊長とは、信頼を築けてる……？）

思い出すのは、先ほど不意に打ち切られた会話――逸らされた瞳だ。

竜とちがって人には言葉があるのに会話が成り立たない。ルーとなら目で見つめあって通じるものがあるのに、顔を合わせてももらえない。――そうしてしまったのは自分自身だ。

「心配しなくてもこの子のことだもの、きっとわかってくれるわ」

ふさぎこんだルーシェを気遣ってか、女王はルーシェの胸の中のルーの頭をなでる。

ルーははたはたと尻尾を振って嬉しそうにしていたが、ルーシェは「うん、そうね……」と沈んだ声で返すことしかできなかった。

❦

――あいつを見てやってくれ。

王宮に報告書を届けにきたカイトは、ちょうど騎士団に戻る途中だったらしいスメラギとばったり出くわした。そのまま報告しがてら戻ろうとしたカイトにかけられたのがその言葉だ。

伏し目がちにそれだけ告げてすれ違ったスメラギは、あきらかに様子がおかしかった。

（またなにかあったのか？）

昨日スメラギがルーシェに手を上げたことは、スメラギ本人から聞いている。その件でまだぎくしゃくしているのだろうか。

いくらシリスの遠縁とはいえ王宮で他に行く場所もなし、用事がなければ部屋に戻っているだろう。ルーシェに与えられた部屋の位置はスメラギから聞いている。

（また不安定になってるのかあいつ……）

基本的に騎士団にいるのは学舎を出た者ばかりだ。任務内容はもちろん、任務にあたっての心得や覚悟などもきっちり学んでいる。しかしルーシェはちがう。学舎出身の者とは異なる価値観で動き、学舎上がりの者が当然持っているはずの基礎がない。そもそもの土台がちがうのだから、他の部下とおなじように扱えないのも無理もない。

カイトは、しかたないなとため息をついて裏道のアーチを通っていると、その途中に聞き知った声が耳に届いた。

「……嫌いにならない？」

ルーシェの声だ。この垣根の裏にいるのかと茂みに顔を寄せてみると、生い茂った葉の合間から見えたのはたしかにルーシェの姿だった。

今日もいい感じに王女に化けて、胸に竜を抱きながら語らっている。見た目は立派な貴族令嬢、自分も中身を知らなければ王女だと信じただろう。

誰と話しているのかと見る角度を変えてみると、ルーシェの横にいたのは落ちついた印象の

淑女だった。

（あいつ、姉がいたのか？）

顔立ちといい髪や目の色といい、今のルーシェにそっくりだ。あと数年、ルーシェに落ち着きが出ればあのようになるにちがいない。

（けれどあんなしとやかな姉がいるならあいつが身代わりをやらなくても……）

そこまで考えて、カイトの思考がぱたりと止まった。

――ルーシェの姉と思しきあの女性、どこかで見たことがなかったか。

騎士団とはまったく無縁の、生家の付き合いの方で。

ルーシェのやわらかな色合いのドレスに対して姉のほうは純白、白の似合う気高さがある。

（王宮で白のドレスといえば……）

まさか、と思い女性の頭上を凝視すると、あざやかな銀色の髪にあったのは、おなじく銀色のまごうことなき冠だった。

（――――勘弁してくれ）

カイトはくらりと眩暈を覚えた。――なぜルーシェの隣に女王がいる？

実年齢よりかなり若く見える女王は、微笑みながらルーを撫でている。ルーも慣れたように、目を細めて首を向けていた。

（なんであんなになついているんだ、あのぱたぱた……）

あの竜は主に似たのか警戒心が薄いので、初対面でもなつくかもしれない。
しかし疑念をふり払えず、ルーシェの出自について記憶を整理する。
リヴェア家の娘でシリスの遠縁。女王とシリスの父が兄妹なのでシリスは王族だが、リヴェア家はシリスの母方の縁戚なので王家と血縁はないはずだ。もちろん別の経路から王族の血が入っているだろうが、似るほどのつながりではない。
（娘の身代わりを務める労をねぎらっているのか？）
目を離せずにいるカイトの前で、女王はルーシェの髪飾りの位置を直していた。その様子はあまりに親しげで、あれでは身代わりとなった貴族の娘を可愛がるというよりむしろ――
（自分の娘に接するような――）
そのときよぎった想像に、カイトの全身が総毛立った。
（そんな！　まさか！）
必死に打ち消そうとするが、目の前の現実がその想像に拍車をかける。
いつもはウサギ髪にばかり目を取られていたが、髪を下ろしただけでずいぶん印象がちがう。髪の色がちがって混じり気のない銀色のせいかもしれないが。
（染めているのはいったいどっちのときなんだ……？）
想像を素直に受け入れたほうが納得のいくことが多い。
しかし――あいつが王女、だなんて。

（ありえないだろ――――!?）

驚きか衝撃か、このなんとも言い表せない焦りと恐怖に似た感情はいったいどこに持っていけばいいのだろう。

（とりあえず隊長に報告か!?）

と、砦にむかって足を踏み出しかけたカイトだったが、首筋をがすっとつかまれた。

「うわ……っ！」

「盗み見はよくないなぁ」

「――――だ、団長!?」

首を絞められながらもふり返り気味に見上げれば、そこにあったのは実ににこやかな顔だ。

シリスはその顔を崩すことなくカイトは引きずられるままに薔薇のアーチを抜け、ルーシェたちがいたのとは逆の中庭に連れて行かれる。

そしてシリスはカイトを木の幹に押しつけると、逃げられないように片手で退路を塞いだ。

そんなことをされずとも、にこやかさを失わないシリスの瞳から逃げられようはずもない。

団長の笑顔は隊長の雷より恐ろしい――このときカイトは、その噂を正しく理解した。

「あの、なにかご用でしょう、か……？」

「うん、そう」

シリスは軽く答え、拳ひとつ高い位置からカイトを覗きこむように視線を落とした。



「言うまでもないけれどひとつ忠告しておこうと思って。王宮内で見聞きしたことは一級機密事項だからね？」

一級機密事項。口外すればその瞬間に裁判なしで殺すことも認められる罪で、大逆や密猟と同等の扱いだ。要するにシリスは、しゃべったら殺すよ？　と満面の笑みで言っているのだ。

シリスの表情も声音も穏やかだが、背中に黒いなにかがちらちらと覗いている。きっと悪魔という名の羽と尻尾にちがいない。前々から感じていたが、シリスの笑顔は増せば増すほど怖い。輝きとともに零下のなにかを放っている。

「しかし私はなにも……」

「嘘をつくのもよくないなぁ。麗しき美女ふたりのお茶会を見たでしょ？」

やっぱり口止めされているのはあれかと判断する。ということはやはり――

「彼女は大切な従妹だからね。あまり余計な噂を立てられたくないんだよね」

その一言にカイトは戦慄した。

ルーシェは遠縁だとは聞いていたが、今の言でひとつ確定したことがある。

王族シリスの従妹といえば、思い当たることはただひとつ。

（まさか……本当に……？）

「君は将来有望だって聞いているけど、波風立てるようなことがあったら許さないよ？」

春の女神もかくやという笑顔を前に、カイトの脳内をブリザードが吹き抜けた。

「さっきね、ちっちゃな竜に会ったんだ」
部屋に休憩に戻ったアシュアは、これくらいの、と抱きしめる恰好をした。猫くらいの大きさだ。竜でその大きさなら、授かった直後といったところだろうか。
ナシルは今朝誓約したばかりの竜がいたのかと思ったが、アシュアの感想はちがっていた。
「母竜とはぐれちゃったみたいだね。殿下が探してくださるみたいだけれど」
「おや、王女にお聞きにならなかったのですか？　竜に母はいないのですよ」
「え？　いないの？　じゃあどうやって生まれるの？　……生まれてすぐに引き離されちゃうの？」
後宮生まれのアシュアには母はいて当然のもの、そして時には一緒にいられないものだった。おなじ後宮に住みながら、母と会える機会を制限される自分と重なったのだろう。アシュアの瞳に不安げな光が宿る。
「いいえ。神託を受け、竜が主と認めた相手の下に幼竜が現れるのだと聞いております」
「じゃああの子は母竜じゃなくて主とはぐれちゃったんだね。僕もほしいなぁ……」
最後にこぼれ落ちた呟きはあまりに純粋な子どものものだった。帝国がどれほど竜に痛手を

被ったか、またどれほど真摯に竜を欲しているか、幼いアシュアは知らない。

（――ひとつ、揺さぶってみるか）

ナシルはアシュアの傍らに跪く。そして竜を求めるアシュアの両手にちょうど収まる程度のクッションを差しだしながら、あたかも他愛ない話であるかのように告げた。

「王女は今日の晩餐会においでです。そのとき、竜の主は見つかったかどうかお訊きになってみてはいかがでしょう？」

第5章　晩餐会

シャンデリアに灯された光。それはテーブルクロスの上に並んだ銀食器や添えられた水晶の像によって輝きを増し、白磁の金縁の皿をあざやかに照らし出す。濃い紅色の絨毯に対して壁は白、そこにもふんだんに銀装飾が用いられ、輝きを増すのに一役買っている。

ここは王宮の正餐の間、だが今晩の晩餐が公式に正餐と記されることはない。いまここに女王の席がないのがその証だ。

帝国側の席についているのはアシュアとナシル、そして秘書などの責任者が四名。ローレンシア側は侯爵家当主が代理を含めて四人、そしてスメラギだ。

濃紺のイブニングドレスに着替え、公爵の代理出席であるシリスに手を引かれて現れたルーシェは、末席の傍らで立礼するスメラギの姿に目を留めた。

（隊服姿じゃない隊長ってはじめてかも……）

スメラギも貴族としての正装に着替えていた。上着の色はやはり黒だが、いつもより抑えめの黒髪とあいまって白のシャツとのコントラストが美しい。それに隊服を着ているときは周囲に逞しい男たちが多いせいか細身に感じたが、こうして貴族に混じっていると、隙のない立ち姿もあってやはり鍛えられた軍属の人間という印象がある。

シリスに導かれてルーシェは席に立つと、「このたびのご訪問が両国親交の第一歩となりますよう」と挨拶を締めて、発泡した白ブドウ酒で乾杯を行った。

年配の侯爵たちはこのような場は慣れたもので、帝国相手に複雑な想いもあるだろうが、おくびにも出さずに気安く話しはじめた。場の空気がなごみ、食卓に六名ずつ並ぶとさすがに話題はひとつに収まらず、おおよそ三箇所に分かれて会話ができあがった。

テーブルに並んだ食事の話にはじまり、帝国の慣習や祭や時節に応じて饗されるものなど、他愛ないことながらも会話は弾んだ。流れが変わりはじめたのは、ローレンシアに来てからの出来事をアシュアが語っていたそのときだ。

「今朝は、神殿で小さな赤竜を見かけたんです」

一瞬肉を切っていたルーシェの手が止まったが、何事もないように切りきった。代わりに答えたのは侯爵のひとりだ。

「授かったばかりの幼竜でしょうな」

「竜に母親はいないと聞きましたが」

「ええ。竜は天に授けられしもの、竜の誓約を受けるにふさわしい者に天から遣わされます。昨日の神託で授かった子どもがいるのでしょう」

「え、子ども？」

聞いておられませんでしたか？　と、侯爵は孫にも似た年頃のアシュアに言った。

「竜の主となるのは六歳の子どもと決まっております」
「あ、僕もいま六歳です」
反射的に答えただけの一言。しかしたしかにそのとき場の空気が変わった。
アシュアはすぐさまそれを察し、他意はなかったと言うつもりだったのだろう。しかし訂正の隙を与えず、その言は傍らにいたナシルに拾われた。
「私の聞き知るところによると、ローレンシアの子どもは七歳の誕生日を迎えるときに神託を受けられるとか。ちょうど殿下もこの訪問中に七歳の誕生日を迎えられます」
そのときシリスは笑顔を絶やさずスメラギはあいからわず仏頂面だったが、ローレンシア側が見せた動揺にナシルが気づいていないはずがない。手に入れたたしかな感触とともに、ナシルは提言した。
「いかがでしょう？　皇子に神託を受けさせていただけないでしょうか」
（やられた……！）
帝国は神託のことを知っていたのだろうか。ローレンシアでは誰しもが知ること、帝国の商人と交易が成り立っている以上、そのような情報は筒抜けだろう。
（だからあえて六歳のアシュア皇子を送り込んできたの……？）
たしかに皇子はこの訪問中に誕生日を迎える。その晩にはささやかなパーティーも用意してある。だが当初はシエラの誕生日にあわせて訪問を申し込んでいたのだから、あらかじめ立て

ていた策ではない。

しかしナシルの口から出されてしまった以上、ローレンシア側も返答しなければいけない。明確な理由なく断れば今後の両国の関係の障りになる。

（――いまシリスはなにを考えているの？）

不意にシリスの顔が見たくなった。ローレンシア側でいま一番権力を持っているのはシリスで、見たところでおそらく顔色ひとつ変えていないだろうが、見ればわかることもある。

しかし今ナシルに向いている視線を外せば、シリスに意見を求めたことに気づかれる。この晩餐会の主催者は王女である自分だ。そんな姿を見せるわけにはいかない。

（なんとか切り抜けないと）

ルーシェはゆっくりとナイフとフォークを下ろし、口を開いた。

「せっかくのお申し出ですが、竜は天空神の御遣い、天の加護はローレンシアに与えられしものです。いくら親しき隣国の方といえども認めるわけにはまいりません」

「天に国境がございましょうか？　ローレンシアに実りをもたらす雨雲はなんら遮られることなく帝国へと参ります。それは竜とておなじこと」

一瞬、その場の空気が揺れた。

ナシルが言っているのは十年あまり前のローレンシア侵攻、そのとき決行された夜襲のことだ。その戦でローレンシアがなにを喪ったか知らぬではないだろうに、ナシルはその一件をあ

えて持ちだしてきた。
「雲も竜も等しく帝国にあることができるのです。なにをもって国の境を定められます。天意はあまねく広がっており、それを切り分けているのが人の意識なのではないでしょうか。現にかつての数多の国境は今はなく、アズィールの名の下に一つの国になりつつあります」
「！」
それは数多の国を呑みこんできたアズィール帝国の使者ならではの言だった。受け入れなければこのまま攻め込むとも受け取れる内容だ。
（ううん、そう受け取ってもかまわないということね）
「ローレンシアとの国境もいずれなくなるとおっしゃいますの？」
「いいえ、それを望まぬがゆえこうして席を設けていただいたのです。ですが孤高であることは孤独をも意味します。ローレンシアを取り巻いていた国は帝国の名の下に一つなることを選びました。ローレンシア一国のみ、古き因習と共に生きてゆかれることをはたして天空神はお望みでしょうか？」
人が天意を告げるか。そう叱責しようとしたがナシルは先に言葉を継いだ。
「天空神はすでにその答えを告げておいでですよ。その証にローレンシアの生まれでなくとも竜を授かった方がおられる」
（……え？）

ルーシェの出方を探るようにナシルが目を細める。これ以上告げてもいいのですかと瞳が問うている。

「帝国を出られてもう十年あまりになりますか」

ルーシェは息を呑んだ。

（この人、まさか隊長の出自を知っているの……？）

スメラギが帝国出身だということをルーシェは誰にも明かしていない。スメラギが言ったとも思えない。竜を授かるのは七歳のとき、今の年齢から逆算するだけでスメラギが十一年前にすでにローレンシアにいたことはあきらかで、これはただのはったりだ。

そう思うがスメラギ自身の物心がつく前になんらかの証拠を帝国に残していたなら。そしてローレンシア側がアシュアとナシルの出自を前もって調べていたのとおなじように、相手もまたこちらの情報を調べてきたとしたら――この時期の訪問で狙っていたのは王女のお披露目ではなく。

（隊長が黒竜公に叙されたから揺さぶりをかけにきたってこと……？）

ナシルの言に、なんのことかと侯爵たちがざわめきはじめる。

答えないルーシェにナシルはさらに言葉を継いだ。

「帝国で生を受け、幼少時を帝国で過ごされた方を天空神はお認めになり、聖なる竜を遣わされた。それは天空神の恩寵がレーヌ河に妨げられるものではないという証では？」

聖なる竜――その一言でみなが気づいてしまった。ナシルが言わんとする相手がスメラギであるということを。

証拠はないと突っぱねることもできる。けれどこの問題を引きずれば必ずスメラギの足を掬う者が現れる。そしてスメラギが帝国で育ったのは嘘ではない。証拠があるのかと帝国を追及して不利になるのはスメラギのほうだ。

ローレンシア側に広がる不穏な空気。これ以上引っ張ってはスメラギの立場が悪くなる。密猟に関わっていた、そのたったひとつの過去がそれから十年あまりのスメラギの努力と想いを否定する。

（――そんなのダメ）

その想いに神経が研ぎ澄まされ、千々に乱れた心がすっと一本の線にまとまる。

（――私なら、救える）

「わかり、ました」

言葉を発した瞬間、たしかに場がざわりと音を立てた。

ふっかけてきたナシルですら驚いて、その碧色の目を見開いている。

スメラギの望むことではない。そうわかっているけれど、でも。

（私は、隊長を守りたい）

ルーシェ――シエラは、自分に向けられる視線のすべてを押し返すように、凛と告げた。

「殿下が神託の儀を受けられますよう、私が聖王庁に掛けあいましょう」

「馬鹿かおまえは……!!」

食事を終えて控えの間に下がり、雷が落ちるのは覚悟の上だったが予想以上の大怒声にルーシェは首を縮こまらせた。

「なにをやってるんだ！　あんなはったり、いくらでも言い逃れできただろうが！　百歩譲ってもだ！　案件を持ち帰ると言えたはずなのにそれをおまえは!!」

スメラギの言うとおり次善策に徹するべきだったとわかっている。しかしルーシェはいつものように、すみませんとは言えなかった。

（だってそんなことをしたら隊長が）

話の主導権を握っていたのはナシルだ。たとえナシルが実は切り札を持っていなかったとしても、帝国とのつながりを仄めかされただけでスメラギへの疑念は湧く。追い詰められてからでは遅い。

（だからこのことだけは謝れない）

反論しようとルーシェが毅然と顔を上げると、それを察したシリスが割って入った。

「まぁ落ちつきなって。あの場で持ち帰って、接待役の王女が実はなんの裁量もないお飾りでしたーなんて思わせるわけにはいかないしね。王女の立場を守るためにはあれもありだ」
「勝手に安請け合いして聖王庁が認めなかったらどうするんだ!?　そのときの殿下のお立場のほうが問題だろうが!?」
「認めるよ。彼女に接待役を任せたときからある程度のことは織り込んである」
「……ならいいが」
苛立たしげに息をつくと、ふたりは今後の対応について話しはじめた。
スメラギはこっちを見向きもしない。話に加わることすら許されない。
（――本当に怒ってる）
スメラギが叱った内容は王女の立場を慮ったものだったが、聖王庁に認められなかったときのルーシェの立場も考えてもいたにちがいない。神託を決めたこと自体は謝れないが、心配をかけたことはまた別だ。
「……ごめんなさい」
あまりに小さな声だったがスメラギは聞き逃さず、「謝るな」とすかさず返した。
「そうそう。判断を下すのが王女の仕事、その後の対策を考えるのは俺たちの仕事だ。あとは下に任せて自分の判断の結果を受け入れるのが上に立つ者の務めだよ」
シリスはスメラギに気づかせることなく、王女としてすべきことを諭す。

そして「ちょっと聖王庁に掛けあってくるから」とスメラギと連れだって部屋を後にした。
控えの間にひとり取り残されたルーシェは、多くの視線にさらされていた先ほどまでの熱がすっと冷めてゆくとともに、自分自身を取りもどしてゆくような気がした。
（……わたし、なにをしたの）
動きだしてしまった現実を思うと、恐れが襲ってくる。
（皇子が神託を受けて、竜を授かる確率はどれくらい……？）
毎日何十人、何百人という子どもが神託を受けても、竜が顕現するのは数日に一度だ。しかし確率の問題ではない。主にふさわしい者がいれば一日に数頭でも現れる。
あの皇子は竜に選ばれるだろうか。あの真っ直ぐな心根のまま成長すれば、きっとよい竜騎士になるだろう。だがアシュアは他国民、しかも帝国の皇子だ。その彼が授かってしまったなら、ローレンシアの民はなにを思うだろう。
（けれど、どうしても）
あのとき、ナシルにあの一言を出させてはいけないと思った。
――密猟者。
帝国にとっても触れたくない傷のはず。しかしローレンシア侵攻すら口に出したナシルのこと、その切り札を持っているなら絶対に出してくる。三人しかいない竜公のひとりを失脚させ、ローレンシアに動揺を与えられるなら安いものだろう。

スメラギを守るために取った行動を後悔はしていない。けれど。
これから起きる嵐の予感に、ルーシェは冷えた身体を抱きしめた。

聖王庁に掛けあう、そう言ったシリスが入ったのは適当な小部屋だった。
自分がしでかしたことの対処を目の前で論じるのは酷だ。ルーシェから離れる口実だったことは承知の上だ。
「なんであいつは突っ走るんだ……！」
「ほらほら、そんなにかっかするんじゃないの。それにあんまりいじめるんじゃないよ。かわいそうにへこんでたじゃないか」
「かわいそうとか言っていられる場合か!?　突っ走って怪我をするのはあいつなんだぞ!?　無理せず持ち帰ればなんの咎めもなかったはずだ！　それをあいつは……！」
「まぁここは騎士団じゃないからね。彼女も頑張りたいところなんだよ」
「……どういうことだ」
「騎士団ではまったくの素人で、叱られながら働いていればそれでいい。けどここは王宮だ。昨日今日竜公になったばかりの君よりよほど王宮のことを知っている。ここは自分の家の庭の

ようなものだからね」

「そう……なのか？」

「彼女が自分で言ったんだろ、名家のお嬢様だって。俺の身内なんだから当然だよ。彼女には彼女なりの勘も矜持も覚悟もある。だから騎士団にいるときみたいにおまえに素直に従わない」

騎士としては半人前でも、貴族の娘としては筋金入りだ。騎士に騎士の覚悟があるように、彼女にも貴族の子女として植えつけられた覚悟がある。騎士としての――自分の部下としてではないルーシェ自身の矜持があるなら、ただ安全に任を果たせばいいというだけの自分の命に従えないのも無理はない。

（だが、それなら――）

「君は、なんで彼女があそこで折れたかわかってるから苛立ってるんじゃないの」

心を見通したかのように図星を指され、スメラギは苦々しげに吐き出した。

「……奴が、俺の過去を突いてきたからだ」

「そう、よくわかってるじゃないか」

ナシルが本当に自分の過去を知っていたのかどうかはわからない。しかし帝国で育ったことは事実で、追及すればなにかしらの証拠を出してきたのかもしれない。いや、出さなくともいいのだ。疑惑の種を蒔いて時を稼ぎさえすれば、答えが出なければ出ないほどローレンシアは

疑心暗鬼に陥る。

心の割れた国を攻めるのは容易い。味方についたローレンシア人に戦わせればいいのだから帝国は舌一枚で足りる。そうやって踊らされて滅んだ国もすくなくない。

（――なにが両国の友好のためだ）

これは立派な戦だ。

帝国はローレンシアという国への刺客を送りこんできた。そしてその急所となったのは自分。自分が純粋なローレンシア人でないことはこの風体を見ればわかることだ。そして自分が狙われたことをルーシェも気づいていた。

（国を守る矜持があるなら）

国のためになにかを切り捨てる覚悟も持っていてしかるべきだ。貴族の娘としての自身を貫くなら、従騎士としてのしがらみなど忘れればいいものを。

自分のことならなんとでも対処する。庇われた――その事実が心をえぐる。

「……そんなに信用ならない上司か、俺は」

「逆なんじゃないの。君が必要だから傷つけられたくなかったんだろ」

「人の心配をしている場合か。自分が一番危険な場所で身を張っているくせに」

大きな権力を与えられれば取らされる責任も重くなる。王女の身代わりの任は騎士団の従者として自分が庇える範囲を超えているから、過剰に叱って制止をかけていたというのに。

「部下を信用してないのは君のほうなんじゃない？」
「……なに？」
「言っただろ。ルーシェは話せばちゃんとわかる子だって。たしかに考えは足りないけど彼女なりの信念で動いてる。それを信じてあげるのも大切なんじゃないかな」
（信じる……？）
「ただしちゃんと手綱は握っておかないとね」
そう言ってぽんと肩に手を置いて、「後は任せたよ」とシリスは今度こそ聖王庁へ向かうために部屋を後にした。

私室に下がるなりアシュアはふり返り、真正面からナシルを凝視した。
「ねぇ、ナシル。どうしてあんなこと言ったの」
金色の王者の瞳――。
ナシルの腰位置あたりから見上げられたにもかかわらず、遥か高みから断罪されているような気がした。
「王女が困っていらっしゃるってわかっていたよね。そしてそれが僕の意に添うものではない

ことも」

アシュアが自分の言を遮らずにいたのは、信頼かなにか形なきものゆえだろう。

それを壊す所業だったことはたしかだ。それを取り戻せるとは思わないし取り戻そうとも思わなかったが、ナシルはその場に膝をついた。

「差し出た真似をいたしました。お怒りならば如何ようにも」

ナシルは腰に佩いていた短剣をアシュアに差し出す。

ローレンシアのものよりもやや湾曲が強く、黒塗りの柄と鞘にさまざまな宝玉装飾の施された短剣。だが差し出されたそれをアシュアは冷ややかに見つめるだけだった。

「……命を差し出してまで詫びなければいけないことだったわけ」

「そこまでの事態なら王女はお断りになっておられたでしょう」

「断れない理由があったよね？」

そう断言してアシュアはナシルに一歩近づいて睥睨し、そしてその場に立たせた。

「ナシルはなにを知っているの」

「――殿下に申し上げるべきことはございません」

アズィール帝国の皇子としての下問に偽りは許されない。だが命の懸かった答えにナシルはそう返した。

不快に思えば斬られる。アシュア付きの者ではまだ聞いたことがないが、皇宮内ではそうし

て手討ちにあう者はめずらしくない。

眼前にいるのは身の丈半分の幼い子ども、しかしその名に負っているものは自分の比ではない。皇子として表に出てきたということは、その年にして責務を負うに値すると皇帝が認めたということだ。おおよそ十代半ばで表に出てくる歴代の皇子とどれほど違うことか。

才智あふれる皇子に仕えることを喜びに思う。それでもそれ以上の願いがある。持って生まれたものを最大限に利用して、辿りつきたい場所がある。

どれほど見つめあっていたか、アシュアはゆっくりと口を開いた。

「ナシルは僕の先生だ。僕にナシルの考えをすべて理解できるとは思えないし、ナシルを従えられるだけの器量があるとも思っていないよ。でもナシルが僕に授けてくれた知識は嘘じゃないって思ってる」

「殿下……？」

「でも言葉は解き放たれた瞬間から自由で、知識もまた檻に閉じ込められるものではない——だからナシルから教えてもらったことだけどナシルのためには使えない」

「それは勿論のことです」

「僕はローレンシアと戦火を交えたくない。その意思に変わりはないから、それだけはあらためて知っておいて」

その意に反すれば次はない。そう言外に告げるアシュアに、ナシルは頭を垂れた。

スメラギが与えられた王宮の一室に戻ると報告書の山がなくなっていた。
一瞬別の部屋に入りこんだかと思ったが、山は壁際に寄せてあった。量が半減しているところを見ると、読み終えた分は返したのだろう。よく気の回る従者だ。
スメラギはすっきり片付いた執務机に手をついて、重い身体を椅子に沈めた。
カイトに関してはなんら心配することはない。問題なのはいまひとり――
（どうして、あいつは……）
そう思ってしまうのはシリスの言うとおり信用していないことになるのだろうか。
この二ヶ月あまり、ルーシェを手許に置いてちゃんと見ていた。どこが貴族令嬢だと幾度となく思ったが、そそっかしいながらも言われたことはちゃんとやる、叱られたことはおなじ過ちを繰り返さないように努める、基本的に命令に背くことはないと思っていた。
しかし王宮に足を踏み入れてから――いや、シリスにこの任を打ち明けられてから勝手がちがう。
ささいなことで不安定になる、しかしその動揺とは裏腹に使者を前に無様な対応をしない。無理難題をふっかけられてもうろたえるところを一切見せず、王女として受け答えをする。た

だの十五歳の小娘にできる芸当ではない。

（さすが名家のお嬢様だと言い張っただけあるか）

それでいながら貴族社会に通じているとは思えないほど大胆な決断をしてのける彼女が、自分の知らないものに見えたのもたしかだ。

（外見がちがうからか？）

細い身体で隊服を着ているときより無防備な姿を晒していながら、心は定まっている。

いつになく落ちつかないのは自分のほうだ。

彼女にとって王宮が自分の庭なら、自分は他人の庭に迷いこんだ部外者だ。竜騎士団のすぐ隣、おなじ山の中だというのに、これほどまでにゆったりと時が流れる世界を自分は知らない。穏やかでありながら地の底でなにかうごめくような焦燥感。それは人の目線やささやきがもたらすものだ。

自分の外見が、この王宮にとって受け入れがたいものだということは知っていた。それでも乗り込んできたのは、望みを叶えるためだ。

先の黒竜公が守るはずだった相手――女王と王女を帝国の手から守る。

それが闇の聖竜を継いだ自分の務めと思ってきたのに、他ならぬ王女の身代わりを務める彼女に庇われるとは。

（……ああ、そうか）

守るべきはずの相手が、部下の姿をしていることに戸惑っているのだ。
部下も守るべき相手にはちがいない。けれどもそれは自分の中で必ずしも重ならないものだ。
（……似ているんだろうな）
竜公叙爵の際に王女の姿を見ているはずの侯爵たちも、ルーシェをすんなり受け入れた。シリスから前もって話を聞いているためだろうが、あまりにちがう顔では今後の外交に差し障る。しかし本物の侯爵たちを前に、ルーシェのあの堂に入った態度は一体なんなのだろう。
（あれではまるであいつが王女本人――）
そのとき扉の向こうに人の気配がして、やや後に控えめなノックの音が響いた。

――言うべきか、言わざるべきか。
カイトはスメラギに与えられた部屋の前で逡巡していた。
なにも見なかったことにはできる。しかしシリスほど絶対的な立場と図太い神経があればなんということもないだろうが、こちらは中流貴族出身の一軍人だ。見て見ぬふりを通すには足りないものが多すぎる。
（でも王女本人ならどうして隊長が気づいていないんだ？）
黒竜公叙爵は王女みずからの手でなされたと聞いている。と同時に自分の騎士叙爵の儀の手順を思い返して、女王の顔を拝謁する機会がないことに思い至った。

自分は貴族出身なので女王の顔を知っているが、儀式の最中に顔を上げることは適わない。スメラギをはじめ平民出身の騎士の中にはいまだ女王の顔を見たことがない者もいるはずだ。気づいてしまったのは自分一人だけ、しかも団長みずから釘を刺すという念の入りようだ。ルーシェが王女本人だというのは固い。

軍属である以上、多かれ少なかれ機密事項はあるのはわかっている。だが――

カイトは拳をもたげたまま固まっていたが、意を決してその扉をノックした。

「――どうした」

まるで来訪に気づいていたかのように、スメラギはすかさず返事をしてきた。

「このような時間に失礼致します。ご報告が一点、エルヴァ砦より帝国側に不審な動きありとの情報が」

「……どういうことだ」

エルヴァ砦はレーヌ河に面する国境最前線の砦だ。その斥候部隊が、軍らしき集団を見かけたという。現在ローレンシアにはアシュアが滞在中だ。国交を求めながら国境線を刺激するとは考えにくいが、その報告も偽りではない。

「皇子に万が一のことがあった際に備えているのでしょうか」

スメラギはしばし考えこんでいたが、「王都駐留の黒竜隊を前線に出せ」と指示した。

「斥候隊、伝令隊だけ残ればいい。おまえももう国境まで一晩で飛べるな。戦力に数えるぞ」

「はい！」
「今晩中に先発隊を発たせろ。砦からの報告は密にして王宮まで通せ。俺が直接受ける」
それで用は済んだとばかりにスメラギは視線を外したが、立ち去らないカイトに不審げな目を向けた。
「……あの、いまひとつご相談が」
「どうした」
そのとき飲みこんだものはなんだったのか、喉が緊張のあまり上下する。
「根も葉もない私のまったくの想像ですが――」
王宮で見知ったことは一級機密事項。ならば実際に見たことを回避しつつ、私見として耳に入れればいい。
歯切れの悪い前振りに「なんだ」とスメラギの声音が刺を帯び、目つきが厳しさを増す。
だが次の言葉を耳にした瞬間、その黒の瞳は驚きに見開かれた。
「ルーシェが王女本人という可能性はないのでしょうか……？」

第6章

竜殺しの咎人（ドラゴンスレイヤー）

翌日、ドレスに着替えていたルーシェにもたらされた報せはふたつ、アシュアの神託が認められたこと、そしてスメラギが黒竜隊を動かしたということだった。

「黒竜隊を前線に!?」

（どうして……皇子の滞在中にそんな帝国を刺激するようなことを）

しかし侍女を問い詰めたところで答えは出ない。

ルーシェがすぐさま部屋を出ると、薔薇のアーチから竜騎士団の砦に向かう途中のスメラギを捕まえることができた。正装ではない隊服姿のスメラギを見るのはひさびさだ。ドレス姿のルーシェまで見習い騎士の感覚がよみがえる気がした。

「隊長！　黒竜隊を動かしたって本当ですか!?」

「前線に不審な動きがある」

「え？」

「帝国の意図が読めない。それを警戒しただけだ。こちらから仕掛けることはない。それがローレンシアの――女王陛下の御意思だからな」

「そう、ですね」

ローレンシアの軍隊は防衛のためだけにある。それにスメラギが黒竜隊の全権を預かっているとはいえ独断で動くはずがない。王都防衛の任を外れるならすくなくとも団長であるシリスの許可は得ているはずだし、シリスの口から母の耳にも届いている。

――昨日のナシルの一件の直後だっただけに、気が動転していたようだ。

「……お呼び止めしまして、申し訳ありません」

「気にしなくていい。接待役として相手の情報を容れておくのは当然のことだ」

「ありがとうございます。それに神託のことも……」

「済んだことはいい。先のことに目を向けろ」

そう告げると、スメラギはふいっと視線を外した。

（あ……また話を切られ、た？）

アシュアのことはまだなにも済んでいない。しかしスメラギは終わったことにしたいのだ。頬を叩かれて逃げ出したあの日から、スメラギとまともに会話が成り立たない。なにか伝えたくてもスメラギが一歩引く。

今もまた、もう話すことはないとばかりにスメラギは砦に足を向けた。アシュアの誕生日は明日――神託は今晩だというのに。

（隊長は砦に戻ってしまうの？　……もしかして国境に行くの？）

側役の任があるのに、というのはただの言い訳だ。今まで側役のスメラギの忠告をさんざん

無視してきたのは自分自身だ。見捨てられてもしかたがない。

（でも……）

一月ばかり前にスメラギがエルヴァ砦に視察に出向いたときはこんな不安は感じなかった。だが今回はちがう。あきらかに軍事行動として前線に赴くのだ。戦が起きるかもしれない前線に。

（隊長が、いなくなる……？）

――――いかないで。

不意に心が逸って、気がつけばルーシェの指はスメラギの隊服の袖をきゅっと摑んでいた。さすがに想像していなかったスメラギは、驚いてはっとふり返る。

「……他になにか用か？」

問われても答えとなる言葉が見つからない。

スメラギは竜騎士で、しかも隊長だ。前線は危険だから行かないでとはさすがに言えない。けれど、今のスメラギにはなにか影が取りついているように感じた。闇の底に息づくなにかがルーシェの胸の奥で首をもたげ、不安をかきたてる。

この不安はきっとスメラギの心が遠いからだ。だからこのまま遠くに行ってしまうのではなどと考えてしまう。

「……隊長はなにをお考えなんですか」

「おまえが気にしなくてもいいことだ」
あからさまな拒絶がルーシェの心を刺し、影を落とす。そして黒いなにかが胸の奥でうねり、心の静穏をかき乱し、嵐となって吹き荒れ――涙が、こぼれた。
スメラギは目を見開いて向きなおる。
「……どうした」
（心配させたいわけじゃないのに）
しかしその意図に反して呼吸の乱れはおさまらない。胸が、苦しい。
「そんなこと、言わないでください……」
「なに？」
「気にしなくてもいいことなんてなにもありませんから」
気にしなくていい、そう言われても気になる――気にしてしまう。考えずにはいられない。この想いがどこから湧いてくるのかルーシェはまだよく知らない。
「ひとりでいかないでください！」
スメラギが呆気にとられていることは止まった息でわかったが、やがてスメラギは顔を背け、ひとつ大きくため息を吐いた。
「――どうしておまえはこんなときにばかり勘がいいんだか」
「え？」

「俺は国境には行かない。神託に立ちあう。そしてもし皇子が授かるようなことがあれば」

つづいて耳に寄せて落とされた一言に、ルーシェは息を呑んだ。

あまりに小さな囁きだったが、聞き違えようはずがない。

（だって、竜を殺すだなんて……！）

「竜を帝国に渡すわけにはいかない」

「わかってます！　けどそんなことをしたら隊長は!!」

竜は天空神の御遣い、竜殺しは天に叛く大罪だ。

他の大罪は死罪だが、竜殺しだけは大罪と定められているだけだ。なぜなら人が裁くまでもなく、竜みずからが断罪するからだ。

竜を殺めた者は他の竜に食い殺される――ローレンシアの民すべてが知る言い伝えだ。

「隊長はデュラクの主なんですよ!?」

ただ人が竜を殺めてもその身で償うだけのこと。しかしスメラギが手を下せば今までデュラクと築いてきた信頼をも壊すことになる。そしてその大罪はデュラクが裁くかもしれないのだ。

（デュラクが隊長を殺す……？）

デュラクの鋭い牙は容易くスメラギの命を奪い去る。そのときデュラクはなにを想うだろう？

デュラクはルーシェが指揮杖を預かっても興味なげな顔をして、スメラギとの関係は非常に

淡白だ。けれどルーほどではないにしろ、スメラギを主と定めたからはデュラクにもなにか想うところがあるはずだ。その主に裏切られて辛くないはずがない。

「隊長はデュラクにそんなことをさせるつもりですか!?」

「竜が人を襲いたいと思うか？」

静かな問いかけだった。あまりに落ちつき払った声音にルーシェは怯んだ。

「竜はおそらく人と関わりたくないんだ。だが聖女の誓いに従ってローレンシアを守っている。その竜を躾けて軍事に利用しているのが竜騎士だ。他国民を襲うように強要しておきながら自国民を襲うことは良心が痛むのか？」

「――――!!」

竜はただの御遣いではない、戦の道具だとスメラギは言っている。竜を翔ばしているかと訊いたその口で。戦の道具にしたくないと願っているその人が。

「でも！　黒竜隊のみんなだって絶対に反対するはずです！」

たしかに、授かった竜をただひとりの狂乱者が殺してしまったなら――そして竜の掟に従いみずからの竜に食い殺されたなら、帝国もそれ以上の責任を追及しようがない。

けれど、隊長一人が責任を負うような筋書きを隊員が認めるはずがない。

「隊員を裏切って隊長はそれでいいんですか!?」

痛いところを突かれたか、スメラギは苦い表情を浮かべたがそれも一瞬のことだった。

「――言ったろう。俺は国を守る。そのために騎士になったと。その自分が帝国に付け入られる隙になるというなら、自らを処する覚悟もできている」

ナシルが言ってきたのは、異国民でも竜の主たりえるのではないかということだ。もしスメラギがいなければ――いや、スメラギが竜に食い殺されるようなことになれば、いつ主を襲うかもしれない竜の主に誰がなりたいと望むだろう。帝国の者に神託を受けさせたいとも言いづらいはずだ。

（隊長はそこまで見越して……？）

しかし自分はスメラギにそんなことをさせるために神託を認めたわけではない。

「嫌です絶対！　わたしはもう大事な人を失うのは嫌なんです……!!」

その宣言に、スメラギは目を見開いた。

瞳に映る自分の姿。感情を覗かせない黒の瞳の中でなんらかの想いが錯綜している。だがそれらをすべて抑えつけて、スメラギは口を開いた。

「おまえが戦で父を亡くしたことは知っている。俺は実の父を知らないが、先代を亡くしているからその気持ちは多少なりとも理解できるつもりだ。だが前線にいる者はもちろん、王都勤めの者もいつ戦が起きても戦う覚悟で任を果たしているんだ。半端な想いを持ち込まれては隊を乱す。――その覚悟がないなら隊から出て行け」

ルーシェの呼吸が止まる。しかしいま苦しい思いをしているのは切り捨てられる自分ではな

く、切り捨てようとしているスメラギのほうだ。
みな覚悟を定めていることは知っている。騎士の誓願とはそういうものだ。けれども覚悟しているからといっていつ死んでもいいなんて、家族も誰も思っていない。
そしてスメラギが命を懸けるべきは今ではない。――それは正論を盾にした逃げだ。
ルーシェはすっと首をもたげる。そして王女として叩きこまれた立ち居で、スメラギをまっすぐに見つめた。
「私は、竜殺しなど認めません」
スメラギはその一言に息を詰めたが、まっすぐに見つめ返してきた。
「――誰にものを言っている」
王女でもあるまいし、とつづく言葉をルーシェは遮るように告げる。
「王女の命なら従ってくださいますか」
本物の王女。たとえスメラギの抱く王女像を崩すことになっても、ここは退いてはいけない一線だと心が告げている。
反論されるとは思わなかったのだろう。スメラギの瞳に驚きの光が宿ったが、「無理だな」と答えた。
「それは何故？」
「すでにあいつに話してある。今日中にご聖断を持ってくるはずだ」

女王の聖断――それを覆せる者はこの国にいない。判断を下した女王本人ですら、理由なくして一度下した決定を覆すことはできない。

「……わかりました」

わかったのはスメラギの竜殺しではない。その決定権がすでに別の場所に移っていることだ。

（――私なら）

王女シエラなら、女王に会うことが可能だ。

ルーシェはスメラギに深々と一礼すると踵を返した。

母は、たとえおなじ王宮にいても私的な時間以外は自分の母ではない、そう教えられてきた。母様に会いたいとぐずってもそれが叶えられることはなく、毎日会えるのは就寝の挨拶だけ、あとは数日に一度、政務の合間に部屋に顔を出してくれるのを待つばかり。

だから、自分からこの扉の前に立ったことはなかった。

竜紋の装飾の施された扉の真正面に立ち、シエラはその両端に控える衛兵に告げた。

「陛下にお目通りを」

女王陛下は執務中ですとの型どおりの答えが返される。

「王女シエラが急ぎ謁見を申し出ていると伝えなさい」

衛兵が部屋の内の女官に取り次ぎ、女官は次の間の別の者に取り次ぎ、その先何人を介したものか、しばらくして部屋から現れたのはひとりの侍従だった。

内に通されればそこは控えの間で、左右に大きな姿見とひとりでは抱えきれないほど大きな花活けが飾られていた。この花活けを埋めるだけでも丸一日かかりそうだ。

さらに扉を抜けて、そこから右に折れていくつかの部屋をわたり、通された先は庭に面した小部屋だ。勧められるままにシェラはその部屋の長椅子に腰を下ろす。

「陛下は朝議の最中ですので、しばしこちらにてお待ちくださいませ」

王女といっても重臣が居並ぶ朝議に割り込めるわけではない。おそらくその席にはシリスもいてアシュアの神託のこと、竜殺しのことが議論されているはずだ。神託は今晩、この朝議の中で女王の決定が下される可能性も高い。

だが竜殺しの結論に至るまでにいくつもの選択肢がある。まずアシュアが授かるとは限らないし、授かったとしても殺すかどうかで道が分かれる。竜殺しなどもはや伝承にしかないこと、実際に竜殺しをすれば手を下した者の犠牲だけで済むかも不明だ。聖竜の主が大罪を犯せば竜の加護すべてを失うやもしれない。

多くの竜を失った先の戦では、たった一晩で帝国が侵攻を断念した。竜に弓引いた者たちは竜の報復を受け、断念せざるを得ない状況まで追い込まれたのだろう。

竜はローレンシアの守り神、けっして軍の道具ではない。道具と見做せばきっとその驕りは

なんらかの形で報いとなる。

（絶対に竜を手にかけちゃダメ。どうか決断を下さないで……！）

出されたティーカップに手を伸ばすこともできず、ただ祈りながら時を待つ。――そしてどれほど時が過ぎたか、とうに湯気は消え、陽が中天を過ぎるころにその扉は開かれた。

「母様！」

ルーシェは立ち上がったが、白のドレスに身を包む母の姿を見て思わず泣き崩れそうになった。しかし泣いている場合ではない。なんとかこらえ、ハンカチを出す余裕もないまま手袋で覆った指を目元に当てた。

「こんなところに来るなんてどうしたの？」

「あの、皇子の神託のことでお話がしたくて」

とりあえずお掛けなさいな、と肩に母の手を添えられて長椅子に腰を下ろす。

「皇子のお相手をがんばっているみたいね。それでなにが訊きたいの？」

娘を見つめる母の目は穏やかだ。けれどもどれだけ難問にぶつかろうと微笑を絶やさない人だと知っているから、不安も感じる。

「神託についてなにか朝議で決まったことは……？」

「皇子には他の子とおなじように受けてもらうわ。それだけよ」

「でも皇子が竜を授かったりしたら……」

「そのときはそのときよ。たしかに懸念する声はあったけど、まだ授かってもいないものをどうこう議論する場ではないから」

（え、じゃあまだ結論が出されていないどころか話しあってもいないの？）

あのシリスのこと、早々に手を打っていると思っていた。だが、

「表では話していないけれど、シリスから事情は聞いているわ」

どうやらシリスが内輪の話で止めておいてくれたらしい。そのことにほっとしつつも、母の表情は晴れやかとは言い難かった。

「万一の時は、その方法も考えなければいけないわね」

「どうして!?　一頭くらい認めても大丈夫でしょう!?」

「皇子が授かるということは他の国の民でも授かる可能性があるということでしょう。国の考え方が根本的に揺らぐわ。それに授かったのが普通の竜ならまだしも、もし聖竜なら？」

ルーシェは驚きにはっと目を見開いた。

（そう、まだ〈陽〉と〈地〉の聖竜が顕現していない……！）

いま顕現しているのは、母に従う〈月〉の聖竜、シリスに従う〈空〉の聖竜、そしてスメラギに従う〈闇〉の聖竜の三頭だけだ。

竜は同色の聖竜に従う。もし聖竜が顕現して皇子と誓約するようなことがあれば、竜騎士団の一隊まるごと帝国につく事態も考えなければいけない。

「地の聖竜は還ってまだそう経っていないからしばらく出てこないかもしれないわ。けれどデュラクの例もあるから……」

竜は主の死に従って神の山に還る。過去の例をみると一度還ればおおよそ十年単位で出てこない。だがデュラクは一年経たずして主を定めた。闇の聖竜が現れるのはまだしばらく先――それが世間の認識だったのをいいことに、貴族の思惑によってデュラクは何年も聖竜として認められないまま放置されていた。

「だから普通の竜なら今後の外交方針次第だけれど、聖竜の場合は覚悟を決める必要があるかもしれないわね」

(もし皇子が聖竜を授かったら)

竜の習性を考えれば、皇子自身を帝国に帰すことも難しくなる。しかし友好訪問に来た皇子を捕らえるようなことになれば、即刻戦になりかねない大問題だ。

帝国との全面戦争を回避するためなら、スメラギは絶対に竜殺しを選ぶ。そして自分も王女としてその選択に頷かざるを得ない状況だ。

(でも……!)

シエラとしての選択とルーシェの心が錯綜する。

国を守りたい、それとおなじくらいあの人を守りたい。

(どちらかを選ぶなんて、そんなこと)

――判断を下すのが王女の仕事、その後の対策を考えるのは俺たちの仕事だ。
――後は下に任せて自分の判断の結果を受け入れるのが上に立つ者の務めだよ。
蘇るのはシリスの声音だ。シリスはいつもしれっと痛いところを突いてくる。それが王女として当然持っているべき覚悟だよと言わんばかりに。
シリスならどういう結論を出すのだろう――そう思いかけて、ルーシェは首を振った。
シリスの言っていることがいくら正論でいくら正しく見えようと、判断を下すのは自分だ。
そのときルーシェの手の甲に、母の手が重ねられた。
「……母様？」
「そんなに大切な人なの？」
その問いに、ルーシェはなんのためらいもなく「うん」と頷いた。
しかしそれと同時にその問いかけに違和感を覚えた。ほんの紙一枚分ほどの些細なずれ。
（……たとえその岐路に立っているのが隊長でなくても）
まったく見ず知らずの一騎士や一国民でも、きっと自分はそれを受け入れることはできない。
ならば、それはルーシェとしての結論ではなく。
（シエラとしての答えでもあるの……？）
「最初にね、あなたに帝国の訪問の申し出をどうするか訊いたでしょう」
「うん……？」

「国交なんて持つ気はないって突っぱねることもできたのよ。でもあなたはそうしなかった」
（だってそれは、敵だと思って牽制しあっていてもいつまでも状況は変わらないと思ったから……）
「今までとちがう関係を作りたいと思ったのでしょう？　それはどうやって？」
（……あ）
はっと顔を上げたルーシェの前に、母の微笑みがあった。
「あなたにはあなたの方法があるんじゃなくて？」
「母様！　ぎりぎりまで結論を出さないで！　私、行ってくるから！」
立ち上がった娘を女王は穏やかな笑みで見送った。

夕焼けが鏡台の鏡に映りこみ、刷いた口紅がよりいっそう紅々しく見えた。
（――たしか神託の日は）
昼に王都の神殿に集まって、神託を受ける子どもたちだけで司祭の話を聞く。
誰しも一度は聞いたことがある創国神話、しかしそれが見たこともないような天井の高い建物の、しかも物語を表した色ガラスを首が痛くなるほど見回しているうちに、おなじようにめ

ずらしがっている隣の子どもたちといつしかおしゃべりに夢中になっていた。

それからみなで夕食をとって、湯浴みをして、ひとりずつ自分の部屋に連れて行かれる。その頃にはすっかり仲良くなった子どもたちと、また会おうねなどと言いあって。

「そうしてあなたに会ったのよ」

ルーシェの化粧を隣の椅子にちょこんと座って見ていたルーは、なにを言っているの？　と小首を傾げながらも興味深そうに鏡を眺めている。

「ルー、あとでよろしくね？」

夜会よりも略装の深紅のドレスに身を包んだルーシェは、ドレスとおなじ色のリボンをルーの尻尾に結び、陽の沈みゆく私室を後にした。

神殿に行くと灯火が煌々と焚かれ、夜の訪れを知らせるのはガラス窓だけだ。色ガラスの窓は内部の燭台に照らされて、昼とはまた異なる色あいを醸し出している。

祈りの間に入り、夜の祈りを捧げていた大祭司の邪魔にならぬようそっと席に着き、瞳を閉じて祈りの聖句を口にする。

五色の竜と聖女像に祈りを捧げ終えた大祭司は、ルーシェに近づいてきた。もう齢八十にならんとする老祭司は、数年前にルーシェがルーを授かった日もここにいた。

「ここは変わりませんね」

「今日といえども、特別なことはいっさいせぬようにとの陛下のご命令にございますれば」

帝国の皇子の居場所としてはあまりに無防備だ。だが今日ここにいる子どもたちは生まれ日を各地の神殿に届けていて、昨日も神託の説明を受けにこの神殿に来ている。昨日の今日では刺客と入れ替わりようもない。

ルーシェは立ち上がって深々と聖女の像に一礼すると、大司祭と共に神託を受ける建物へと向かった。

すでに子どもたちは各部屋に収まり、小窓から仄かな灯りが漏れている。建物内に入ってすぐの部屋には、神官が数名とナシルとスメラギが控えていた。

スメラギは隊から直接来たのか、隊服姿のままだった。王女が来ることは伝えていないので、ナシルもスメラギも驚きを隠せずにいる。スメラギの目はなにをしにきたと告げていたが、大祭司を前に上司として声をかけることはなかった。

「ナシル殿、これからアシュア殿下とお話しさせていただきます」

「神託はおひとりでということで、私も入室を拒まれましたが？」

「殿下は聖女の末裔であり竜の加護を享けておられる御方、神託を左右しようはずもありません」

大祭司の言葉にナシルは反論の余地もなく、スメラギは驚きとともにこちらを見ていた。どうやって大祭司まで巻き込んだんだと言いたいのだろう。

ルーシェは神官に案内を頼み、大祭司を従えて奥へと進む。細い廊下に扉がずらりと並び、

まるで隊舎のようだ。

他の部屋と特に変わりのない一室の前で神官は立ち止まると、廊下に音が響かないように拳を押しつけるようにノックして、扉を開ける。

「シエラ殿下！」

アシュアはルーシェの顔を見るなりぱっと顔を輝かせた。

ルーシェはしっと指を立てて、大祭司と神官に礼を述べて一人で部屋に入る。そしてほどなく二人の足音はまたしずしずと遠ざかっていった。

アシュアは今晩眠るつもりがなかったのか、昼間のような正装をしていた。アズィールの風習なのか床に直に座っていたが、王女であるシエラに椅子を勧めて自身はベッドの上に座る。

「シエラ殿下はどうしてここに？」

「アシュア殿下とお話がしたくて。――誰の目もないところで」

その一言に、アシュアの瞳がすっと真剣さを帯びた。ルーシェはそれを見て取ると立ち上がり小窓を開けた。それを待ちわびていたかのように、暗闇の中から翔んできたのは。

「あ、竜だ！」

ルーシェはルーを二の腕に宿らせて、扉を閉ざしてふり返る。

「それって昨日の子ですよね？」

昨日のようにルーと遊ぼうと手を伸ばしかけたアシュアに、ルーシェは告げた。

「ええ。そして私の竜です」
「え？　だって竜は一頭しか授からないってお聞きしましたけれど……」
「この子は私が神託で授かった子です」
「……どういうことですか？　神託で授かったならもう何年も前のことでは……」
もう八年の月日が流れている。誕生日は目前だからもうすぐ九年だ。しかし目の前にいるのは生まれたばかりのような幼竜で、その現実にアシュアは混乱しているようだ。
「この子は私が未熟ゆえにまだこんな大きさなんです。このことはまだ貴族の誰にも明かしていません。竜が育たないのは恥……ですから」
アシュアの金の瞳がじっと見つめる。国内の貴族にも明かしていない秘密を語る、その本心を見透かそうとするかのように。
「殿下は壁を作りたくないとおっしゃいました。ですから私もしがらみを取り払って、殿下とお話ししたいと思ったのです」
「僕になにをお話しになりたいと？」
「この国の竜の存在について。――そして皇子にはこの神託から降りていただくことをご了承していただきたいのです」
アシュアの瞳に一瞬驚きの色が見えたが、すぐに我を取りもどすとつづきを促した。
「どうぞお話しください」

「殿下もご存知と思いますが、竜は主をひとり定めるとその者以外の命令は聞きません。この世に顕現するすべての竜には誓約者がいて、その者たちが集う場所が竜騎士団です。竜騎士は長らくローレンシア生まれの者だけでした。そこに聖竜を授かったのが黒竜公スメラギです」

スメラギが異国の生まれであること、それゆえに長らく聖竜の主と認められなかったこと、異国の者が授かることが公になれば諸外国も竜を求めるだろうこと、そして竜によって保たれている今の均衡が破られかねないこと。

それらを順を追って語ると、アシュアは真剣な面持ちで聞き入っていた。

「ローレンシアに戦を仕掛ける意思はありません。しかし竜はこうして話し合いの場を持つために必要な力なのです」

もしローレンシアが竜の加護のないただの国なら、帝国はアシュアを送るまでもなく力ずくで攻め取っていた。しかし今こうして帝国の皇子であるアシュアと話ができるのは、たがいの軍事力を認めているからだ。

「力がなければ話し合いの場につくことすらできない、これが現実です。この子はまだ小さくてなんの力もないように見えますけれど、たしかにいま私たちが言葉を交わせるのは竜のおかげなんです。皇子がローレンシアと話し合いの道を選ばれるなら、話し合いの前提であるこの力をローレンシア国内にお収めください」

ルーシェの真剣な眼差しに対し、ルーはなぜここに呼ばれたのかわからないまま、また遊ん

でもらえるのかと体を左右に揺らしている。その姿は可愛がる以外になんの役に立つのか疑問に思えるが、ローレンシアを独立国として成り立たせているもの、そしてルーシェ――シエラが王女でいるために絶対に必要な存在なのだ。

――あなたにはあなたの方法があるんじゃなくて？

そして自分が選んだのが、話し合いの道だ。

長い沈黙が下りる。アシュアは表情を変えることなくルーシェの言葉を整理していたが、やがて口を開こうとした――そのとき。

最初にぴくりと身を震わせたのはルーだった。次いで、かすかに部屋に流れこむ夜の冷気にルーシェの肌が粟立った。

――なぜ冷気が流れこむ？　窓は閉めたはずなのに。

（……固まっていちゃダメ）

恐怖に強張る首を窓に向けると外は闇、そして闇の中に二つの目が浮いていた。

「――!!」

その双眸は獲物を見つけると鋭さを増し、ルーシェに叫び声を上げる隙も与えず近づいてきた。そして子ども一人が外に出られるかどうかという小さな窓から猫のようにするりと入りこむ。

ルーシェはとっさに窓から離れると、寝台の上のアシュアを庇うように侵入者と向きなおっ

た。

侵入者は濃紺色の衣をまとい、顔もまた瞳を除いて同色の布で覆っている。ローレンシアでは見ない衣装だ。かといってアシュアの衣装ともまたちがう。瞳のすぐ下に覗く鼻梁から侵入者は男だと知れた。

（狙いは皇子!?）

本来、この部屋には神託を受けるアシュアしかいなかった。ルーシェが来たのはまったくの偶然だ。侵入者の茶色の瞳を見ると、その視線が捉えているのはやはり自分ではなかった。

男が何者なのかはわからないが、ここでアシュアに万が一のことがあれば帝国との和平など未来永劫望めない。

「殿下、逃げて！」

アシュアは自分の立場をよく理解していた。ルーシェを残していく悔しさをにじませながらも、寝台を蹴って戸口へ駆け寄ると扉を開け広げて出て行った。

侵入者はすぐさまアシュアの後を追おうとしたが、ルーシェが戸口に立ちはだかる。

「行かせない!!」

すると侵入者は腰に佩いていた刀をするりと抜いた。――湾曲刀だ。燭台の灯りが研ぎ澄まされた刃を照らしだす。

男は半身を引き斬り込む体勢に入る。それはローレンシアの型ではなかった。

その無駄のない動きが記憶の欠片と重なる。
（これってやっぱり……！）
男が斬りかかろうとしたそのとき、圧倒的な質量がふたりの間に割り込んだ。
それは身を一ひねりすると、大きな尻尾で侵入者を薙ぎ払った。
「ルー!?」
立ちはだかっていたのは成体に変化したルーだ。
そしてルーはちらと視線を向けると、紅玉石の瞳で皇子を追うよう促した。
成体になったルーは十分騎乗できる大きさ、その背中ひとつで戸口をすっぽり覆い隠せる。
「ルー、お願いね!!」
床に転がっていた男はすかさず身を起こして追いすがろうとしたが、ルーは炎を吐いてその進路を遮る。
（ルーなら大丈夫）
成竜相手に剣一本でどうなるものでもない。
ルーシェが建物入り口へと駆けつけると剣戟の音が響いていた。スメラギとナシルもまた、おなじように闇色の衣をまとう男たちに襲われていた。すでに何人か床に沈められているが、そこにもアシュアの姿はない。
「皇子はどうした!?」

剣を交えながら荒い息でスメラギが問う。
（こっちじゃなかったの!?）
ルーシェは身を翻していま来た廊下を引き返すと、廊下を抜けた先、裏口の扉が開け広げられていた。
ルーシェが扉から飛び出すと、横殴りの強い風が銀の髪をなぶる。
広がる石畳。その先には遮るもののない遥かな闇と星空。山肌に出たのだ。
その石畳の端に短刀を構えるアシュアの姿があった。向かいあっているのは闇色の衣の男。
先程の男とは体格がちがう。部屋で仕留められなかったときに備えて、外に仲間を配置していたのだろう。
ルーシェはドレスに仕込んでいた暗器の隠し針を抜くと、男に向かって突進する。拳三つ分ほどの長さの針は男の腕に深々と突き刺さった。
「殿下！　ご無事ですか!?」
ルーシェは男の脇をすり抜けてアシュアに近づこうとしたが、振り回した男の腕に弾き飛ばされた。
「シエラ殿下！」
低い石壁に叩きつけられて咳きこむルーシェに、アシュアが駆け寄ってくる。
おなじように呼吸を乱した男の息遣いが聞こえる。

アシュアがルーシェを庇って短剣を手に立ちはだかると、利き手の自由を奪われた男は湾曲刀を逆手に持ち、アシュアに狙いを定めた。

（だ、め……）

アシュアはローレンシアと帝国を結ぶ希望だ。

（絶対に守らないと……！）

男の突進と同時にルーシェはアシュアの手を引く。細く幼いアシュアが体勢を崩して尻もちをつきそうになったところを抱きしめ、自分の身体と入れ替える。

ルーシェは焼ける痛みを覚悟して強く目を閉じる。

刃が風を切り裂く音――しかし痛みは襲ってこなかった。

（……なにがあったの？）

おそるおそる首をもたげたとき、抱きしめていたアシュアごと空に連れ攫われた。

この浮遊感、そしてこの腕を自分はよく知っている。

「――隊長？」

「怪我はないな」

声の主はデュラクを操り、風に乗って旋回する。はばたき一つで遠くなった露台では男の肩に深々と槍が刺さっていた。先程の音はスメラギの黒槍が風を切る音だったのだ。

やがて男の身体が傾いだ。



露台に降下すると、ルーシェはアシュアを抱いてデュラクの背から飛び下りる。駆けつけてきたナシルが暗殺者の布を剝いで男の息を確認するが、ほどなく首を振って布で顔を覆った。

「すでに自害しております」

スメラギの槍は肩を貫通しているが致命傷ではない。男は事をし損じたときには――いや成功したときでも死を覚悟していたのかもしれない。

（死間……）

つい先日聞いたばかりの言葉が脳裏に浮かび、身体が震えた。

「王女殿下ならびに黒竜公閣下、皇子をお救いいただいたことに感謝申し上げます」

膝をついたまま頭を垂れるナシルに、「どこの手の者だ」とスメラギが問う。

ナシルは言い淀んだが、恩義を優先させて口を開いた。

「……我が国の者です」

アシュアが身を強張らせる。自国の民に狙われたのだ。その衝撃は察して余りあるがアシュアは取り乱す様子はなかった。冷静にとまでは言えないが、その目で現実を受け止め、見極めようとしている。

「殿下を害そうとする輩が他にいないとは限りません。一時、身をお隠しになられては――」

「――それはできない」

「殿下？」

「僕は帝国の皇子だ。たとえ裏切られようとも自身の国民から姿を隠すことなんてできない」
「しかし殿下の御身に万一のことがございますれば両国の関係はいかがなりましょう」
ナシルはルーシェに視線を向ける。殿下からお口添えいただけませんかと、その目が語っている。
（王族としてどうするべきなの？　私が殿下の立場ならどうする……？）
見下ろすとアシュアはまっすぐにナシルを見つめている。それは虚勢などではないとルーシェは確信した。
「……できません」
「王女殿下？」
「殿下をお渡しすることはできません。今は神託の最中ですから」
ですが、となおも食い下がろうとするナシルに、ルーシェは両膝をついてアシュアに問うた。
「殿下、神託を辞退なさいますか？」
「いいえ」
その明確なアシュアの答えを得て、ルーシェはふたたび立ち上がって告げる。
「殿下のご意思により神託は続行し、殿下には神殿にお戻りいただきます」
あとのことは黒竜公に任せます、とこの一件の検分および警固をスメラギに預けて、さあ、とルーシェはアシュアを促した。

神託の部屋に戻ると、入り口にでんとルーの背中が立ちふさがっていた。隙間から部屋を覗くと侵入者の姿はない。竜相手では分が悪いと悟って小窓から出たのだろう。

床には焦げ跡があったが他に燃えた様子はない。部屋を燃やしちゃダメと普段からきつく言っておいた賜物だろう。

「ルー、ありがとう」

その声にルーはのそりとふり返り、ぽん、と音を立て煙が立ったかと思うと、次の瞬間には幼竜の大きさに戻っていた。

「怪我はない？」

抱き上げると、ルーはここを斬られたと訴えるように前脚を差し出した。あったのは鱗にうっすらと引っ掻いたような跡、怪我と言うほどのものではなかったが優しく撫でるとルーは嬉しそうにすり寄ってきた。

アシュアはルーの変形に言葉を無くしていたが、やがてぺこりと頭を下げた。

「助けていただいてありがとうございます。そしてご無理申し上げて申し訳ありません」

いいえとルーシェは首を横に振る。

あのときアシュアに問うたのは神託についてではない。国民に裏切られたいま、王族として

なにを選ぶかだ。
そしてアシュアは神託を――否、王女シエラである自分と話す時間を選んだ。
ルーシェは侵入者によって床に転がされた椅子を横目に、寝台に腰かける。
「あの刺客がローレンシアの偽装という線はお考えにならなかったのですか」
「偽装の必要などないでしょう。ローレンシアにいるかぎり僕は籠の鳥なんですから」
言ってからアシュアははっとして「申し訳ありません」と頭を下げた。
「他意はないんです。ローレンシアという国に望んで飛びこんできたのは僕のほうです。温かく受け入れてくださったことに感謝しています。僕を狙ったのは帝国の者なのは間違いないです――おそらく兄の手の者でしょう」
「お兄さん、ですか？」
「ええ、僕の国では皇位継承に生まれ順は関係なくて、皇子同士が争って勝者が帝位を継ぎます。昔は勝者の証として戴冠のときに兄弟の首を並べたとも聞きます」
首だけとなった兄弟たちが虚ろな眼で見つめる戴冠式――想像すると身が凍った。
「さすがに今はそこまでしませんが、勝者であることを貴族たちに納得させなければなりません。競う相手がいなくなればそれがなによりの証です。――我が国の争いをローレンシアに持ち込んで申し訳ありません」
「しかし、失礼ながらローレンシアよりも本国のほうがその……」

暗殺するには好都合なのでは、とは口にはできなかったがアシュアは意図を汲んだ。
「帝国で狙われたことがなかったとは言いませんが、僕は後宮暮らしだったのですでに成人している兄たちとは距離があったのだと思います。しかし今回の訪問団は帝国の使者、僕の配下だけで構成されているわけではありませんから」
たしかにアシュアの言うことはわかる。だがなにかが引っ掛かった。
(皇子を狙うなら、私室に下がっているときいくらでも機会はあったわよね?)
王女がアシュアと会っているときは近衛騎士がいるし、竜騎士であるスメラギもいる。確実に狙うなら守りが薄いときの方がいい。帝国の刺客ならローレンシアの目が届かないときの方が狙い目のはずだ。
(狙えない理由があったとか……皇子の側にいつもいたのはナシル……?)
「殿下のお側付きのナシルは腕利きなんですか?」
見た目は鍛えている感はないが、スメラギのように術を会得している可能性もある。
「いいえ、ナシルは大学の学生ですから、護身の心得は多少あるでしょうがその程度です」
(じゃあ皇子暗殺に弊害はなかったはずよね。ナシルを巻き添えにしたくなかった? でもさっきは隊長と一緒に襲われていたし……どういうこと?)
「ローレンシアの外交問題が僕たち兄弟に預けられたことは以前にお話ししたと思います。下の兄——第二皇子は和平の道は考えていないようで、この訪問にもずいぶん反対されました」

「それはまた何故？」
「ローレンシアを――竜騎士団が手に入ればこれほどわかりやすい成果はありません。軍属している兄は幾度も戦の前線に立ってますから、竜騎士団を手に入れたときにどれほどの戦力を得られるか、よくわかっているのでしょう」
（あ……）
ルーシェは思惟に引きこまれ、「和平がなれば竜騎士団を手に入れることは叶わなくなりますから」とつづくアシュアの言葉が遠くなる。
前線――たしか最近そのような話を聞かなかったか。
（そう、前線で不審な動きがあるって隊長が……）
「もし、殿下の暗殺が成功していたら……」
友好のために訪問中のアシュアがローレンシアで命を落とす。しかも自然死ではなく、外傷による暗殺であることが明らかであれば、殺したのは帝国の者だなどという言い訳が通用するはずもなく。
「――戦争は避けられないでしょう」
アシュアの言葉に心臓の鼓動が速まる。
「たしかに、兄は開戦の口実が欲しかったのかもしれません」
「――!!　でも、アシュア殿下がローレンシアでどのように行動されるかはわからなかったは

ずです。行程はすべて王都にいらしてからお伝えしたんですから……」

随行していた暗殺者にはアシュアの行動は知れていただろうが、竜の翼でなければ国境までは馬で十日以上かかる。国境にいる兄皇子に知らせる術はない。

それにローレンシアが皇子の身柄を預かって随行者とは完全に引き離される可能性もあったのだ。そんなすべてが未確定の状況で、アシュアの暗殺を見越して軍事行動に移すのは無理がある。

アシュアの暗殺と前線の不穏な動きはなんのつながりもない、ただの偶然なのだろうか。

（この訪問すら急に決まったもので、最初に帝国が申し入れてきたのはわたしの誕生日の……）

ルーシェははっと面を上げる。重なる符号があった。それは。

「誕生日……！」

ルーシェの叫び声に、アシュアもまた目を見開いた。

「そうか。僕がローレンシアでどのように過ごそうと誕生日は動かない――」

シエラの誕生日にしろアシュアの誕生日にしろ、その日は必ず晩餐会が開かれる。そしてローレンシア訪問中のアシュアが、帝国の随行者と引き離されてひとりでその席につくこともない。そして晩餐会の席上でアシュアが命を落とす――それが確定事項であるならば、帝国はローレンシアでの皇子の行動を知る必要はない。

結果的には晩餐会ではなく神託の晩に決行されたが、それは人出の多い晩餐会よりもアシュアがひとりきりになる神託のほうが成功しやすいと踏んでのことだろう。事実あの部屋にアシュアひとりきりだったなら――ルーシェがルーを連れていなければ、暗殺は成功していたはずだ。

「だから帝国は王都の動きを見越して行動を……？」

「シエラ殿下、それはどういうことですか？」

「帝国の軍に前線で不審な動きがあるとの情報が入っているのです」

「！　戦端が開かれてからでは間に合いません！」

帝国側はアシュアの誕生日――明晩が決行日だと確信している。ならば兵を動かす日は。

（あと丸一日――間に合う!?　ううん、間に合わさないと……!!）

「殿下はしばしお待ちを！」

そう告げたルーシェは護衛にルーを置いて部屋を飛び出した。

（渡さなかった、か……）

実況見分もろもろはローレンシア側に任せ、ナシルは露台から星空を眺めていた。

先ほどアシュアが神託を諦めて下がらなかったのは——いや、王女が神託を諦めさせなかったのは予想外だった。

王女が神託を受けるのを認めたのはナシルがそのように仕向けたからで、王女としては己の失態を取りもどすためにもこの暗殺事件を幸いに神託を取りやめてもよかったはずだ。

しかし王女は、あの状況下でアシュアの意思を優先させた。

（外を知らない甘いだけの王女かと思っていたが）

外見をとりつくろい、礼儀作法を教えこむことはすぐにできる。しかし想定しない事態への対応に人となりが出る。

あの王女は表には出てこなかっただけで、きっちり王女として育てられてきたらしい。そしてずいぶん性根が据わっている。

「遺体はこちらで預からせてもらうがよろしいか」

暗殺未遂事件の現場指揮を執っていた黒竜公が問うてくる。

すでに事切れた死体に用はない。「存分にどうぞ」とナシルは返した。

「他にも数体、おなじ風体の遺体が見つかっている。おそらく自害だ。帝国ではそのように教育されているのか？」

「残念ながら私はそのような教育は受けておりませんのでわかりかねます」

自害を選んだ者もいただろうが、おそらく自害に見せかけて他の勢力に片付けられたのだろ

う。この使節団の中には三人の皇子にそれぞれ従う勢力がある。ナシルが把握していないだけで各貴族の息のかかったもっと多くの勢力があるはずだ。

その中で第二皇子の手の者が神託を好機と捉えて早まった。ただそれだけだ。

「あなたにはいろいろ事情を聞かせていただくことになりそうだ」

「このような事態です。拒むつもりはありません――が、その物騒なものをしまわれてはいかがですか」

黒竜公の口調は穏やかだったが、いつしかナシルの首筋には抜き身の短剣が当てられていた。

「今さら一体遺体が増えても変わらんだろうしな」

「身分ある御方が口にすることではありませんね。竜公は侯爵待遇とお聞きしましたが？」

「ああ。そして知っているとおり俺は竜公になりたてでまだ心得ができていなくてな。――暗殺者に皇子の動向を漏らしたか」

「随従の方にお話はしましたよ。私ひとりの問題ではございませんので」

そう言いながらナシルはいずこから漏れたかと考えていた。王宮に留まっている者たちの中にはいち早く自分を売って保身を図る輩もいるだろう。

それらを恨みに思う気持ちはない。人を蹴落として這い上がるそういう世界で抜きんでるために知恵を絞る。かくいう自分もおなじだ。

（――そう、まだ終わっていない）

「主を裏切っておまえはなにを望む？」
「裏切ったつもりはありません。私は祖国を守りたい、ただそれだけです。以前もお話しいたしましたが、閣下の真の祖国がいまどのような状況にあるか、お考えになったことはありませんか」
「くどい。俺の祖国はローレンシアただ一国だ」
「私とて生まれも育ちもアズィールです。が、この血に宿る記憶としがらみが帝国しか知らぬはずの自分に絡みつくのです。――私の母は東国の生まれ、〈スメラギ〉に縁の者です」
「なに……？」
「閣下は十八におなりだそうですね。その年に東国でなにがあったかご存知ですか？　我が皇帝は帝位に就かれる前に東国遠征をいたしました。その際にアズィールに連れ去られた者のひとりが私の母です。たしかにかの地は私自身の祖国ではありません。ですが自分の源の地であるその国を見知らぬ国だと切り捨てられますか？　古き国の倣いに従えば、私はあなたをこうお呼びすべきなのでしょうね。――我が君、と」
「……戯れ言ならばあとでゆっくり聞く」
スメラギは息ひとつ揺らすことなくそう答えた。己の出自を知らぬのは本当らしい。
そしてその事実に安堵するとともに、かすかな苛立ちを覚えた。
尋問は穏やかなものではないだろう。だがそう長くもないだろうと読む。――そう、自分に

関わっていられるのも今晩だけだ。
（せいぜい瑣末事に時を費やしていただきましょう）
捜査の目が死体となった暗殺者に向く。その時を稼いだだけでも彼らの死は無駄ではない。
だがそんなナシルの思惟を裂いて、「隊長！」と息せききって走ってくる者がいた。
深紅のドレス、あの娘は――
「隊長、皇子を連れてエルヴァ砦へ翔んでください！　今すぐに!!」
（……いま、なんと……？）
その者の意図を確認する前に首筋に回されていた腕に絞められ、ナシルの意識は遠ざかっていった。

（――えっ!?）
ルーシェの眼前でナシルの目が驚きに見開かれたのも一瞬、ナシルはすぐさま意識を失いスメラギの腕の中でくずれ落ちた。
「なにをしたんですか隊長!?　というかなにをしてたんですか!?」
スメラギの手にあるのは抜き身の短剣だ。だがスメラギはナシルの息だけ確認して、身体をそのまま石畳に転がした。
「ただの脅しだ、気にするな」

「ただの脅しって……それってまた始末書ものなんじゃ……」
「事をし損じて書かされるよりよほどいい。それでエルヴァまで翔べというのはなんなんだ」
「あっ、はい！　帝国の本当の狙いは暗殺じゃありません！　ローレンシアとの戦なんです！」
「なに!?」
ルーシェがアシュアとの会話を説明するとスメラギの表情が険しさを増した。
「おそらく皇子の誕生日に決行するつもりで前線の兵を動かしているんだと思います！」
ローレンシアとの全面戦争ならば十万近くの兵が動く。前線が異状を知らせてきたのは無理もないし、結果的に黒竜隊を先行させたのは正しかった。
「皇子の誕生日は明日、狙っていたのはおそらく晩餐会です。あと丸一日ありませんが皇子とわたしを連れてエルヴァに翔んでください！」
エルヴァ砦まで普通に翔べば二日かかる。丸一日となると急使並みの早さだがデュラクなら翔べるはずだ。
「単騎で三人はきついな――俺の部屋にカイトがいるから呼んでこい。俺は奴に事情を説明してくる」
シリスも頼めば翔んでくれるだろうが王宮側を采配する者も必要だ。女王に直接目通りできるシリスでなければままならないこともある。なによりスメラギの指名なのだからカイトの竜

も一日で国境まで翔べるのだろう。
ルーシェがスメラギに与えられた部屋に駆けてゆくと、カイトは書類の片づけをしていた。
ドレス姿で駆けこんできたルーシェにカイトは目を剝いたが、事情を聞くなり竜舎へ走った。
つづいてルーシェは神殿にアシュアを迎えにゆく。アシュアとともに露台へ出るとカイトは自身の竜に騎乗し、デュラクの鞍も持ってきていた。カイトの竜はデュラクより一回りは小柄でやや細長の体型、たしかに急使向きだ。
最後に現れたスメラギは、話す時間も惜しいのか報告がてらシリスも連れてきた。
「カイト、皇子を乗せて先行しろ！」
「皇子、この者は信頼できます。私もすぐに後を追いますから」
はい！　と答えてアシュアはカイトに連れられて翔び立つ。
スメラギはデュラクを召喚し、カイトの置いていった鞍を載せる。
「おまえはそいつを神殿に預けてこい。追ってきたら迷子になる」
「あっ、あの、この子も連れて行きたいんですけど！」
ルーも成体になれば一頭の竜、前線でなにか役に立つかもしれない。
ルーをぎゅっと抱きしめて見上げるとスメラギは凝視していたが、やがてぽつりと漏らした。
「――簀巻きにして運ぶか」
「ちゃんとおとなしくしてますってば……!!」

スメラギはしかたないと息をつくと、ルーを抱えるルーシェごとマントで包みこんだ。
「気をつけろよ。落っことしても拾いに戻ってやる時間はないからな」
「大丈夫です！　絶対に離しません！」
「君もその子を落とすんじゃないよ」
そう茶々を入れたのはシリスだ。もう今日は業務終了のはずだったのに、とこぼすシリスはすでに制服姿ですらない。部屋でくつろいでいたところを引っ張り出されたらしい。
「君たちのことは急使を立てて知らせておく。相乗りの君たちより先にエルヴァに着くよ。そしてこっちのことは心配しなくていい。事情はちゃーんと聞き出しておくから」
賢い子の相手をするのは好きなんだよね。
そう告げたシリスの笑みはいつになく嬉しそうで、反射的にルーシェの頬が凍りついた。
（な、なに？　いますっごく怖いものを見た気がするんだけど……）
混乱するルーシェをよそに、シリスはマントに巻かれたルーシェの髪を一房とって、優しく口づけた。
「どこにいようと君は王女だ。それを忘れないで」
シリスの涼やかな瞳が、灯火に照らされて深みを帯びる。
――くれぐれも無茶をしないように。
これはシエラへの言葉だ。そう汲みとってルーシェは「はい！」と返し、漆黒の闇へと翔び

立った。

第7章

暁の向こうに

デュラクに横乗りして、髪まですっぽり覆われたマントの上からスメラギが握る手綱に手を添える。

厚いマント越しにごうごうと聞こえる風のうなり声、月明かりがあるとはいえ見えるのはスメラギの顔くらいだ。

（眼鏡かけてる……）

闇の先を真剣に見つめる姿に見入っていると、ふとスメラギが視線を落とした。

「――なにバカ面さらしてるんだ」

「ばっ、バカ面ってなんですか！」

「あきらかにさっきまでと顔つきがちがうぞ。王女でいられるのは時間限定か？」

「そんなことないですよ！　けど隊長の前でかっこつけてどうするんですか！」

それもそうだな、とスメラギはあっさり引いた。

「寝られそうなら今のうちに寝ておけ。陽が昇ってから寝るのはきついぞ」

「隊長の前で寝るわけには！」

「聖殿でくーすか寝ていた奴の言えたことか」

（あ、そういえば……）

聖殿で遭難したとき、寝顔どころでなくあれやこれや見られている。今さら恥ずかしがることでもない。

（でもバカ面ってひどくない？　一応これでも化粧しているのに……）

ルーシェが落ち込んでいると、ふたたび前を向いたスメラギがぽつりと言葉を落とした。

「……正直、おまえを見れば見るほどわからなくなる」

「え？」

「見るたびにちがう表情を見せるからな」

そうこぼした真意を追及できないまま会話は途切れ、スメラギのぬくもりとルーの寝息に引きずり込まれるように眠りに落ちた。

次に目覚めたのは夜が明けてから、陽が昇りきったころに降りた砦でカイトとアシュアが待っていた。聞けばエルヴァ砦を往復するときに宿所にしている砦らしい。

砦に詰める隊員に混じって食事をとり、体をほぐしてすぐさまデュラクに乗る。昼の空は眩しいくらいで、スメラギは眼鏡をはずして一路エルヴァ砦へと向かった。

眼下に松明の灯りが見えたのは陽が落ちた後、すでに夜半を過ぎていた。

物見が気づき、急使の報せを受けていた黒竜隊員たちが露台で出迎える。松明の下、敬礼する隊員たちを前にデュラクは降下し、そしてスメラギに抱えられてルーシェが石畳に降り立つ

と、隊員たちの視線が一斉に注がれた。

見たことのない騎士たちの中に王都勤めの隊員の姿もあったが、誰だこれ？　とあからさまに顔に書いてある。

マントを取って深紅のドレス姿が露わになると息を呑む音すら聞こえた気がしたが、その胸に抱いた赤竜を見てやっと気づいたらしく、「ああ！」と声があがった。従者のルーシェを知らないエルヴァ駐在組は事情を呑み込めずにいたが、「こんな恰好だが気にしなくていい」とスメラギは流した。

次いでカイトの黒竜が降下してくる。抱えられていた少年の姿を見るなり隊員は一斉に膝をついた。王族に対する礼だ。アシュアはあとから降下してきたおかげもあって、騎士が王女に跪いていないことを不審に思わなかったようだ。

「とりあえず夜明けまでしばらく時間がある。湯でも使って身体をほぐしてこい」

アシュアを部屋に通したあと、ルーシェも貴賓室に通された。

浴室を覗くと、河の近くということもあって水に不自由していないのだろう。王宮と変わらないくらいの広さがあった。

（そういえばシリスだって来るんだものね……）

金細工の竜の口から惜しみなく流れ出る湯に浸かりながら、丸一日竜に乗って凝り固まった身体をほぐす。徐々に身体がとろけてゆくのを感じながらルーと一緒に長風呂をもらい、疲れ

と汚れをさっぱり洗い流して浴室を出る。
着替えはシリスが気を利かせて後発の急使に持たせていてくれた。見覚えのある衣装袋、その中には竜騎士団の隊服が詰まっているはずだ。
砦にいるのだから他の竜騎士とおなじ恰好でちょうど良かった——と袋を開けたところで、ルーシェは思わず目を疑った。
（ええ!?）
中にあったのはたしかに隊服、見覚えのある意匠だが、その色がちがっている。
隊服は通常、黒に金の縁取りがされている。だが白に銀の縁取りをしたこの服は。
（シリスとおなじ色……？）
——どこにいようと君は王女だ。
出がけに告げられた言葉が脳裏にこだまする。
（覚悟を決めろって……そういうこと？）
ルーシェはかすかに瞑目すると、白の隊服に手を伸ばした。
大きさは黒の隊服を作るときに採寸したそのままに作られたらしく、ルーシェの身体にぴったり合った。長い銀の髪は下ろしたまま、白の隊服の背をさらりと流れる。
「ルーはお留守番しているのよ。絶対に付いてきちゃダメだからね？」
ほこほこと湯気を立ててご満悦でタオルの上に寝そべっていたルーだが、ルーシェの言葉に

むくりと起きあがった。そして指定席と言わんばかりに肩によじ登ろうとする。

だがルーシェは「ダメ」とルーを引き離すと、またタオルの上に置き直した。どうしてダメなの？　とルーが小首を傾げる。

「ごめんね、ルーは今日はお留守番なの。あぶないから」

戦がはじまればそうも言っていられないが、今はまだ様子見だ。

しかし言葉がわかっているのかルーは羽を広げて露台に翔んでいき、身体が光に包まれたかと思うと次の瞬間には成体に変身していた。

体こそ大きくなったが、ルーは変わらない人なつっこいつぶらな瞳を向けて、この姿ならあぶなくないでしょ？　と言わんばかりに口を開け、立派な牙を見せつける。

「でもすくなくとも二時はこの恰好でいないといけないのよ。大丈夫？」

叙爵のときは一時ともたなかった上に、今日は翔ばなければいけない。

しかしルーはうなずくように首を上下させた。

（――そう、あんな小さなアシュア皇子も現実と向き合っているんだものね）

王都から一日で翔んでくるという強行軍にも、アシュアは人前で疲れた様子は見せなかった。周囲に随従の者がひとりもいない、祖国に裏切られたかもしれない状況下でもアシュアは立派に皇子だった。

（私もしっかりしなきゃ）

ルーシェは意を決すると、一旦ルーを幼体に戻して、乾かした髪を下ろしたままスメラギの部屋に向かった。

スメラギは白隊服姿のルーシェを見るなり言葉をなくしたが、後発のシリスの急使が届けたものだと気づいたらしく、「あいつも手の込んだことを……」と苦々しい顔をし、なにかを追いだすように頭を振った。

「帝国の動きはどうですか」

「砦の衛兵の数は変わらない。だがあきらかに煙の量が変わっているそうだ」

煙――食事を作るときに必ず出るものだ。兵は暗闇に乗じて砦の中に入れることは可能だが、招き入れた者には食事を出さなければいけない。おのずと料理の煙の量が増える。

「帝国の商船もここ数日減っている。ローレンシアまで売りに来る必要がないこともあるだろうが、戦端が開かれるのを懸念しているんだろう」

「では……」

「戦の準備をしているのは固いな。まあ戦でなくとも皇子が戻らなかったときのことを考えて兵を備えておくのは定石だろうがな。それも実際に翔んでみればわかることだ」

帝国がいかに秘密裏に事を進めていようと、〈空の目〉を欺くことはできない。

「俺が皇子を連れて翔ぶ。おまえはそんな恰好で出張ってこなくていい。ここでおとなしく待っていろ」

「……いいえ」

ルーシェはルーを肩に乗せたまま露台に出る。ルーに呼びかけると心得たようにルーは成体に変化した。

「これが今のルーの姿――私が皇子とともに翔びます」

夜明けの光が空を満たしはじめ、河が徐々にその姿を明らかにする。

(すごい、広い……)

川面を渡る風に銀の髪をなびかせながら、ルーシェは初めて見るレーヌ河に目を奪われた。向こう岸まではどれほどの距離か、船で一時は優にかかりそうだが、竜の翼ならば一翔びにすぎない。

(そう、このルーの翼があれば)

成体のルーの背にまたがったルーシェは、手綱を握る手に力を込めた。

『――私が皇子とともに翔びます』

そう告げたときスメラギはルーの姿に驚きを隠せずにいたが、危険だ、とすぐさま反対した。

『そんな恰好で出てみろ！　的にしてくれと公言しているようなものだぞ!?　そんな危険なこ

とをさせられるか!!』

『ここで食い止められなければ戦になるんです!!　そうなれば危険じゃない場所なんてローレンシアのどこにもありません！　それにこれがわたしの務めだと思っていますから！』

スメラギはしばし熟考していたがやがて苛立たしげに息をつき、『俺が護衛に付く。それだけは譲れん』と言った。ルーで出ることは認めるが単騎では行かせない、そういうことだ。

他の話は後だ――そう言って会話は打ち切られた。

（他の話って一体なに……？）

「シエラ殿下？」

前に座るアシュアに問いかけられて、ルーシェははっと我に返った。

――空の上で気を抜くとは何事だ！

すぐ近く、斜め後ろを翔んでいるスメラギの思念が飛んできた気がする。

（ううん、今は思い悩んでいるときじゃない）

河の半ばを渡ったところで、ルーシェはあらかじめ言われていたようにルーの首をもたげた。国同士で定めたわけではないが、河の中心が帝国領とローレンシア領の境となっている。それを越えるときは射られても届かないよう高度を上げておかなければ危険だ。

ルーが上昇すると、視界がぐんと広がった。真正面に見えていた帝国の砦を見下ろす形となり、その展開している船の姿もよく見える。

だが砦の前に整然と並ぶ船に、アシュアの表情が険しくなった。
「覚悟――しなければならないかもしれません」
「え？」
「並んでいるのは軍船です。僕がいるときにはなかったものです」
つまりアシュアがローレンシアに発ってから集められたものだということだ。
スメラギも軍船が増えていることに気づいたのだろう。警告しにデュラクを寄せてきたが、ルーシェは手綱を握る手に力を込めてアシュアの耳元で告げた。
「――アシュア殿下、参ります」

第三皇子アシュアがローレンシア訪問中に命を落とした――
そう上官から報されたとき、男の周囲にいたある者は驚き、ある者は泣き崩れ、そしてある者は口端に笑みを浮かべていた。ひとりは帝国の属領の民、ひとりはフェルトゥナ人、最後のひとりは生粋のアズィール人だ。
帝国軍は併合された国々による混成部隊だ。第三皇子の母はフェルトゥナの元女王、フェルトゥナ出身の者には神にも近しい存在で、その血を受け継ぐアシュア皇子もおなじように崇めている。
対して第二皇子の母は生粋のアズィール人だ。有力貴族の娘で、帝位を継ぐのは純粋なアズ



ィールの血を引く我が子と信じている。現に軍の上層部はアズィール人に占められ、この砦に赴任中の第二皇子は一軍の将にすぎないのにもはや全軍を束ねている気でいた。

そこに飛び込んできたのが第三皇子の訃報だ。訃報に対して笑うというのは不謹慎この上ないが、アズィールはかつて兄弟で殺しあって帝位を争ったという。その相手が手を下すまでもなくいなくなったのだから、上官の想いがうつったと思えば納得できる。

だが、弟の弔い合戦だ、そう言われたとき三者ともおなじように鬨の声をあげた。

ローレンシアは、ある者には竜の力で自国だけ生き長らえているずるい国であり、ある者には第三皇子の仇であり、またある者には十年前に攻めそびれた因縁の国だった。

男の祖国は十年前はまだ帝国領ではなかったので、ローレンシアとの戦いがどういうものだったのかは知らない。ただいつものように命じられるままに攻め入る、それだけのはずだった。

――だが男の人生で初めて、眼前にいつもどおりではない光景が広がった。

ルーシェはルーの高度を保ったまま軍船上空まで進めたとき、船の物見がこちらをみて凍りついたことに気がついた。

驚いたのはこの河の上では見慣れた赤竜の姿にではない。銀系の髪の乙女と共に、その竜の背にもはやこの世にいるはずのない、金の瞳を継ぐ少年の姿を見たからだ。

「誰の許しを得て軍を集めた！」

アシュアの一喝に、船上にいた航海士や水夫たちが一斉に空を見上げた。
まだ空が眩しくて仰げないような時間帯ではない。夜の名残の群青色の空に赤竜の体軀が曙光に照って、竜の背にまたがるアシュアの姿がはっきりと見えたことだろう。
「私がローレンシア訪問中と知っての暴挙か!?」
船の上にみるみる動揺が広がってゆく。――そしてその様子から、アシュア暗殺から開戦までの読みが正しかったことを確信した。
甲板上に両手をついているのはフェルトゥナ人だろうか。生きていた皇子の姿に呆然とし、涙を流さんばかりだ。
「このローレンシア訪問は皇帝陛下の意を受けてなったものだ！　それを損なわんとする者は陛下の御意に背くものと心得よ!!」
「射よ！」
なんの理由も付されず指揮官の命が下された。あきらかに動揺が広がる中でその命に従った弓兵は半分にも満たなかったが、それでも数十本の矢がルーに向かって射かけられた。
スメラギがデュラクで急旋回して風を切り、矢羽根の流れを変えたが、それでも迫ってきたものもある。だがその矢もルーの炎の息に燃やされ、あえなく河へと落ちた。
「皇子たる我に弓引いたる者、そなたらは帝国に弓を引いたもおなじだ。帝国第三皇子アル・アシュア・アゼル・ハシャン・アズィールの名において命じる！　その者らを捕らえよ!!」

アシュアの命に従い弓を手にしていなかった者たちが、帝国兵を押さえにかかる。甲板の上はさながら戦場の体だったが、ローレンシア側は一騎の介入もすることなく事態は終息した。

「私はローレンシア滞在を終えて、数日中にアズィールに戻る。それまでに事を詳らかにしておくように。そして帝国第三皇子の名において命じる。兵をただちに退け……!!」

エルヴァ砦に戻ると、ルーから降りたアシュアはすこし不安そうにルーシェに問うた。

「……僕、ちゃんと言えてました?」

「それはもう。見習わせていただきたいほどしっかりしていらっしゃいましたよ」

アズィール語にそれほど堪能ではないルーシェにもアシュアの言葉は明確に聞こえた。さまざまな国の出身者の多いアズィールのこと、誰にでもわかる発音で伝えられることはアシュアにとって強みであるはずだ。

(それに皇子が姿を見せただけで流れが変わった――)

自分の一挙手一投足を注意深く観察される空気は、竜公叙爵のときの貴族たちの目でよくわかった。

多くの人たちの目にさらされながら、堂々とした態度でその者たちを従える。それが王族の力だ。皇子としてのあの威厳は見習わなければならないと思った。

「ローレンシアとの戦を回避してくださったこと、アシュア殿下に感謝いたします」
そうルーシェが一礼すると、アシュアもまた頭を下げた。
「いえ、お礼を申し上げるのはこちらのほうです。これもシエラ殿下が僕の話を聞いてくださったおかげです」
「これからも帝国とは親しくおつきあいして、よりよい関係を築ければと願っております」
「はい。とりあえずこれで僕がここにいる間はもう攻めてくることはないと思います。帰ってから問題山積ですけどね」
「それとアシュア殿下、一日遅くなりましたが――お誕生日、おめでとうございます」
そう告げるとアシュアは一瞬目を見開き、そして照れたようにはにかむと、「ありがとうございます」と幼い頬から笑みがこぼれ落ちた。

帝国側はすぐさま、アシュアの訃報という偽情報に踊らされたことを弁解してきた。
帝国は本当ならアシュアの安否不明の状態のまま開戦に持ち込む算段だったのだろうが、ローレンシア王都にいるはずのアシュアが無事な姿を見せたことでその計画は潰え、軍の統制が取れなくなってやむなく戦を回避するに至ったのだろう。
ローレンシアは偽情報の出所を追及するよう要請したが、うやむやに終わるにちがいない。

ただ、今の帝国に戦う意思はない——それを確認できただけで良しとすべきだ。

帝国から弁明に訪れる使者にルーシェは王女として謁見を許し、スメラギは政治的権力を持つ竜公として対処していった。もちろん逐一王都に向けて急使が翔んでいる。帝国が失態を認めたことで、この失態に対する対価はシリスが適当な落としどころを見つけてくれることだろう。

スメラギは竜公としての仕事が山積みで、ようやく時間が取れたのは丸一日が経ってから、もう夜が明けようとする時間帯、朝日の前触れに空が紺青色に染まりはじめた頃だった。

露台に出ると、スメラギは「もうこんな時間か」といま気づいたように漏らした。

ルーシェは隙を見つけながら仮眠を取り、ルーは成体姿に疲れたのか戻ってからずっと寝台で眠っているが、スメラギはこれで丸二日寝ていない。

話なんてゆっくり休んだ後でいいのにと思ったがスメラギは律儀に守った。スメラギを休ませるには、さっさと話を切り上げるしかない。

「昨日はご無理言ってすみませんでした。おかげで難局を乗り切れました」

「あの状態からよく流れを引き寄せたな」

「流れ？」

「戦になってもおかしくない状況からひっくり返した。戦を回避できたのはおまえのおかげだ」

居並ぶ軍船に怯んで近づけずにいたなら、アシュアが皇子として拙い素振りを見せたなら、ルーが竜としての力を見せつけなかったら――他にもいろいろあるが、それらすべてが噛み合って人の心を――流れを変えた。

「すべては皇子の威厳がなされたことです。わたしはなにも……」

「その皇子をここまで連れてきたのはおまえだ。皇子の暗殺事件からこの事態をよく読んだな。――いや、その前からか。神託に乗りこんで来たときはなにを考えてるんだと思ったが」

国を守りたかった。竜を守りたかった。それ以上にどうしても隊長にあんなことをさせたくなかった。

もしアシュアが竜を授かっていたなら、王女として竜殺しを認めなければいけない状況だった。けれどもスメラギにかぎらず誰かの命を犠牲にして成り立つ世界は嫌だと思ったから、王女として動くことができた。

「それに皇子の神託を認めたときもそうだ。あれは俺をかばったな？」

「それは……」

「俺は自分の進退くらい自分で決める。見くびるな」

「！」

かばわなくてもよかった、余計なお世話だと言外に告げられて、ルーシェはかっと血がのぼった。

「だって放っておいたら隊長は勝手にひとりでいなくなっちゃうじゃないですか……！」

自分の出生や責務を背負いこみ、自身を傷つけながら進んでいく。始末書が多いのもその表れだ。

与えられた権限をめいっぱい使って、あとは自分がすべて負えばいいと思っているから、いくらでも自分を傷つける。そして命を張ることも躊躇わない。

「わたしは隊長がいなくなるのは嫌です！」

「俺がいなくなってもすぐに後任が来る」

「わたしは隊長以外の隊長は嫌なんです！」

するとスメラギははっと目を開き、ついで「おまえはなんでそういうことを臆面もなく…」と視線を逸らした。

「何度だって言います。隊長がわかってくれるまで」

「いや、言いたいことはわかっている。ただ人の誤解を受けるような言い方をするんじゃない」

「誤解、じゃないです」

「なに？」

この人を失いたくないと思った。誰であっても失いたくないのはおなじだが、スメラギだけはどこかがちがった。

（黒竜公だから？　父様の跡を継いだ人だから？）

それもないわけではないが、どれもちがうと心が告げている。

「誤解じゃ、ないですから」

沈黙が落ちる。河が流れる音だけがそこにあって、暁の光を受けはじめた水面が視界の隅を刺激した。

――こうして真っ直ぐスメラギを見て意見するなど、騎士団にいたときは考えられないことだった。しかし王宮で何度も衝突してわかったことがある。

この人は隊長として尊敬できる人だ。けれど、この人の言うことなら正しいと唯々諾々と従っていたら、今回の竜殺しのように勝手に知らないところで責任を取って勝手にいなくなってしまう。それは黒竜隊隊長という任を預かっている責任感もあるだろう。けれどもなによりも、黒竜隊隊長としての存在以外スメラギにはないからだ。

スメラギには他の人にはあたり前のようにいてくれる人――行かないでと言ってくれる人がいない。

（だからちゃんと伝えておかなきゃ）

「隊長が、いなくなるのは嫌です」

「――まちがってもそれを隊員たちの前で口にするなよ」

「誤解されたら困りますか」

「俺はかまわない。だが」
誤解されて困るのはそっちだろう、と前置きしてスメラギはルーシェを見つめた。
「俺は王宮の招かれざる客だ。おまえはあの場所で生きてゆくんだろう？」
「え……？」
ルーシェは混乱した。
（……もう本当の王女だってばれてる……？）
スメラギの前でさんざん王女としてふるまってきたのだ。気づかれるきっかけはいくつもあったと思うが。
（いったいいつ気づいたの!?）
大きくなったルーを見たからか。いや、スメラギは王女の顔を見ていなかったくらいだから、その背後にいたルーなどさらに見えていないだろう。叙爵の際、シエラが下がるときにルーも一緒に下がった。その後ろ姿を見た可能性はあるが、後ろ姿だけでは赤竜だということくらいしかわからなかったと思うのだが――
（人はともかく竜を見分ける目が半端じゃないとか？）
いずれにしろ身分は知れた。次になにを言われるのだろう――
食い入るように見つめていると、ざっと吹いた川風に銀の髪が揺れた。
「おまえはあいつから預かっているだけで、おまえの本来の居場所は黒竜隊じゃない」

その一言が胸を突く。
「おまえのいるべき場所は王宮なんじゃないのか」
「わたし、は……」
たしかに自分はいずれ王宮に戻る身だ。
黒竜隊で過ごした日々を思い返してみるとまだ三ヶ月――なのにどれだけ多くのことを教わったか。おそらく今までの生涯分くらい叱られたし、学ぶこともまだたくさんある。
本格的に王宮での仕事がはじまるまであと一月足らず、それでもあと一ヶ月――ルーシェでいられるなら。
「わたしはここにいたい……です」
それが正直な想いだ。
「隊長の部下でいさせてください」
深々と一礼すると、ふっと息がこぼれるのが聞こえた。
「――なんだ。部下でいいのか」
「え!?　いえ、そのっ、ええ……っ!?」
どこか言葉を誤った気がしたが、前言撤回するわけにはいかないし、じゃあなにになりたいんだと言われてもそれ以上なにも言えない。
「……部下で、いいです」

「いいですとはなんだ、いいですとは」
そう叱って、「だが」とスメラギは息をついた。
「今回、おまえにケンカを売ると怖いことがよくわかった」
「えっ、なんですかそれ!?」
「散々俺にケンカを売り返してきたのはどこのどいつだ。普段のおまえはあの小さいのみたいにぷにぷにしているくせに、王女のときは顔つきが変わる。良家のお嬢様はそんなこともできるのか？」
大したものだとスメラギは感心しているが、どこか話の雲行きがおかしい。
「そういやあのぷにぷにはいつ大きくなれるようになったんだ」
「あ、えっと、聖殿に行ったときになにか目覚めたみたいで、ずっとというわけじゃなくて時間限定で大きくなれるようになったんです」
「時間限定？　それまた変わった育ち方をしたものだな。まぁおまえの王女の代役も時間限定だし似たもの同士か」
（え!?　代役じゃなくて本人なんですけど!?）
「だがあの大きさならもう社交界に出ても問題ないな」
（もう一応出たんですけど!?）
社交界に顔見せする前に間に合ってよかったな——そこまで言われてルーシェは確信した。

（やっぱり王女だって気づいてない……!?）

いやいやそんなことはないはずだ。でなければ先ほどの王宮云々の話はなんだったのか。

（……まさか良家の娘だからパーティーの開かれる王宮で生きるのが当然とかそういうこと……？）

せっかく一世一代の覚悟をしたのに、やっぱり伝わってなかった――ルーシェは思わず石畳にへたりこんだ。

「どうした。寝不足か？」

「……いえ、いろいろ疲れが……」

（どうして？　わたしの説明がよくなかった？　でもちゃんとシリスやアシュア皇子には伝わっていたわよね？　なんで隊長には伝わらないの？）

だがその理由はわかっている。――自分がいまの関係に甘えているからだ。

シエラでいるときはなんでもはっきり言うが、ルーシェでいるときは伝えなくても部下として無条件に守ってくれる。そうわかっているからその優しさに甘えてしまう。

（だって隊長、絶対に部下の方が大事で、恋人なんて仕事のあと回しだろうし……）

不意に浮かんだその単語に、ルーシェの顔が火照った。

（こ、恋人って、なに考えてるのわたし!?）

だが、あのときのスメラギは部下でいいのかと息をついた。

（まさか、望めば他のものになれ……た……？　――まさかまさかまさか!!）

妄想が暴走してますます顔を上げられなくなったルーシェを、スメラギは「しかたない奴だな」と抱きあげた。

「このまま寝台までお連れしましょうか、王女殿下？」

「――――!?」

覗き込む目にルーシェは息を飲んだが、あぁおまえはお姫様じゃなくてお嬢様だったか、とつづくあたりに冗談の色が見え隠れしている。

ルーシェはなんとか下ろしてもらい、荒れた息を整える。この冗談はいろいろ心臓に悪すぎる。

「とりあえず一眠りしてこい。俺も休む。ここ数日おまえに振り回されっぱなしだったからな。さすがに疲れた」

（振り回されて疲れたのはこっちのほうなんですけど!?）

「そんなに迷惑ならさくっと返品してもらっていいですよ!?」

憎まれ口ならさらりと出てくるのは本当の心に触れられるのが怖いからだ。

くすぐったくて直視できない想いが自分の心の中にどっしり居座っていることはもうわかっている。

いまもスメラギの顔をまともに見られず、うつむき気味に視線を逸らしていると、



「迷惑？　べつに今さらだろうが」と身も蓋もない言葉が返ってきた。
（うう、やっぱり迷惑なんだ……）
またへこみそうになってさらにうつむいたルーシェに、その言葉は不意に降ってきた。
「――だがおまえならかまわない」
「え？」
思わず見上げかけたルーシェの頭に、手のひらが載せられる。
「いくらでも振り回されてやる。――よく頑張ったな」
その一言に、泣きそうになった。

翌日、王都に残っていた訪問団を連れてシリスがエルヴァ砦にやってきた。
彼らは縄を打たれた者と打たれていない者に分かれていたが、打たれていない者の中にナシルの姿もあった。
「え、彼は無罪だったんですか？」
ナシルになんの咎もなかったとしたら、短剣で脅して意識を奪ったスメラギの罪は重い。
「まぁ政治的判断でね。白か黒かといわれれば限りなく黒なんだけど、政治的取引き込みで釈

放。今後の彼をどう使うかは帝国次第といったところかな」
「政治的取引きって？」
「うん？　まぁいろいろとね。それはまた後でのお楽しみ。使える人材は使った方がいいし、こっちをさんざん引っ掻きまわしてくれたんだから騒乱の火種はちゃんと送り返してあげないとね」
そう告げるシリスはいつもどおり穏やかな笑みを浮かべていたが、ルーシェには不吉な微笑みにしか見えなかった。
（悪魔が……悪魔がここにいる……!!）
だがアシュアはさも当然のようにナシルに自分の傍らにあることを許した。ナシルが自分に忠誠を誓って生きているわけではないことをすでに知っていたかのように。
帝位を継ぐということはそれぞれの皇子に付いている勢力を自分の支配下に置くということだ。アシュアはこれから、ナシルのように自分に絶対的な忠誠を誓っているわけではない相手をも呑みこんでゆかねばならない。
「――この青い河に白の矢羽根と紅の血が流れることがないよう尽くします」
別れの挨拶を交わし、アシュアたちはレーヌ河の向こうへと帰っていった。
そしてルーシェたちもエルヴァ砦から飛翔すると、ルーシェはスメラギの前でデュラクにまたがりながら、向こう岸を見つめた。

高度をあげるにつれ帝国領がよく見渡せる。こうして見ると対岸にある帝国の砦などほんのすこしの距離だ。けれども河の上には見えない国境線があってアシュアに次に会えるのはいつのことだろう。近いうちに帝国から謝罪の使者が王都に来るというが、その任は別の者が務めるはずだ。

（あの幼い皇子はあそこで戦いつづけるのね）

アシュア皇子は、シエラにとって母でも従兄でもない初めての王族だった。彼を見て、話して、得られたものは多い。

（――さあ、私も王都に帰らなきゃ）

私もがんばるからね。その呟きを風に乗せて、ルーシェはローレンシアの王都へと視線を向けた。

終章

それぞれの認識

エルヴァに一時的に行っていた王都駐留軍も砦に戻り、黒竜隊はいつもの日常を取りもどした――かのように見えたが、カイトにはどうしても違和感がぬぐい去れなかった。

（やっぱりなにかおかしい……）

ルーシェが銀灰色の髪を振りまわして駆けまわっているのはいつものことだし、そんな彼女に隊長の雷が落ちてウサ耳がしょげているのもいつものことだ。

だが、なにかがちがう――根拠はないが、隊長とルーシェの距離が近い気がする。

（……そういえば隊長はルーシェに訊いたのか？）

思い出すのは数日前、スメラギにルーシェの正体を示唆したときのことだ。

ルーシェが王女本人なのではないか――そう告げた直後、スメラギは一瞬驚きに言葉を失くしたが、やがて「そういうことか」と告げ、あろうことか苦笑を漏らした。

「た、隊長？」

あまりの衝撃的事実にスメラギが壊れたかと思ったほどだ。だが、スメラギはあくまで正気だった。

「シリスになにか吹き込まれたんだろう」
「い、いえ、そのようなことはないですが」
それどころか逆に口止めされたが、口止め自体もおそらく一級機密事項だ。
カイトが慎重に言葉を選んでいるとスメラギは、聞いた直後の驚きようが嘘であるかのようにすっきりした顔で言った。
「その手の話なら、俺も一回ひっかけられた」
「そうなんですか⁉」
「ああ。ルーシェを預かる前にあいつが言っていたんだ。今度姫を預けるからとな。それでどこのなじみの店の姫だと聞き返してやったら、ローレンシアという国の深窓の姫君だとぬかしやがった」
（……それって本当のことなんじゃないのか？）
「それでどんな姫が来るかと思いきや、来たのはあいつだ。あれが深窓の姫君に見えるか？」
「……どこぞの裏山で拾ってきた耳垂れウサギに見えますが」
「だろう。おまえは免疫がないかもしれんが奴の話に真っ当につきあっていたらとことん遊ばれるぞ。副官になったら話半分に聞き流す術を身につけろ」
たしかにあの団長のことだ。スメラギに次いで自分まで遊び相手に認定されてしまったのではと肝が冷えたが、

「し、しかし、万が一団長がおっしゃることが本当なら……」
すると、まだ食い下がるのか？　とスメラギは目をすがめて問うた。
「では仮にだ、あいつが王女だったらどうだというんだ？」
「えっ、それは……」
「竜に選ばれし者は出自を問わない、それが竜騎士団だろう。そしてあいつが連れているのが赤いのだろうが黒いのだろうが預かったからは俺の部下だ。それ以上になにがある？」
まぁそれ以上も以下もあいつもいろいろ事情はあるようだが、言いたいことがあるなら自分で言ってくるだろう。
その一言を最後に、その会話は打ち切られた。
スメラギにとってルーシェが王女であるかどうかは些細な問題らしい。
（いや、学舎を出ていてそれはないか。本当に疑っていないということか？　……たしかに、団長の従妹っていっても殿下だけじゃないんだよな）
そう思ってあの日、書庫で貴族年鑑を引っ張りだして目を皿のようにして調べたところ、シリウスの父方の従妹は王女シエラただひとりだが、母方のリヴェア家ともなると両手で足りないほどいた。
そしてその中でもルーシェと名のつく娘は三人。
ルーシェというのは太陽神アルシェスの双子の妹、暁の女神アルシェイラの愛称だ。王女の

名もまた暁の女神にちなんだアーシェラータだが、暁の女神の加護の日に生まれた娘には大抵この名がつけられる。なにも珍しいことではない。

（やっぱり団長にからかわれただけなのか？　いや、しかしそれだとあいつと陛下が似ていた理由がつかないんだが……）

「カイト、どうしたの？」

不意を突いて覗きこんできた顔に、「うわっ」とカイトは思わず一歩引いた。

「なんなのよ、失礼ね！」

書類を抱えたルーシェは、化粧気のないくりくりとした目で睨みつけてくる。

（蒼の瞳……）

それは晴れた日の空の色――シリスとまったく同じ色だ。髪も混じりけのある銀灰色を純銀に染めるのは難しいが、その逆なら簡単にできる。

なにより髪を下ろしていたときの顔立ち。女王と血縁関係があることはふたり並べば明らかだ。赤の他人のはずがない。

（こいつ、やっぱり王女なのか？）

そう考えた方が得心がいくことが多い。――しかし。

ルーシェはたしかに王女かもしれない。だが黒竜隊にいる間は部下のひとり、それが隊長の判断だ。ならば黒竜隊にいる間は同僚として扱うのが正しいのだろう。

ただし王女と考えると言葉を交わすことすら無礼にあたる。心苦しいのはたしかだが、きっと心の鍛錬を求められているのだ。

（隊長はこともあろうにこいつを叱りつけているんだぞ!?）

ただの同僚という立場をこなせなくてどうする。

その一方で、これが王女であるわけがあるかと反発する心を抑え込んで、カイトは「なんでもない」と素っ気なく答える。

「えー、本当に？」

納得していない様子のルーシェの視線から逃れようと踵を返す。そしてろくに前も確認せずに踏み出すと柱にしたたかに額をぶつけた。

「だ、大丈夫？　やっぱりおかしいんじゃない？　なんか悩みでもあるの？」

（誰のせいだ！）

そう怒鳴り返そうとしたが、その前に割り込む声があった。

「――ルーシェ!!」

執務室から聞こえる怒声に、ルーシェはすくみ上がって「はい！」と返事をする。

「届けに行けといったはずの書類がなんでここに残ってるんだ!?」

「はいっ、申し訳ありません！」

ルーシェは結い上げた長い髪をなびかせて執務室へと駆けてゆく。

（あれを部下にしている隊長が耐えているんだぞ!?　自分が耐えられなくてどうする！）

そう思う一方で、

（隊長、本気で気づいてないなんてことは……）

一抹の不安が涌いたのも事実だったが、「……まさかな」と呟くと、カイトはいつもどおり雷が落ちつづける黒竜隊の執務室へと足を踏み出した。

執務室に入ると、スメラギがサイン入りの書類をつまみ上げていた。

（あ！　本当に書類が残ってる……!!）

「すっ、すみません……！」

ルーシェはそそくさとそれを受け取り、さっと目を走らせる。

（えっとこれは書庫戻しじゃなくて団長提出分よね!?）

団長提出分はどれだっけ!?　と抱えていた書類をわたわたと仕分け、団長行きの書類に重ねる。そして踵を返そうとしたところに「――ルーシェ」と声がかかった。

「はい!?」

あわててふりむくと、左右に結い上げた髪が大きくなびく。

スメラギはその様子にすこし驚いたように、けれども自分の中のなにかに重ね合わせるようにじっと見つめていた。

「……なにか？」
（わたしの顔になにかついてる……？）
しかしスメラギは答えず、なにやら考えこんでいるようだったがやがて「いや、さっさと行け」と指示をした。
（……？　なんだったの？　今さら気づかれた、とか？　……まさかね）
気にかかったのはたしかだが、命令は命令だ。
「はい！　失礼します！」とルーシェはスメラギに敬礼して、回れ右して部屋を辞した。

早足で去ってゆくルーシェと、なびく二筋の銀灰色の髪。
それを見送りながら思い出すのは、あの日見た王女の後ろ姿だ。
だがスメラギはふっと口端に笑みを浮かべると「まさか、な」と呟き、疑念を追い払うようにひとつ頭を振った。

あとがき

こんにちは。九月文です。本書をお手にとっていただきありがとうございます。銀の竜騎士団第2巻『王女とウサギの秘密の王宮』を無事お届けすることができて、ほっとしています。

本書の中身をかいつまんでお話しますと、

竜に嘉され国ローレンシア。その国の王女シエラは身分を隠して竜騎士団で見習いをしていましたが、アズィール帝国の使者を王女として迎えることになりました。その傍らには竜騎士団の上司であるスメラギがつくこととなり、さてシエラはどうするのでしょうか――？

ということで、2巻の舞台は『王宮』です。

1巻の舞台がスメラギのホームグラウンドの竜騎士団だったのに対し、2巻の王宮はシエラのホームグラウンド。ふたりの立場や関係が変わっていろいろ想いが複雑なようですよ。そのふたりにもっと複雑に振りまわされている人や、高みから面白がって見物している人もいるようですけどね。ウサギは普段ぼやぼやしてるくせに敵に回すと意外と怖かったという……本気でぶつかりあうふたりにご注目ください。

今回いくつか国が出てきたのでこの世界のご紹介を。（本文未読の方はご注意ください）

まずはローレンシア。王宮や竜騎士団のある〈神の山〉には万年雪や氷河があり、雪解け水の流れる裾野には森林がひろがる緑豊かな国です。

竜の加護を享ける女王によって代々治められ、現女王はシエラの母セレネ、夫である大公（シエラの父）はすでに亡くなっていて、セレネの兄（シリスの父）が宰相を務めています。

軍は陸軍、海軍もありますが、聖獣である竜を司る竜騎士団は別格で、竜騎士団の団長職は王族もしくは時の聖竜の主が務めます。実務経験が豊富で有能な人がなるというわけではなく、いわゆる名誉職ですね。今は王族であり聖竜の主でもあるシリスが務めています。

聖竜は〈陽〉、〈月〉、〈空〉、〈地〉、〈闇〉の五頭。たいていどの時代も三、四頭はいて、五頭揃っているときの方が多いです。色はそれぞれ赤、白、青、緑、黒。〈地〉というと茶色を想像しそうですが、ローレンシアは緑の国なので〈地〉は緑竜となっています。

竜は主が亡くなるとともに山に還り、数年してまた幼竜として転生します。あのデュラクにも幼竜の時期があったと考えるとちょっと撫でてみたい気もしますが、容赦なく噛みついてくるでしょうね。スメラギにも小さいときからなついていなさそうです。すくなくともルーのように愛嬌のある子ではなかったと思います。

つづいて、ローレンシアのお向かいのアズィール帝国。

アズィールはずっとローレンシアの隣にいたわけではなく、先にいたガルシア帝国を押しのける形で隣になりました。北のローレンシアをはじめ四方八方に戦争を仕掛け、その国土はいまやローレンシアと比較にならないほど広大になっています。ですが乾いた荒地が多く、人が住むにはやや厳しい環境の模様です。

皇帝によって治められ、皇子は三人。今回出てきたのは末皇子ですが、ちらちらと兄ふたりの情報も出ています。いろいろ油断ならない国のようです。

そしてフェルトゥナ王国。エンテ海という内海の南にある砂漠の国ですが、アズィールに攻め込まれて降伏しました。今はアズィールの支配下にあります。太陽神を崇め、王族は代々太陽とおなじ金色の瞳が出るという特徴があります。

あとは学生の彼の言っていた国。その国についてはあまり触れられませんでしたが、油断ならない人が油断ならない情報を仕入れたようですよ。

学舎時代から手のひらの上で転がされまくっていたスメラギですが、学舎時代ってどんな感じだったのでしょうね。学舎は男女比9：1のほぼ男子校状態、しかも7歳からずっと寮生活ですから他人とまったく関わらずに過ごせるはずもないですし。

シリスは王族として悠然と君臨して、カイトも淡白に周囲と付き合いながらそつなく過ごしていたんでしょうが、スメラギは学舎を卒業した今もあんな感じですからね。さぞかし衝突しまくったのだろうなと思いつつ、そういうにぎやかな毎日って楽しそうだなあとも思います。スメラギにとっては迷惑千万、しかも竜騎士になった今も大して変わりませんけどね。上官は彼ですしね。楽しい竜騎士団生活を陰からこっそり愛でたいと思います。

そういえば前巻でルーが翔べないのはどうして？　と悩んでいたルーシェですが、「それってこの体型のせいなんじゃない!?」と気づかなくて良かったです。

ルーの生活をあらためて見直してみると、1ルーシェと一緒に食事、2基本的に移動はルーシェの肩の上に乗っているだけ、3自分で移動するときはぽてぽて歩く、4ルーシェと一緒にお風呂でぬくぬく、5夜もルーシェとおなじ寝台でぬくぬく……そりゃ翔べるはずないですね。翔べないのはまちがいなく甘やかしたルーシェのせい、あやうく『銀の竜騎士団』はルーのダイエット本になるところでした。

この本がお手元に届くころには暑さは和らいでいるでしょうか。こちらは暑いです、ええ。今年は節電の夏！　ということでエアコンをつけずにいるのですが、あまりの暑さに耐えかねてプールに行ってきました。いいですね、プール。行くまでにサイクリングもできますし、

水は適度に冷たくて気持ちいいですし。仰向けにぷかーと浮いているのが好きです。

そういえば表紙をめくったところのプロフィール、この新海浜の話にはつづきがありまして。

私が新海浜に〈しんかいはま〉とルビを振っていたら、正しくは〈しんがいはま〉ですよと校正さんから突っ込みが入り、目が点に。……なんですと？

最初から〈しんがいはま〉だと知っていたらさすがに新横浜とおなじだとは思わなかったと思います。長年住んでいても知らないことが多いものですね……しみじみ実感した次第です。

さて最後になりましたが、イラストを担当くださいました明咲トウルさま。今回もおみ足が眩しいです！　涼しげな色遣いの隊服に、思わずうさ耳としっぽをつけたくなるような闊達なルーシェが可愛い！　ルーシェの髪やスメラギのマント、モールが風になびいていて美しさ倍増でした。素敵なイラストをありがとうございました！

製本に携わってくださった方々、特にタイトルロゴのデザイナーさま。シンプルでいてデザイン性の高いロゴに感嘆の息が尽きません。素晴らしいデザインをありがとうございました。

そして読んでくださったみなさまに心から感謝を。楽しんでいただけたなら幸いです。

またみなさまとお会いできることを祈りつつ。

九月　文　拝

BEANS BUNKO

「銀の竜騎士団　王女とウサギの秘密の王宮」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「明咲トウル」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」までお寄せください。

銀の竜 騎士団　王女とウサギの秘密の王宮
九月文

角川ビーンズ文庫　BB68-8　17004

平成23年9月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――旭印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-454508-6 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2011 Printed in Japan

第6回角川ビーンズ小説大賞 優秀賞&読者賞 W受賞!!

佐和山物語



時迷い姫と美貌の許婚の豪華絢爛あやかし絵巻!!

九月文
イラスト／久織ちまき

戦国の名残留める世の初め。大名家の姫・あこは、ナゼか三度も婚礼が延期になり、忽びで婚家に向かうことに。まだ見ぬ許婚に心ときめかせ、婚家の領地・佐和山に入ったあこだが、許婚の直継は人間離れした超美形で!?

一　あやかし屋敷で婚礼を
二　あやしの文と恋嵐
三　結びの水と誓いの儀式
四　君と別れのくちづけを
五　時の花嫁とはじまりの歌
短篇集　桜色の時はめぐり

●角川ビーンズ文庫●



好評既刊
❶タロットは星を導く
❷タロットは初恋を告げる
❸タロットは夢をいつわる
❹タロットは真実をうつす

超幸運体質のアイリは、憧れの中央官庁・七聖府（ツィン）に入るが、軍の新設部隊に配属され、超不運体質のハイヅカの相棒（パートナー）に指名されてしまう！　しかも、特殊なタロットを使える唯一人と見込まれ、戦いの前線に出ることに…!?

●角川ビーンズ文庫●

第11回 角川ビーンズ小説大賞 原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ヤングアダルト小説の新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のヤングアダルト小説界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で、150枚以上300枚以内

【応募締切】2012年3月31日(当日消印有効)

【発　　表】2012年12月発表(予定)

【審査員】(敬称略、順不同)
金原瑞人　宮城とおこ　結城光流

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の7項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)

■1200字程度(原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

■原稿には必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3冊に分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。(台紙付きの400字詰め原稿用紙使用の場合は、原稿を1枚ずつ切り離してからとじてください)

■ワープロ原稿が望ましい。ワープロ原稿の場合は必ずフロッピーディスクまたはCD-R(ワープロ専用機の場合はファイル形式をテキストに限定。パソコンの場合はファイル形式をテキスト、MS Word、一太郎に限定)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。プリントアウトは必ずA4判の用紙で1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰め原稿用紙にワープロ印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。

■手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。(原稿は1枚1枚切りはなしてください)

・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。

・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。

・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。

・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。

・第三者の権利を侵害した作品(既存の作品を模倣する等)は無効となり、その場合の権利侵害に関わる問題はすべて応募者の責任となります。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
(株)角川書店ビーンズ文庫編集部「第11回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784044545086

ISBN978-4-04-454508-6
C0193 ¥514E

定価：本体514円（税別）

1920193005141

BEANS BUNKO

銀の竜騎士団
王女とウサギの秘密の王宮

九月 文

王女シエラの初外交、失敗は許されない!!　シエラは身分を隠し、竜騎士団で修業中。鬼隊長スメラギには怒られてばかりだけれど、そばにいたい想いはつのっていくばかり……そんな中、シエラは王女として帝国の皇子の接待を命じられる。だけど、その側役にはスメラギがつくことに!?　王女とバレれば今の関係が壊れちゃう!!「今度こそ絶対気づかれる!!」秘密がいっぱいの王女と竜騎士の二重生活、一体どうなっちゃうの!?